

CREATURE MIXING 5

mnfikmyhk

春屋アロヅ
まだぎりぎり夏服だった

中学生には遅い時間に
川鶴鶴脇

幼少だったんです
Lagado

Fukapon
ぺったんこだけとさけどさ

繰り返すこと数百回
なぎ

ようこそ、あなたの世界へ

CONTENTS

実験	春屋アロヴ	02
比翼連理	川鶴鶴肋	16
不思議なことなど	Lagado	77
決意の魔法：こんメイ! 2	Fukapon	81
Alice in dating simulation game	なぎ	91
難解辛苦		94

mnfikmyhk Creature Mixing 5
in wonderland ——

実験

春屋アロヴ

違って、いかにもやつてみせた、という動き。

「殊に君のようになら少々人と違うところがあつて、なお迷いなく言

い切れるのは大したものだ」

途端に美紀の視線が鋭くなる。男は動じるどころか気付いてすらいない様子だ。

「だから世界とは何かと聞いたのだ。僕が思うに、世界とは『認識』だ」

「認識?」

「そう、認識だ。世界というのは『個が認識しているもの』といふのが僕の理解だよ。たまたま人類の比較的多くの人が同じような認識を共有できているが故に世界は普遍のものであるという幻想が巷に溢れているが、それはただの偶然に過ぎない。世界はごく個人的なもので、そして簡単に変容するものだ。例えば靈感がある人間とない人間とでは世界の範囲が異なる。色覚がない人間とある人間とでは世界の見え方がまったく異なる。わかるかね?」

「……理解できないことはないけど、それがオレと何の関係があるんだよ」

「大いにある。君は女性だ、というのが君自身の認識であり、周囲の認識でもある」

その証左に、と男は自分の服の襟元をちょいとつまんだ。美紀が着ているのは今通っている高校の制服。ブレザーにスカート、首元にはリボン。美紀の男っぽい言動を包み隠し、女として見せるもの。

「ほう。それは結構なことだ。実に結構なことだよ。特に君くらいの年齢では、自分のことを幸せだと言いつことなどできないものだ」

今度は美紀の方が肩をすくめて見せた。男の馴染んだ仕草とは

「ところで君、世界とは何だと思う」

そう言ったのは、白いテーブルを挟んで美紀に向かい合つている男。タキシードをきちんと着こなした彼は、まるで幼なじみに話しかけるような気安さで、かつ今時テレビでもなかなか聞けないような口調で話しかける。

「世界? 世界は世界だろ」

美紀の答えに男は苦笑して、すいと両手を広げて肩をすくめた。

「それでは君、答えになつていなかないじゃないか。定義はある言葉を別の言葉で表して初めて意味があるものだ」

「じゃーなにか、地球と宇宙とかか?」

「なるほど、宇宙も加えるわけだな」

馬鹿にするように言ったその男に、美紀はムッとして言い返した。

「何が言いたいんだよ」

「君の思う世界は君に優しいかね?」

まったく噛み合っていない、唐突な返事。美紀は返事をしようとして、それが字面ほどにわかりやすい言葉ではないと気付いた。

一旦しつかり飲み込んでから、改めて答える。

「ああ。オレは幸せだからな」

「ほう。それは結構なことだ。実に結構なことだよ。特に君くらいの年齢では、自分のことを幸せだと言いつことなどできないものだ」

「だが、君の認識はそれだけではないはずだ。違うかな?」

無言で返す。男は満足げに頷いて、続けた。

「すなわち、君は世界から制限を受けているということだ。だか

らこそ、君は着たくもない服を着せられ、取ろうと思つ行動を取れない。君の世界の行動規範から外れているからだ」

男は美紀の返事を期待していない。次の問い合わせまでは。

「では、その制限を取り払うことができるしたら、どうだろう？」

「取り払う……って」

「きっと君の今の世界は存外優しくないのだと気付くことだろう」

「お、おいちょっと待て」

美紀の慌てた様子に男はくすりと笑った。

「怖がることはない。これはあくまでも実験だよ」

そう言って男は立ち上がりると、こちらに背を向けた。そして上半身だけ振り返ると、気障な仕草で指をぱちんと鳴らした。美紀は思わず身を固くしたが、数秒待つも何かが起こった気配がない。思わず自分の体を見下ろしたが、変わった様子はなかった。

「では、君は君の世界に戻りたまえ。ここにいては始まらない」「戻るって……」

「ほら、世界が君を呼んでいる」
呼んでいる、という男の言葉がキーワードになったようなタイミングで、遠くからピピピピッと甲高い音が聞こえてきた。徐々に大きく耳元まで迫ってくる。それに耐えきれなくなつて、幹は手を伸ばした。

「戻るって……」

「ほら、世界が君を呼んでいる」

電車に乗る時に、辺りを見渡す。たまに二つ隣の駅から乗ってくる中学生からの同級生と一緒になることもあるのだ。姿が見当たらないから、向こうもいつもどおりに行つたのだろう。

教室をのぞくと案の定、友だちとしやべっていた。

「おはよ」

「ああ、井上。おはよう」

「おはー」

「おはよう」

「……夢、か」

幹はもぞりと体を動かしてぽんやりと目を開いた。手の先にある目覚まし時計。五分後にはまた鳴り出すだろうそれを見る。七

時。

「……あれ、何の夢だったつけ」

何やさすごいことを言われたような気がしたのだが、ぼんやりした頭では思い出せない。洗面所で歯ブラシを突っ込んだら少し頭がはつきりしたが、もう時間が経ちすぎていて霧がかったイメージが砂のように記憶から零れていく。

歯を磨いて顔を洗つて、爆発した髪を抑えつけながら思い出そうとしていたら、兄の浩太がのっそりと入ってきた。鏡越しに幹を見て、おはようの前に一言。

「何だ、朝から変な顔して」

「変な夢見た気がすんだけど、思い出せねーの」

「起きてすぐメモれよ、そういうのは。変な夢なら歌詞のネタになるかもしねーのに、もったいねえ」

半ば幹を押しのけるようにして顔を洗い始めた浩太と入れ違いに部屋に戻る。いつもなら歯を磨き終える頃には夢のことなど忘れているのだが、今日は妙に気になつた。それでも思い出せない。制服のネクタイまで締めても思い出しきれず、ついに諦めた。トーストをざくざくと食べて家を出る。

幹はもぞりと体を動かしてぽんやりと目を開いた。手の先にあ

る目覚まし時計。五分後にはまた鳴り出すだろうそれを見る。七

声をかけると、それぞれに挨拶が返ってきた。保土ヶ谷雅は人形のような無表情で、町田佳奈は元気が溢れるような微笑みを浮かべて、川合綾乃は柔らかな笑顔で。

「ちょっと井上君、これ見てこれ」

町田が幹に突きつけたのは携帯。のぞき込むと、毛もつややかな黒猫がまっすぐにこちらを見つめていた。

「うお、何これかわいい！ 町田んちの猫？」

「うちの従姉が昨日から海外旅行行っててさ、その間預かってんの」

何故か自慢げに胸を反らして、次々に写真をめくっていく。そのたびに幹が目を輝かせるものだからご満悦だ。

「井上君猫好きだったんだね」

「昔からな。その割に自分は縁がないみたいだが」

川合の言葉に保土ヶ谷が横から答えた。

「しゃーねーだろ。うちは親が両方犬派なんだよ。兄貴は両方だけど」

「あれ、浩太さんも猫派じゃなかつたのか？」

「いや、あいつ哺乳類はなんでも好きだぞ」

幹は携帯から目を離さずに口だけで答える。

「うおーす、井上」

「おう」

幹の肩を叩いたのは、入学以来仲のいい北田だ。

「あれ、北田君なんか今日早くない？」

「な。いつもならまだ駅だろ」

「いやお前ら、いつも遅刻してるみたいな言い方するなよ。大

体間に合ってるだろ」

来るなり町田と幹に突っ込まれて不満げな北田に川合が笑う。その顔を見て頬を緩めた北田は、ようやく幹の手元に興味を移した。

「さっきから騒いでっけど、何見てるんだ？」

「ああこれか？ 猫猫。黒猫」

「ちょっと井上君、それあたしのケータイ」

まるで我が物のように北田に見せる。お、かわいいじゃん、とは言ったものの、幹と比べると明らかに反応が薄い。

「あれ、お前猫そんなんに？」

「んー、てか動物は別にフツー」

「なんだつまらん」

「てゆーか井上君、そろそろ返しなさいそれ」

最後にじっくり見てから町田に携帯を戻す。と、北田が思いだしたようになに言つた。

「そういうや井上、昨日おつかれ。よかつたぞ」

「ん？ ああ、サンキュ」

「昨日？ 何かあったの？」

首をかしげた川合に、保土ヶ谷が答えた。

「井上のバンドが桶谷の駅前で演奏していたんだ」

「えっ！ 路上？」

「そんなことやってたんだ。ミヤちゃんは行つたの？」

「うん。前に聞いてたから行つてきた」

「そなんなど……井上君、どうして呼んでくれなかつたの？」

川合の視線が不意に幹に向いた。むーっと口を尖らせると実際以上に子供っぽく見えて思わず笑いそうになつたが、それはさすがにごまかした。

「いや、別に特に理由があるわけじゃ……というか待て、そもそも俺は誰も呼んでないぞ」

「んなこと言って、雅も北田君も行ったんじやん」

「あー、俺はたまたま通りがかつただけ」

「ほら。保土ヶ谷にしたって言ったのは俺じゃなくて俺の兄貴」

二人分の視線を受けて必死で言い訳する。保土ヶ谷もそれは正しいと頷いた。

「井上がバンドに入った頃から知つてたからな。行ける時は行つ

てるし、他のメンバーとも知り合いなんだ。情報は大体井上の兄さんからもらう」

「こいつ言いたがらないからなあ。せっかくうまいんだから宣伝

すりゃいいのに」

そう言つてぐりぐりと幹の頭を撫でる、というより振り回す。

それに反撃する幹の腕を川合がそつとついた。

「今度はあたしも呼んでね。絶対行くから」

「ああ、ありがとう……」

幹は微妙な顔になつてしまふのをどうにか我慢して、笑いかけた。

三時間目の英語が終わり、全員ががたがたと立ち上がつた。体

育なのだ。幹も体操服とジャージを片手に教室を出る。と、北田がすぐに追いついてきた。

「おい、井上」

「ん？」

「ライブさ、次やるときや川合さん誘つた後で俺も忘れずに呼べよ」

満面に浮かべたスマイルに、幹は呆れ顔で言い返した。

「お前、わかりやすくていいな」

「そうか？ 照れるな」

「褒めてねえ」

北田は幹に自分の想いを隠す気はないらしいが、他の人がいるところではこの話はまったくしない。本人に対してもかなり消極的だ。

「つか自分で誘えよ」

「いやお前そんな、彼女の前に立つだけで緊張してまともに話せない純情青年にやあハーデル高すぎだろ」

「どこの青年の話だそれは。今朝いきなりしゃべってたじやねーか」

「それはそれ、これはこれ」

からからと笑つてゐるところは何も考へてないようしか見えないが、実際のところ、話はそう簡単ではないことを幹は知つていた。

「あ、それとだ」

「あんだよ」

「お前さつさと保土ヶ谷さんと付き合え。そして川合さんによそ見させるな」

「なんつてそうなるんだよ！」

思わず声が出た。北田はニヤニヤしながら追い打ちをかける。

「いやだつて好きなんだろ？ お前が先に付き合っちゃえば俺も心配せずにいられるし」

「……何の心配だよ」

「川合さんがうっかりお前に惚れちゃつたりしたら大変だらうよ」

が

「馬鹿か」

そんなうっかりはハナからないと思っている口調だ。もちろん幹の方にもそんな期待も心当たりもない。更衣室で北田と手早く着替える。上下二段で幅もほとんどのロッカーがきっちり入っているのだ。もたもたしているとすぐそばのロッカーを使う人の邪魔になる。そしてそれ以上に、男臭い臭いが充満している。

寒い季節には外で球技、というのはお約束なのだろう。幹はグラウンドをぶらぶらと歩いていた。数十メートル先で同じチームになったサッカー部員とテニス部員がひたすら相手ゴールを攻め立てている。別段体を動かすのが嫌いというわけではないのだが、気付いたら一人になっていたのでゴールキーパーを見捨てるわけにいかなくなつて、センターライン辺りをぶらついているのだ。

ぼーっとしていると余計なことを考えてしまう。

保土ヶ谷が幹とよく一緒にいる理由は、正直なところわからない。単純に中学の時からの流れで、ということかもしれない。バンドのこともあると思う。

保土ヶ谷は部活には入っていないが、それでも高校からの友だちがそれなりにいる。だが、学校で昼休みに廊下でしゃべっていることはあっても、一緒に帰ることはほとんどない。帰りは大抵川合と町田も含めて四人か、それに北田が入ってきて五人になるかのどちらかだ。

川合とは高校に入ってからの付き合いだ。よく一緒にいるのは、

一学期に川合がクラスの一部の女子に目の敵にされていた時に、常に川合のそばにいた保土ヶ谷をフォローするという形で、三人

一緒にいる時間が長かったから、というのが一番大きいと思う。幸いそれほど深刻な事態にはならず、夏休み前には収まったので、町田が加わった三人と今でも一緒にいることが多いのは單に一緒にいたいからだ。ただ、それはあくまで川合や町田も含めてであって、保土ヶ谷と幹とが一人でいることは——。

「井上！」

ボールが顔面に直撃、などという漫画みたいな展開はなかたが、すぐ横をあっさり抜かれた。慌てて全速力で追いかける。だが、運動神経は悪くないとは言つても日頃大した運動はしていないのだ。ドリブルしている相手なのに追いつけない。結局あっさりと失点してしまった。

「井上……」

「頼むよ」

「悪い」

味方に謝つて、少し前の方に寄つた。ボールや他の人の動きを見ながら適当に動いていると、雑念は浮かんでこなかつた。

そんなこんなで目立った活躍もせずに授業が終わつた。着替え教室に戻る途中で、先に終わつたらしい女子に追ついた。長身の保土ヶ谷と小柄な川合の組み合わせは後ろからでもすぐわかる。町田らしい姿が見当たらないのは、別のグループと一緒にいるのだろう。

「おーい

「井上。大活躍だつたな」

「……なんで見てんだよお前は」

振り返るなりそんなことを言うので思わず怒つたような声になる。保土ヶ谷はいつもどおりの調子で淡淡と言う。

「ちょうどライトを守っててな。サッカーグラウンドがよく見え

「ん、おう。待たなくていいのか？」

「たんだ」

「川合、こいつ説教してやってよ。授業中によそ見してたらしいぞ」

「え、でもミヤちゃん、近くに来たのは全部しっかり取ってたし、キャッチャーまでまっすぐ返球できちゃうんだもん。すごかった

よ」

「打点もあるしな」

「自責点は？」

「外野手にそんなものはない」

声や表情こそ淡淡としているが、面白がっているのは間違いない。肘で軽く小突いたが、びくともしなかった。

放課後のチャイムが鳴ると教室中が一気に騒がしくなった。

幹は軽く伸びをしてからのろのろと片付け始めた。川合の席を見やると、保土ヶ谷と町田が集まっている。声をかけたものかと考えていると、北田が視界に割り込んできた。

「井上、今日俺委員会だから先帰ってくれ」

「おう。……ってことは川合もか」

「ああ。ちゃんと帰りは送つてくれから」

「誰も聞いてねーよそんなこと」

「言わせろよ」

ニヤニヤしている北田は放つておいて、保土ヶ谷たちの方に行

く。話は終わっていたのか、向こうから話しかけられた。

「井上。帰るか」

以前は大抵、委員会が終わるのを待つて一緒に帰っていたのだ。後ろで北田がこちらを睨んでいる気がしたが、気に留めない。

今日はは長引きそうだから、先に帰つて。いつも待つてもらうのも悪いし」

「と、いうことだ」

川合が済まなそうに言うのを、保土ヶ谷が言い続いだ。

「わかった。んじゃ行くか。川合、また明日な」

「うん、またね」

幹が歩き出すと、保土ヶ谷と町田もそれぞれに挨拶をして続く。靴を変えて外に出ると、びうっと冷たい風が吹いてきて、幹は思わず首をすくめた。保土ヶ谷もマフラーをそっと上げる。

一人町田は寒さなど感じてないような様子で幹の隣に並んで、感心したような調子で言った。

「にしても井上君って、女の子ばっかのところに平気で来るよね

「どういう意味だ？」

「いや、別に悪いってんじやなくてさ。雅と綾乃とくつついてた時も全然普通だったし、この三人でも居心地悪いとかないでしょ？」

「ないな。保土ヶ谷とは中学の時からこんななんだし、元々女子の方が多い集団にいるの慣れてるんだよ。中学の軽音とかなんですか女子多くてさ」

「そうなんだ、馴染んでるなーと思ってさ。のわりにモテてるわけじゃないしね」

「やかましい」

肩の辺りにぽふっと突っ込むと、町田は笑つて次の話題を口に

した。

駅に着いて町田が反対方面のホームに降りていくと、急に静かになる。気まずい沈黙ではない。いつものことだ。

さして待たずに電車がホームに滑り込んで来る。それなりに混んでいる車内で並んで立てる場所を確保して、幹はふと言った。

「そういやこっから一人で帰るのって久し振りだな」

「いつもは綾乃がいるからな」

保土ヶ谷も同じような調子で応じた。

「いつ振りだろう。確かに前に綾乃が風邪で何日か休んだ時以来か」「あれいつだっけな。九月だっけか」

「九月末だな。まだぎりぎり夏服だった」

幹もそうだったかな、と思い出す。その時はいつも降りる川合の家の最寄り駅ではなく、幹の家の最寄り駅でコーヒーを飲んだ

ような記憶がある。

「そうだ。井上、私の家に来ないか？ 昨日クッキーを焼いてみたんだ」

「クッキーか。いいな、行く」

幹はあっさりと頷いた。が、内心は「クッキーか。いいな」なんて気楽なものではない。保土ヶ谷がお菓子を作る、と聞いたのは初めてだし、家に誘われたのも初めてだ。

「お前普段からお菓子とか作るの？」 クッキーなんて初めて聞いたな

「いや、先週末に従姉が来ていたんだが、その人に教わったんだ。その人はよく作るらしくて、ついていくのが大変だった」

「じゃひょっとして自力で作るの初めてか」

「初めてだ。胃薬もあるから安心していい」

「いやその前に味見しろって」

定番のボケに突っ込むと、保土ヶ谷はそっと視線を外した。

「そこで黙るなよ」

「冗談だ。ちゃんとできると思う」

保土ヶ谷の方は、思い切って誘った、とかドキドキする、などという様子はまったくない。自分ばかり意識しているのか、と悔しいような恨みがましいような気分で変化の少ない横顔を見つめた。

幹が保土ヶ谷の家に行くのは初めてではない。中学の時に一度、荷物持ちについてきたことがあった。その時は両親と一緒に住んでいたのだが、今は親が転勤で遠方にいるので、同じ家に独り暮らしだ。

「お邪魔します」

「どうぞ」

黒髪に半ば以上隠れた背中を追って家に上がる。元々家族三人で暮らしていたのがよくわかる広さの部屋だ。一人で住むには少々広い。

「居間のソファにでも座っててくれ」

「ああ、サンキュ」

「あ、コーヒーと紅茶とどっちがいい？」

「ん……紅茶」

クッキーだから、と思ってそう答えると、頷くまでにわずかに間があった。

「訊いておいてよかったです。てっきりコーヒーと答えるかと思つてた」

「おい」

保土ヶ谷の揺らぎのほとんどない声で言われると、「冗談なのか

本気のかがさっぱりわからない。何気なく食卓の椅子に手をかけると、気配に気付いた保土ヶ谷が振り返った。

「ああ、そっちのソファーの方で待っててくれ。すぐに準備するから」

「ん？ ああ」

引いた椅子を戻して、ソファーに向かう。腰を下ろして、なんとなく違和感を覚えた。家に上がった時もそうだが、妙に落ち着く。普通、男子が好きな子の家、それも独り暮らしの家に来たともなればコーヒーを紅茶だと言つて出されても気付かないくらい緊張するものではないのだろうか。まるで兄貴の部屋にいるような感覚に疑問を覚えてきた。

「お待たせ」

声がかかつて、思考が中断する。テーブルに紅茶が並べて置かれ、その間に十枚ほどのクッキーが皿の上に重なっていた。

保土ヶ谷が隣に座る。肩が触れあわないギリギリくらいの距離に、さすがに心臓が跳ねる。いつも教室でこれくらいの距離で並んでいてもあまり気にならないのが、明らかに右側に意識が集まるのは、周りが静かだからか、保土ヶ谷の家だからか。

「んじゃ、いただきます」

「どうぞ」

クッキーに手を伸ばすと、今度は保土ヶ谷が緊張する番だ。と思つてはみるものの、今の一言では緊張しているのかはわからぬ。つくづく読みにくい。

葉っぱの形のクッキー一枚取つて口に運ぶ。思ったよりも硬

い歯ごたえと、ふわっと広がるレモンの酸味とわずかな甘味。

「うまい」

自然にそう言った。言ってから、驚いた。

「うまい、これ。お前、こんな作れたんだな。ホントに初めてか？」

「教わってる時を除けば、本当にこれが初めてだ」

珍しく、保土ヶ谷が明らかにほつとした声で言った。どうやらそれなりに緊張していたらしい。よく見ると頬もわずかに緩んでいる。

「初めてでこれか。大したもんじやん」

言いながら二枚目に手を伸ばす。保土ヶ谷は手を伸ばさなかった。

「お前の好みに合うかどうか心配していたんだ。気に入つてもらえてよかつた」

保土ヶ谷の視線はまっすぐに幹の目を見ている。幹はそれをまっすぐに受け止めて、今度こそ全身が反応した。顔がぱーっと熱くなる。他意はないのだ、試食役なんだから、と思つても、内心で言い聞かせたくらいで止められるものではない。

「どうした？」

急に真っ赤になればそれは訊くだらう。幹は何と答えたものか考へる余裕もなく、ただ時間を稼ぐためだけにもごもご言つた。

「何かおかしかなこと言つたか？」

「いや、おかしかなことだ」

その時に継いだ言葉は、考へてのものではなかった。

「好きな奴にそんなこと言われたら、こうなるだろ」

言い切つて、反応を待つ。保土ヶ谷は一瞬きょとんとして、そ

れからさあっと頬を紅潮させた。保土ヶ谷がこんなに鮮やかに表情を変えるのを、幹は見たことがない。

そのままわざかな間、二人とも言葉にならない言葉をかけ合い、ややあって保土ヶ谷がそれを言葉に乗せた。

「……井上、誤解があるといけない。今のこと、ちゃんと、言つてくれないか」

「ごもりこそしないが、一言一言、恐る恐る口にする。幹は逆に早口になりそうなのを抑えて言つた。

「あー、その……お前のこと、好きだ」

保土ヶ谷はこくり、と小さく頷いて、一呼吸おいてから「私もだ」とささやくような小声で言つた。

幹はわずかに迷つて、ゆっくりと手を伸ばす。保土ヶ谷の二の腕に触れ、背中に回して、肩をつかむ。そのまま引き寄せるときの体は柔らかくて、温かい。

幹の背中にも、ゆっくりと保土ヶ谷の腕が回る。それに気付いて目を上げると、幹をじっと見ていた保土ヶ谷と至近距離で目が合つた。

「保土ヶ谷……」

「井上……」

ただ、お互いの名前を呼ぶ。いつもなら何気なく口にする言葉が、今は感情を、想いを、どんな美辞麗句よりも雄弁に伝えた。背中に回した腕に少しだけ力を込めて、わずかな距離をゼロにしようとした、その時。

「うお！」

ぶーん、ぶーん、と幹の携帯が鳴りだし、幹は飛び上がるんば

かりに驚いた。保土ヶ谷も幹の反応に、びくりと身を震わせた。

「……び、びびった……」

「携帯か」

「ん。……その、ごめん」

「それはいいんだが……通話か？」

メールの着信ならすぐに収まるはずが、ぶーん、ぶーん、と唸りっぱなしだ。

「いいよ、そのうち止まるだろ」

「……一応出ておけ。何か大事な用かもしれないし、私のことは急がなくともいいんだから」

そう言われてしまうと、出ないわけにもいかない。一旦身を離されて、幹は渋々携帯を取つた。着信元を見もせずに電話を見る。

「はい」

『あ、井上か？ デート中に悪い、ちょっと助けてくれ』

北田の声だ。デート中どころじゃねえよ！ と内心で悪態を吐きつつ、次の言葉を待つ。

『さっき川合さんを家まで送つていったんだけどさ。帰りに迷つちまって……どう帰ればいいんだ？』

「馬鹿かテーマは！」

思わず叫んでしまった。そういうえば、と思い出す。北田はかなりの方向音痴で、初めての道では確実に迷う。地図を渡しても迷う。川合と同じ駅の反対側に住んでいるから、近所だからとか適当なことを言って家までくつついて行って、さて帰ろうと振り返つたところで道がわからなくなつたのだろう。

「携帯の地図とかあるだろ」

『あんなん使い物になるかよ。自分がどっち向いてるのかもわか

んねーし携帯の画面ちっちゃいからすぐそばしか表示されねーし』

「……北田か?」

「……ああ。川合を家まで送つていって帰れなくなつたらしい」

保土ヶ谷の声はすぐそばから聞こえた。幹の肩にもたれかかる

ようにして、幹を見つめていた。間近で見るほんのりと色づいた

頬に、一瞬言葉が出なかつた。

『綾乃の家からだと、たぶん駅ビルの方は道から見えてるだろう。それを目指せばいい』

『もしもし? お前そっからLOTUSの看板見えるか?』

『LOTUS? デパートの? えーっと……あ、見えた見えた』

『よし、そこを目指してひたすらまっすぐ歩け。そのうち着く』

『何とか行ってみるわ。サンキュー』

通話を切つて、思わず溜息を吐く。

【あの馬鹿】

ついでに電源ボタンを長押し。味気ないプリセットの待ち受け

画面が真っ暗になつたのを見て、幹はかばんの上に携帯を放り投げた。

【これでもう邪魔は入んねーぞ】

【入らないな】

そう返した保土ヶ谷はどこか楽しんでいるように、幹には聞こえた。

抱きしめるのではなく、保土ヶ谷の肩を抱くようにして、またすぐ近くで目を合わせる。保土ヶ谷も自分の腕を片方だけ、幹の背中に回した。さっきよりも抵抗なく、顔を近づける。今度こそ、唇が触れ合つた。

永遠と思えるほど長いキスの後。また幹の肩に頭を乗せた保土ヶ谷は、耳元にそっとささやいた。

「私の部屋に行くか? ここは少し窮屈だ」

「……お前、俺がヘタレで何にもしないと思つたら大間違いだぞ?」

【何をする気だ?】

言葉はあくまでも平静で、口元に笑みを浮かべたりもしない。

人によつては冷や水をかけられたようになりそうな状況だが、幹にはむしろあまりにも無防備に甘えているように映つた。

【お前に求められるのなら、何をされてもいいな】

保土ヶ谷はふと視線を外して、幹が答える前に重ねて言つた。

息を飲んだ幹と、また視線を合わせる。視線が絡んだ瞬間、幹は思わずキスをしていた。

唇が離れた瞬間、まだ吐息がかかるくらいの距離で、保土ヶ谷は言った。

【名前で呼んでくれ】

【……みやび】

【雅】

【その声に呼ばれたように、今度は保土ヶ谷の方から、唇を重ねた。】

美紀は白いテーブルに元のように座つてゐる自分に気付いた。目の前にはタキシードをきちんと着こなした、顔の見えない男。さっきまでの、興奮といとおしさとで赤熱していた頭が、急激に冷えていく。そして理解した。

「いや、都合よすぎだろ。こんないろいろうまくいくかって」

「何、実験はある程度の条件を揃えて行うものだ。それに、君にはいかにも都合よく見えたかも知れないが、個々の要素を取り出してみれば、決して起りえないと断言するほど突飛ではないよう思うがね」

男はそう言って、テーブルに肘をついた。挑むように美紀を見上げる。

「もちろん、これはあくまでも君を制限している今¹の君自身の世界にはない可能性だ」

「んなこたわかったるっての。でもそれがなんだってんだよ」というと?」

「そりや男だったらこうなったかもしれないけど、オレの体が女だからこそ実現することだってあるだろ。それが今のよりも悪いとは言い切れないんじゃねーの?」

美紀の答えに、男は笑い出した。先ほどまでの芝居がかつた言動が嘘のよう、素直で朗らかな笑いだった。

「なるほど、それが君の答えか。よくわかったよ。では今度こそ、君の世界に戻りたまえ」

その言葉が台詞になっていたように、遠くからピピピピッと甲高い音が聞こえてきた。徐々に大きく耳元まで迫ってくる。それに耐えきれなくなつて、美紀は手を伸ばした。

ピピッ。

「……夢、か」

幹はもぞりと体を動かしてぼんやりと目を開いた。手の先にある目覚まし時計。五分後にはまた鳴り出すだろうそれを見る。七時。

「……あれ、何の夢だったっけ」

何やらすごいことをしたような気がしたのだが、ぼんやりした頭では思い出せない。洗面所で歯ブラシを突っ込んだら少し頭がはつきりしたが、もう時間が経ちすぎて霧がかつたイメージが砂のように記憶から零れていく。

歯を磨いて顔を洗って、爆発した髪を抑えつけながら思い出そうとしていたら、兄の浩太がのつそりと入ってきた。鏡越しに美紀を見て、おはようの前に一言。

「何だ、朝から変な顔して」

「変な夢見た気がすんだけど、思い出せねーの」「起きてすぐメモれよ、そういうのは。変な夢なら歌詞のネタになるかも知れねーのに、もったいねえ」

半ば美紀を押しのけるようにして顔を洗い始めた浩太と入れ違うに部屋に戻る。いつもなら歯を磨き終える頃には夢のことなど忘れているのだが、今日は妙に気になった。それでも思い出せない。

制服のリボンを留めても思い出しきれず、ついに諦めた。トーストをざくざくと食べて家を出る。

電車に乗る時に、辺りを見渡す。たまに二つ隣の駅から乗つてくる中学からの同級生と一緒になることもあるのだ。姿が見当たらないから、向こうもいつもどおりに行つたのだろう。

教室をのぞくと案の定、友だちとしゃべっていた。

「おはよ」

「ああ、美紀。おはよう

「おはー」

「おはようミキちゃん」

声をかけると、それぞれに挨拶が返ってきた。保土ヶ谷雅は人形のような無表情で、町田佳奈は元気が溢れるような微笑みを浮かべて、川合綾乃は柔らかな笑顔で。

「ちょっとと美紀、これ見てこれ」

佳奈が幹に突きつけたのは携帯。のぞき込むと、毛もつややかな黒猫がまっすぐにこちらを見つめていた。

「うお、何これかわいい！ 佳奈んち猫飼ってたっけ？」

「うちの従姉が昨日から海外旅行行っててさ、その間預かってんの」

何故か自慢げに胸を反らして、次々と写真をめくっていく。そのたびに美紀が目を輝かせるものだからご満悦だ。

「ミキちゃん、猫好きだもんね」

「昔からな。その割に自分は縁がないみたいだが」

綾乃の言葉に雅が横から答えた。

「しゃーねーだろ。うちは親が両方大派なんだよ。兄貴は両方だけど」

「あれ、浩太さんも猫派じゃなかつたのか？」

「いや、あいつ哺乳類はなんでも好きだぞ」

美紀は携帯から目を離さずに口だけで答える。

「うおーす、井上」

「おう」

美紀の肩を叩いたのは同じクラスの北田だ。

「さっきから騒いでっけど、何見てるんだ？」

「ああこれか？ 猫猫。黒猫」

「ちょっとと美紀、それあたしのケータイ」

まるで我が物のように北田に見せる。お、かわいいじゃん、と

は言つたものの、美紀と比べると明らかに反応が薄い。

「あれ、お前猫そんなんに？」

「んー、てか動物は別にフツー」

「なんだつまんねー」

「てゆーか美紀、そろそろ返しなさいそれ」

最後にじっくり見てから佳奈に携帯を戻す。北田はそのやり取りに笑って、自分の席に行つた。その後ろ姿を見送つて、美紀はふと違和感を感じた。

——あれ、このやり取り前にやつた……？

今度は雅たちに視線を戻す。佳奈が猫の話を続けている。この話は教室では聞かなかつた。

——既視感^{アレゾン}でやつか。

放課後のチャイムが鳴ると教室中が一気に騒がしくなつた。

美紀は軽く伸びをしてからのろのろと片付け始めた。綾乃の席を見やると、雅と佳奈がもう集まっている。かばんを持って行くと、話は終わっていたのか向こうから話しかけられた。

「美紀。帰るか」

「ん、おう。あれ、綾乃は帰んないの？」

「あ、あたし今日委員会なんだ。長引きそうだし、先に帰つてて」

「と、いうことだ」

綾乃が済まなそうに言うのを、雅が言い継いだ。

「わかった。んじゃ行くか。綾乃、また明日な」

「うん、またね」

美紀が歩き出すと、雅と佳奈もそれぞれに挨拶をして続く。靴を変えて外に出ると、びうっと冷たい風が吹いてきて、美紀は思

わざ首をすくめた。雅もマフラーをそっと上げる。

一人元気な佳奈のおしゃべりに合いの手を入れながら駅に向かう。駅に着いて佳奈が反対方面のホームに降りていくと、急に静かになる。気まずい沈黙ではない。いつものことだ。

さして待たずに電車がホームに滑り込んで来る。それなりに混んでいる車内で並んで立てる場所を確保して、美紀はふと言った。

「いつもは綾乃がいるからな」

雅も同じような調子で応じた。

「いつ振りだらう。確か前に綾乃が風邪で何日か休んだ時以来か」「あれいつだっけな。九月だっけか」

「九月末だな。まだぎりぎり夏服だった」

美紀もそうだったかな、と思い出す。一日は佳奈と一緒に三人でお見舞いに行つたが、翌日からはしばらく二人で帰ったのだ。

「そうだ。井上、私の家に来ないか？ 昨日クッキーを焼いてみたんだ」

「クッキーか……え！」

美紀はあっさりと頷きかけて、思わず目を見開いた。

「どうした。私がクッキーを作るのはそんなに驚くことか？」

「あ、いや、そうじゃなくて、いや、すげー食べたいんだけど、えーと」

雅の様子は一見変わりないが、想定外の反応に内心傷ついている。そう思った美紀は大慌てでフォローしたが、そもそも自分の動搖が収まっているので何を言いたいのかよくわからない状態になってしまった。

「ああ、わかった。わかったからちょっと落ち着け」

雅に背中をさすられながら深呼吸。三度くらいやつたら落ちていた。

「すまん」

「いい。落ち着いたか」

「だいぶ」

「何事だ？」

「いや、それが今ようやく思い出したんだけど昨日の夢で……」
言いかけて、ぴたりと止まった。考えるまでもなく、本人相手に説明するのは気まずい。いくら雅は幹の内面が男であると知っているとはいえ、普通に考えれば同性なのだし、なお悪いことに相手は他ならぬ雅自身なのだ。

「あ、後で言う。しかしお前、クッキーなんて初めて聞いたな。前から作れたっけ？」

「いや、先週末に従姉が来ていたんだが、その人に教わったんだ。その人はよく作るらしくて、ついていくのが大変だった」

話をそらしたことには何も言わずに合わせてくれた。「後で」と言ったのを忘れたりはしないので、おそらく家でクッキーを食べながら全部言わされるだろう。その時にどんな顔をすればいいのか、どんな顔をされるのか、不安が霧のように心に広がっていく。それには背を向けて記憶にある言葉を口にする。

「じゃひょっとして自力で作るの初めてか」

「初めてだ。胃薬もあるから安心していい」

「いやその前に味見しろって」

定番のボケに突っ込むと、雅はそっと視線を外した。

「そこで黙るなよ」

「冗談だ。ちゃんとできると思う」

——ああ、知ってる。
その言葉は不安と一緒に、胸の奥底に突っ込んだ。



比翼連理

川鶴鶴助

舌つ足らずな声と同時に、凄まじい衝撃が身体を貫いた。
背中を叩かれた、と理解するのに二秒ばかり要する。

涙目で振り返ると、

W1 ○月○日 木

ヒロ君、いいこと思いつきました。

会えないのは仕方ないけど、いちいち山根さんに言伝じや効率
が悪いでしょ？
だから、せめてメールで近況報告しませんか？

萌衣

W1 ○月○日 金

＊＊＊

クジ引きの結果に従つて座席を移動。

皆、周囲のメンツを確認しては一喜一憂しているようだが、俺
はそれどころじゃない。

もう一度携帯の画面を見る。

朝から何度も確認し直したメールの差出人の名前は「萌衣」。
未だに信じられない。

でも、こんなに嬉しいことはなかった。

彼女が確かにそこにいるって事が実感できたんだから。

「どむつ。」「げほっ！」

「本日からお隣で御一緒させていただきました」
瞬間的な印象は、お人形。小さな身体に不釣り合いな、大人びたアルカイックな微笑。

変化。

「七瀬鈴菜だよん、よつろしつく♪」

……みょうちくりんな生き物が来た。

その生物はやたら白い八重歯を見せてにかっこ笑った。

ふわんふわんだがちよろっちょろの色素の薄い髪を頭の両側で
くるくるという子供っぽい髪型だが、今のこの表情にはこの上もなく似合っている。

「今日からマヂダチだからリンリンて呼んでよろし。ええと……
はっ！」

たった五秒で馴れ馴れしくなりやがった。

いつも騒動の中心にいる女だ。間違いない。人見知りゼロで元氣の有り余っている、怖いもの知らずわんころ系女子。

「人の名を聞く前に自分から名乗れっ！」
「指さすな！ 自分で勝手に名乗ったんだろうが！」
わけわかんねえ。

……さっきのはこいつに叩かれたのか？？

ゴリラにでも張り手されたような衝撃だったが……跳び蹴りで
も食らったのか？

攻撃を加えるとは、なんて非常識な奴。

「高天寛彰です。結婚してください」

もう一人の頭痛の種が、逆サイドから襲撃してきた！

「勝手に答えるな、つうか勝手にプロポーズすんな！」

鈴菜と称するわんこ女と同じ顔で同じ髪型の女子。

テレポートしたわけじゃない。見た目で一つ決定的な違いがある。こっちは右目に眼帯（ベンギン柄だよおい！）つけてるから

区別は簡単だ。

有名な一卵性の双子、七瀬姉妹。撫菜^{なでなな}と鈴菜に挟まれてしまつた。

いやまつたく、自分が巻き込まれてみると想像以上の無茶苦茶っぷりだな。

「ごめんなさいもうしませんあやまりますこれこのとおり」

眼帯女撫菜がふかぶかーと頭を下げるとともに、二つ尻尾もへろんと垂れ下がる。

間違いない。全然反省してねえ。

「我が魂の同胞ペンペンになんて非道な仕打ち！ ヒロアキくんは鬼ですか、悪魔ですか!?」

「なれなれしく名前呼ぶな！ で、俺が何した!?」

「抑えてリンリン。あたしは気にしてないから」

眼帯女はそう言うと、ゆっくりとこちらに向き直った。

一つだけのでつかい瞳に凝視される。

「高天寛彰」

「何だよ……」

フルネーム呼び捨てかよ。

「語尾にびっくりマークつきすぎ。今のうちに落ち着くことを覚

えないと、いつか脳出血で倒れるから」「……ご忠告ありがとうよ」

つかれる。無茶苦茶つかれる。

明日からこんなやつらに挟まれて授業受けるのかよ。勘弁してくれ。

……びっくりした。

まさか萌衣からメールをもらえるなんて思わなかつたけど、確かにグッドアイディアだと思う。

この方が微妙なニュアンスも伝わりやすいしな。山根さん挟むとどうも伝言ゲーム化してる気がするし。

早速今日の話を書くよ。

今日は新学期の始業式だった。

クジ引きで席を決めたたら有名な七瀬の双子に挟まれた。

やたら馴れ馴れしいのと、ぼそぼそしゃべるベンギン眼帯。ど

つとも子供みたいな二本結びにしてる。

どっちもわけわからん。すごく変な奴ら。

ドラマの練習はちょっと調子よかつた。

p.s. 明日は外出で遊んで来ていいよ。いや、是非行ってこいつて。

寛彰

W1○月○日 土

ありがとう。今日は思い切って外出してみました。
一通りのウインドウショッピングできました。

コミックも漫喫で読んできました。

その娘たち、二人とも可愛いいんでしよう?△双子

私もツーテールにしようつと。

萌衣

W2○月○日 日

見た目可愛いとは言わない。△七瀬姉妹

でもあいつらわけわからんし、絶対に萌衣の方が可愛い。

今日のドラムは微妙だった。

寛彰

W2○月○日 月

褒めてくれてありがとう、って言つていいのかな? (苦笑)

できれば、でいいんだけど、続きを読むみたいで「ざばん」「ゆ

んゆん」の新刊もあると嬉しいと思います。

萌衣

W2○月○日 火

ドラムセットが新品同然になつてた。萌衣が診てくれたんだな。
頼み事上手すぎ。これでダメって言つたら俺悪者じゃん。△ざ
ばん&ゆんゆんの件

買うのまでは許可するから、置き場所だけはくれぐれも気をつ
けるように。

明日の夕方なら空いてるよ。

寛彰

W2○月○日 水

「ちょいとそこのネギしおった美少女」
「ネギ?」

振り向けばきんきら金髪。

派手を通り越して神々しいまでにキラキラした、いやに露出度
の高い服のお姉さんが仁王立ちしてた。
「……春でもないのに」

関わり合いにならない方がいいと直感。

いつまでもヒロ君を待たせるわけにも行かないし。

「こちら、そこのみつくミクなロングツイテつ娘！」
踵を返したところで、既に目の前に回り込まれている。なんて
機動性。

既にロックオンされたた模様。

「察するに、私のことでしょうか？」

「イグザトトリィ！」

気づいたときには両肩をがっしりと捕まっていた。

うわ、全然反応できなかつた。

見た目も中身もただ者じゃない。

「ええと、何の御用でしよう？」

私よりは大きいけど、大人の女性としては背は高い方とはいえない。

でも凄い存在感。二十代中頃くらいかな？

おでこには捻れた角っぽい形のアクセサリ。きっと指揮官機なんだろ。

「私と一緒にバンドやりなさい」

命令形ですか。

＊＊＊

ありがとうヒロくん。

放課後早速ざばん買いに行きました。

道を歩いてたらユリさんって人につかまつて、何故かバンドにスカウトされちゃつて。

話だけは聞くって約束させられてしましました。

申し訳ないんだけど、今度の日曜の昼に時間もらいますか？

帰りに山根さんが途方に暮れてたので保護しました。GPS携

帯を充電中だというのに、近くだと思って油断したそうです。気をつけてあげてください。

萌衣

W2〇月〇日 木

なんかよくわからんけど。週末は特に予定無いから何とかなるよ。

でも、楽器やつてみせたわけじゃないんだろう？ それってヘンじやないか？

その人本当に信用できるのかな？ 気をつけて。

今日のドラム練習はいまいち調子悪かった。

山根さんは携帯二つ持つてもらう事にした。

寛彰

W2〇月〇日 金

「あなたのドラマでしよう？ 立ち居振る舞いでわかるわ」

つて初対面で言い切られちゃいました。

私の素性を知っている人がいる筈がないし、本当に目利きだとしたら大したものだけれど。

もしかして業界の人かも。今度お父さんが帰ってきたら尋ねて

みてください。

個人的な印象としては、少なくとも小細工を呈するようなタイプじゃない気がします。

萌衣

W2
○月○日 土

萌衣が信じるっていうなら、もう止めないけど。

なんかあつたら俺を呼ぶんだぞ。

今日はがつづり練習した。だいたい調子を取り戻せたかな。

山根さん結局夜まで起きてこなかつた。しんじらんねー。

昨日のカレーがたっぷり残つてたし、冷えても旨かつたけど。

寛彰

W3
○月○日 日

＊＊＊

着いたのは、"うさぎの穴"なる小さなアニメグッズショップだった。

これ、入るのにちょっと勇気がいるな。

「ああ、その長いツイテ。聞いてる聞いてる。こっちこっち」

店先でうろうろしてると、エプロンに糸目のおにいさんが声をかけてきた。

「そっちの裏が倉庫になつてゐるから」

「……ええと」

ちらりと見回しただけでも、店内はそっち系のフィギュアやボスターであふれかえつてゐる。迷彩服やガンダムの装甲を着込んだりちゃん人形とかもあるし。

これは早まつたか？

「あー、うんうん、後ずさらなくていいから。怪しく見えるけど大丈夫大丈夫。そりや美少女は大好きだけど、クイーン、もといユリさんの関係者に手え出すほど命知らずじゃないから」

やたら重ね言葉を連発しながら、微妙に信用出来ない台詞を吐く。

見た目も含めてものすごく怪しいおにいさんだが、ユリさんの名前を出した時に声が震えていた。

ここは彼女の威光を信用する事にする。
「先に行つてもらえます？」

「……信用無いなあ」

もちろん気は抜かない。バッグの中にはちゃんとステッカーを持つてるし、妙なそぶりを見せたらドラムショットタイフーン決定。

「こっちこっち」

倉庫の奥の奥、空の段ボールを三つほど横にどけると、地下へと続く階段の入り口が出てきた。

これ、洪水になつたら危なそう。

「もちろん、他の人には内緒にしておいて欲しいんだけど、お嬢ちゃんは次からは勝手に入つて来ちゃって構わないからさ」

コンクリート打ちっ放しの殺風景な螺旋階段を降りながらも、

おにいさん声は不釣り合いに明るい。

「ちなみに、約束をやぶつたらどうなります?」

「いや、僕的にはどうでもいいんだけどね。これユリさんの秘密基地だからなあ」

なるほど。

「ほらほら、着いたよ」

階段を降りきったところには無骨な鉄扉がしつらえられている。

一見すると、薬物中毒者の入り浸る怪しげな秘密クラブでも隠

されてそうな雰囲気だが、

ぎぎぎぎいと渋い音とともに開かれた扉の向こうにあったのは、

小綺麗な音楽スタジオだった。

「へえ」

ずらりとならんだ音響機材の大半は有名メーカーの最近のモデルだが、一部いかにもヴィンテージでいかにも統一感がない。

例えばモニター用らしいオリジナルノーチラスと4343がいっしょくたに並んでたり。

奥にはかなりの広さの録音ブース。

しっかり防音が施されているだけでなく、無音仕様の換気扇も多数設置されている。

ちょっと手を打つてみても、いかにも地下室っぽいこもつたこもりはない。壁面の音響仕上げも緻密なものだ。

さらに奥の樂器庫を開いてみると、大変な数の名品が無造作に突つ込まれている。

さつと流してみただけでストラディバリウスが三つばかり混ざつてた気がするけど、深くは考えないことにする。

琴や三味線の類はよく分からぬけど、そこらへんもきっと名の知れたものなんだろう。

「ユリさんって何者なんですか?」

おにいさんは応えず。両手で口を押さえて見せた。

じーっ、と見つめてみると、目をそらされた。

「……留学時代の同級生だよ。防空壕跡を見つけ出して、俺を管

理人に据えて、いつのまにかこんなにしまった。ああ、冷蔵庫

はそっちにあるから好きなの飲んでいいと思うよ」

「ありがとうございます」

露骨に話題を逸らされたな。

「そうそう、いつまでも店をほつとくわけにはいかないから、俺行くわ。なんかあつたらそこのブザーで聞こえるから。じゃじゃ」

しゅたっ、と片手をあげると、おにいさんは逃げるように地下

スタジオを去つていった

「さて、どうしたものかしら」

お呼ばれしたとはいえ、主の居ない場所であまり勝手な真似もどうかと思い、コンソール前のシートにかけて待つ事にする。

約十五分後。鉄扉が開いた。

「……ほら、先客がいるよ」

「本人はまだ来てないわね」

入ってきた二人組と目があつて一礼。

後から入ってきたお姉さんは、人形みたいな硬質の美貌の持ち主だった。表情にはちやらちやらしたところはかけらもないのに

対し。ざつとシャギーの入った淡色のセミロングヘアはいかにも

ギャルっぽく、組み合わせに違和感がある。紫城高(偏差値高い)

の焦げ茶の地味なブレザーに、いまさらなルーズソックスがこれまたミスマッチ。

いいとこのお嬢様がちょっとギャル真似てみました、って感じかな。

とりあえず、コードネーム「お姫様」ということで。

「ん」

先に入ってきた黒髪ロング(首の後ろで結っている)のお姉さんは細身の長身ですらりと手足が長い。同じくキレイ系の顔立ちだが、いかにもクール系のお姫様と比べれば比較的取つきやすそうな雰囲気だ。

「初めましてお嬢さん。ええと、三ヶ所ナナです」

年下相手に深々と腰を折り、にこやかに挨拶してくれた。第一印象は正しかった模様。

声もちょっと低音で格好いいなあ。

「これはご丁寧に。わたし、高天萌衣といいます」

「古河ミノリよ」

「お姫様」が簡潔に名乗る。

「ああ、この娘結構人見知りするんだ。つっけんどんだけどクー

ルぶつてるだけで実は寂しがり屋だから、あいたたた」

ミノリさんはナナさんの足をぐりぐりと踏みまくっているが、ナナさんは笑顔を崩さない。

なんとなく二人の力関係が分かった気がする。

「あの、お二人もユリさんに？」

「うん」

こっくり。

二者二様の反応だが、ともに肯定。

「バンドに参加して欲しいって言われたんですけど」「……バンド?」

顔を見合させる一人。

「聞いていない」

目で問うたナナさんに対し、ミノリさんは首を横に振る。うわあ。私の時よりひどい。

「あの人いつも説明足りないから。迷惑かけてごめんね」

心底申し訳なさそうな顔のナナさんに、一層深く頭を下げられた。

「いえ迷惑なんて。音楽にもあの方にも興味があったので。それにお二人にも興味がわきました」

「そう言ってもらえるとありがたいよ」と、ナナさんは挙むようにする。

明らかにこっちの方が年下なのに。腰が低い人だなあ。

「その姉さんがまだ来ていない。郷に入っては郷に従えというし。子供じゃないのだから時間は守って欲しいわ」

そう言うミノリさんの表情はクールだが、口調からは多少おかんむりのようだ。

発言からもギャルっぽさがまるで感じられない。やっぱ付け焼き刃っぽいな。

今確かに、あの人を姉さんと呼んだつけ。

確かに、顔立ちはちょっとタイプが違うけど、問答無用で回りを圧倒するような存在感はそつくりに思える。いかにも日本人離れした派手さをふりまくユリさんに対し、どちらかといえば陰性

な印象のミノリさんだが、よく見ればこれまた日本人らしからぬ綺麗な董色の目をしていたり。

ちょうどそのとき、聞き覚えのある声とともに黒扉が開いた。

あれだね、噂をすれば、ってやつ。

「珠坂時間でぎりぎりセーフね！」

セーフ、にやたらと力をこめて宣言。金色派手派手のお姉さん

登場。

黒エナメルの超ミニにロングブーツ、肩出し・腿出し・ヘソ出し、相変わらずの露出度だ。同性でも目のやり場にちょと困

しど、相

黒扉の超ミニにロングブーツ、肩出し・腿出し・ヘソ出

しと、相変わらずの露出度だ。同性でも目のやり場にちょと困

るぐらい。

ナナさんはツッコミ係似合うなあ。

「そんなところまで地元になじまなくて結構ですか？」

五人？

もう一度当たりを見回してみると、

どきつ。

開け放たれた扉の陰からそつと顔を出してこちらを覗いてるお

方が一人。

黒髪のよう、鴉のそれのよう、黒目がちだが感情の反映に

乏しい目。

「……佐倉先輩？」

同じく存在に気づいたミノリさんが呼びかけると、その人物は

そろりそろりと部屋に入ってきた。

猫背。お世辞にも機敏とは言えない動き。垂れ目はともかく、

表情も滌刺とはとても言えず……ぶつちやけ目にハイライト入つ

てない。

扉が開け放しである事に気がついたか踵を返そうとするが、ナナさんがすでに閉めに行っている。

「……あ、ドア」

扉が開け放しである事に気がついたか踵を返そうとするが、ナナさんがすでに閉めに行っている。

「……ありがとう」

リズム悪いなあ。

この見るからに使えなさそうな（ゴメンナサイ）お姉さんの顔にはなんとなく見覚えがあった。

佐倉、さくら、サクラ……うーんと？

「知りあいなの？ ミノリちゃん」

「去年卒業した先輩よ。今は珠大の音楽学部」

「へえよかったです。ちゃんと経験者を呼んでくれたんだ」

ナナさんが後ろで聞き捨てならない事を言っている。

「経験者どころか高校時代から」

ミノリさんの台詞を遮るように、ユリさんが紹介を始める
「こちらもえ百枝サガノちゃんよ。バンドに興味があつて初めてみた

いんだって」

「……姉さん」

どうやら押し切られた様子。

「よろしくお願ひします、『百枝』先輩」

ミノリさんは胡散臭い表情を崩していないが、ナナさんは順

応性高いなあ。

「しつかし」

ユリさんはやにやしながらナナさん達の周囲を回る。

「化けたわね、あんたたち」

「姉さんはどうじやないけど」

ナナさんも頷く。

やつぱり、化けてるんだ。普段が見てみたい気がするけれど、

ちょっと怖い氣もする。

「……どうも。あとサガノでいい」

遅っ！ タイミング悪っ！

ふらーっ、とお辞儀するサ○コもといサガノさん。危なっかし

い。

こういうところは実に浮世離れしてる。さすが芸術家の卵。

「もしかして、気づかれてない？」

「いや、どうだろう。あまり興味なさそうだけど」

ナナさんの言うとおり。このサガノさんって女子大生さんは細

かいことを気にするタイプには見えない。

しかしどこかで……どこだっけ？

「さて、早速だけど、パート発表！ だらららららら♪」

ユリさんは飛ばしてゐるなあ。そろつて自己紹介も無しですか。

「ちつとも了承していないのですけれど……」

ぶつぶつ言つてるミノリさんの肩に手を置き、ナナさんが達觀

した様な表情で首を横に振る。

ああ、言うだけ無駄なのね。

「ばんかぱーん！」

ユリさんはやたら上手いロドラムとファンファーレについて、

誇らしげに発表した。

「リードボーカル、ミノリちゃん。ギター、サガノちゃん。キー

ボード、あたし。ベース、ナナちゃん。ドラムス、モエちゃん。

そういうことで、あと細かいところは適当によろしく！」

適当って。

「樂器はその辺のどれでも使っていいし私物持つてきてもいいし、

リクエストあつたら注文しとくから」

お許しが出たからか。サガノさんが樂器庫の奥へとゆらゆらふ

らふらと引き寄せられていく。

皆が凝視する中、彼女が持ち出してきたのは、やたらワルそう

なデザインのエレキギター。

あのストラップ何の皮だろう（間違つても『革』って感じじゃない）。ネックが微妙に蛇行してゐるし、全体に違和感があつて、

いろいろ歪んでる感じ。角度とか。

どことぞの邪神の従者が演奏してもおかしくない雰囲気なので、

「慄然たる宇宙的恐怖を体現したギター」と密かに名付けてあげた。

「さすがサガノちゃん、お目が高い。心臓発作に脳出血に窒息、

あと感電。それを弾きながらステージ上で謎の死を遂げたギタリストは片手の指ではきかないわ」

やつぱり＊のろわれている＊ んだ。

それを聞いたナナさんは嫌そうな顔をしているが、サガノさんは意に介した様子がない。

ばかりか、ギターを手にしたサガノさんは、視線も定まり筋もぴんとのび、瞳にハイライトも入つて、まるで別人のように見え

る。

彼女は脚を組んで椅子に腰掛けると、その慄然中略ギターを爪

お約束の「禁じられた遊び」。

しかしこれまた見た目にそぐわぬ精神に悪い音色で、正気度下がりそう。「神官によつて禁忌とされた冒涜的な遊戯」つて感じ。アンプに繋がないでくれてよかつた。

「それを弾きこなせるなんて、私の目に狂いはなかつたわ」

頭は見事に狂つてそつだけど、とは言わない。

「そんなものどこから拾つてきたの？ 姉さん」

「某神社でお払いに失敗しては被害出してたんで、見かねて引き取つたのよ」

ユリさんやミノリさんはけろつとしてるけど、ナナさんは結構ダメージ受けてるみたいだ。

「てい！」

彼女は半ばよろめきながらもサガノさんに歩み寄り、なんとか音源を奪い取る事に成功。グッジョブ。

「!？」

あ、たちまちしおれた。サガノさんつてギター中毒者？

「これは封印です。人的被害が出ます」

「えー、このギターなら一発でオーディエンスの心を鷲つかみ、失神者続出間違いなしよ」

「発狂者も、でしょう。ユリさんも本気で音楽を志すんなら、こ

ーゆう危険なアイテムに頼らず技術とハートで聴衆を魅了してくれださいよ」

今ナナさんがいいこと言つた。

「本物には及ばないけどまあまあ下劣な音の出るドラムセットもあるんだけど、モエちゃん、叩いてみない？ フルートはあたしがやるから」

「叩きません」

そんなんで喜ぶのは世界の中心でなんか叫んでる邪神様だけで

すね。

「普通にやりましょう普通に。ミノリちゃんが歌うだけでも危なつかしいんですから」

ナナさんはなおも熱心に主張している。

「あ、綺麗な人なのに、ジャ○アンのかなあ。

あ、足踏まれてる踏まれてる。

「……まあ、それで妥協しときましょ」

「十分です。くれぐれも、普通の楽器でお願いします」

「わたしも賛成です」

と、ナナさんに同意しておく。

「わかったわよ。じゃあ黒のシールが貼つてあるやつは使わないようにということで」

「緑と黄と赤は一体どう違うのかしら？」

ミノリさんの冷た〜い口調。

それは何ですか、トリアージタグですか。

「緑だけでお願いします」

「それも賛成です」

ナナさんとペア組んでツッコミ係が板についてきた気がする。

常識的判断で身を守ろうとしてるだけなんだけど。

そのとき、ユリさんの方で安っぽい合成音が鳴り響いた。

……配管工がお亡くなりになつた時の音？

ミニスカートのポケットから出てきたのはものすごく可愛らしいデザインの携帯電話。似合わない。

「んー、相変わらずのタイミング」

ここ、圈外じゃないんだ?

「外電アリ。みんな傾聴。お告げふろむアリス」

アリス?

メールの内容を確認したユリさんは、先ほどのハイテンション
ぶりとは同一人物とは思えないぐらい淡淡と宣言する。

「バンド名は『ヨーカロリィ』だつて」

脳裏に浮かんだのは特大ハンバーガー。ハンバーグ三段でこれ
でもかつてほどケチャップのかかった。

……ガールズバンドらしからぬ、いやな響きの単語だな。

「で、それはどういう意味なの?」

私が何でも知つてゐると思わないように。意図の伴わない意味だ
け説明してどうするの。アリスに直接聞いたらしいわ」

〔嫌〕

この姉妹、どつちも偉そうだなあ。ちょっと違つた意味で。

「ま、今日のところは顔合わせだけね。とりあえず最年長のあた
しが頭をはつておくけどいい?」

今日だけと仰らず、幾久しくお願ひします。メンバー集めたの
はユリさんなんですから」

ナナさんのやたら丁寧な口調からは、若干の他意が感じられな
くもない。先ほどからの会話の間にも、流されてるっぽく見えて
も結構言う事は言う人だつてことが分かつてきた。

私とミノリさんは、おぎなりな拍手で賛意を示す。

約一名、さつきからほとんど動かないしほんど何も発言しな
い人もいるけど、サスペンド中かな。椅子に座つたまま寝てるの
かも。

「じゃ、毎週日曜午後、ここに集合しましょ。正体不明のバンド

で行くつもりだから、くれぐれもメンバーであることを悟られないようね」

「正体不明って……」

ミノリさん、嫌そだなあ。姉妹なのにノリはかなり違うみた
い。

あれ、静かに举手してゐる人が一名。

「……では三角黒頭巾を」

「ダメです」

ナナさんとハモつた。そしてサガノさんがしおげた。

ああ、私も一言だけ言つとかなきや。

「あの」

「なあに、モエつち?」

うーん、モエつちにされてしまつた。

「一人だけ、打ち明けちやつてもいいですか? 定期的に集まる
のなら、外出の許可を取らないといけませんから」

「え? ご両親じやなくて?」

ナナさんが首をかしげる。

「健在とは限らないわよ」

「あ、ごめん。ほんとごめん。失言だつた」

冷静に突つ込むミノリさん。慌てて手を合わせるナナさんは、
やつぱりいい人だ。

「許可が出なかつたら早めに言つて。合法非合法問わづいくらで
も手を回してうんと言わせてみせるから」と物騒な冗談を口走るユリさん。

「……はあ」

ため息とともにがっくりと肩を落とすナナさん。

「この人至って本気だからね。念のため」

本気なんだ。

「ええと、弟?なんですけど。ちゃんと説明すれば、許可してくれない、ってことはないと思います」

にやあ。

「弟お?」

ユリさんがいやあな笑い方をする。

「じゃあ弟くん?にはガールズバンドだから御心配なくって伝えちゃって」

この台詞にはなんだか含みがある気がする。

「ガールズバンド、ねえ」

苦笑するナナさんの台詞も気になるなあ。具体的にはよく分からぬいけど。

＊＊＊

ユリさんに言われた旧商店街の外れの小さなアニメショッピングに行つてみると、地下にすっごい立派な音楽スタジオがありました。

元防空壕を改装したものだそうですけど、響きもコントロールされててちゃんとしてましたよ。

それで、今日はバンドのメンツを紹介されました。

古河ユリさん(キーボード)と妹のミノリさん(ボーカル)、

百枝サガノさん(ギター)と、三ヶ所ナナさん(ベース)という方々です。

ユリさんは社会人でリーダー、ちょっとはつちやけた人です。

サガノさんは大学生で、ちょっとゆったりした人です。

クールなミノリさんと優しいナナさんは高校生なので、私が最

年少になります。

それで、毎週日曜に集まる、つて事になつちやいましたが……：行つちゃダメでしょうか?

萌衣

W3〇月〇日 月

＊＊＊

「やあ、こんなところで逢うなんて奇遇だね」

「ここは教室だ。そして朝のホームルーム前だ。ドあほう」「ドあほうなんて言う方がドあほうなんだよ、このドあほう!」

隣のバカ女はドあほうを連呼しつつも何故かご機嫌。

「時にヒックキー、楽器つて弾ける?」

はあ?

何の冗談だよそりや。

「あのな、俺はそんな名前じゃねえ」

バカ女はさも心外そうに。

「ヒロアキ略してヒックキーじやん」

「ヘンな省略すな!」

「そんのはどうでもいいからさー、今は楽器の話題だよね楽器つ!」

つくづく人の話を聞かない女だな。

まさか今さらこんな話題を振つてくる奴が居るとは思わなかつた。

「高天寛彰十四歳」

左側からは感情をまじえない淡々とした声。姉の方だ。

「ベーシスト高天 ゴウヂンガ 神の指 光照・ボーカリスト高天妙夫妻の一
人息子にして少年ドラマー」

せめてこっち見てしゃべれ。眼帯しか見えん。

「かつて天才と呼ばれたその腕、こんなところで腐らせておくには惜しい」

「……腐ってねえ」

妹より冷静で話が通じそうに見えて、わけわからんのは妹と同じだ。

「ん!? 間違ったかな?」

「バリバリ現役だっての」

「ほう」

姉のほう、七瀬撫菜は椅子ごとこちらに向き直り、威儀を正した。

「それでは、高天寛彰にお願いがあります」

「……何だよ」

真剣な光をたたえた隻眼が俺を圧倒する。

「やらなあいか」

「は?」

……うーん、叩きすぎて耳に来てるかな?

「悪い、もう一回頼む。今何つった?」

「演らなあいかと言いました」

「何を?」

「演奏。私トランペット。鈴菜がボーカル兼コントラバス。そし

て高天寛彰がドラムス」

コントラバス?

ああ、指引きのウッドベースか。

「へえ、ジャズかよ。若いのに渋いな」

「ううん、ジャズじゃないから」

「じゃあ、ペットとバスだけで何を演ろうと?」

「バランス悪いぞ。寂しすぎだ」

「だがそれがいい!」

意味分かって言つてるとかそつちの脳天氣女は。

「よくねえ! そんなとこにいきなり生のドラム混ぜようとすんな!

「パート足りないなら打ち込みも使え!」

「コンクリート?」

首をかしげる七瀬妹。

なんで土建屋の話になるんだ。

「パソコンで電子楽器をコントロールするんだよ。最悪、パソコンだけでも何とかなるし」

「聞いたことある。音楽やるならYM2203より2151搭載機がお勧めって」

七瀬姉は詳しいのか詳しくないのか。

「そんで、どんな曲やりたいんだ?」

「ハーデマーチ」

ステレオでびたりとハモる。

「……分かるような分からぬようなジャンルだな」

字面からいくと重くてうるさくて速いマーチなんだらうけどさ。

「実際にかけーの」

「魂に響く」

……どうもお手本のバンドがあるらしいが、うーん、マーチね

え。

「とりあえず練習始めたのだ。結構行けてる気がしなくもないのだよ」

「これで高天寛彰のドラムスが加われば何とかに刃物」とことわざの用法を激しく間違っているが、なんとなくそれで正解なような気もしてくる。

「よろしく」

がしつ。

両方から腕をつかまれた。

捕獲完了って感じ。

「……やるって言つてないんだけどな」

最初から決定事項っぽい。

萌衣もこんな感じの捕まつたんだろうな、きっと。

「はあ……で、なんでバンドやろうと思つたんだ?」

質問に対し、鈴菜は無い胸を反らして宣言する。

「そりやー当然、地球の平和を守るためだよ」

【打倒『黒六連』】

「はあ?」

撫菜の言う『黒六連』というのは、ここ珠坂で最近急激に台頭してきたインディーズバンドのことだ。黒ムツとかクロムとか略して言われる事も多い。

「無理だろ、アホかおまえら」
即断するしかない。

黒六連は文字通り黒ずくめのビジュアル系バンド。

確かに、ちょいワル系のサンガラス髪オヤジがリーダーで、最年少は高校生ぐらいの美少年。六人のメンバー全員が容姿にも演奏

技術にも恵まれている。

詩も曲もどこか退廃的ながら、強い中毒性のある流麗かつキャッチーなメロディーラインが特徴だ。

二週とおかずに次々発表される曲のどれもこれもが十分に大ヒット級だが、それを使い捨てる勢いでさらに新曲が発表されていくところを見ると、相当の才能の持ち主が居るのだろう。とにかく外れがないってのが驚異的。

彼らが初めて姿を見せてわずか二ヶ月というのに、既にメジャーデビューや間近と噂されている。ド素人で相手になるはずがない。既に音楽家として地位を確立しているうちの両親と組んだとしても、演奏技術はともかく衆目を惹きつける華ではとても及ばない。実際、親父も彼らの実力は本物だと断じている。彼らの技術は若くして既に円熟の領域に達しており、寝る間も惜しんでさぞや壮絶な練習を積んだのだろうと感心していたものだ。

それでもなお、黒六連はうちに最も嫌われているバンドだったりする。

なにせ、現実に問題が起こりまくりだし。

「出来るとか無理とかじゃなくて、誰かがやらなきゃならないの。高天寛彰がやらねば誰がやる」

鈴菜はさすがに大袈裟だが、撫菜の言わんとすることは分からぬでもない。黒ムツがらみでおかしな事件が多数発生しているのは周知の事実。

彼らの過激なファン（通称黒ムチャ…上手いこと言う）はやら過激で、サイトの掲示板を炎上させたとか、集団でCDショップを襲つて他バンドのディスクを捨てて回ったとか、アンチ黒ムツ派に集団リンチを加えたとか、そういう物騒な話にも事欠かな

い。

ネットを介して知ったファンの珠坂巡礼も常態となつており、駅前ホテルでの長期滞在組も數十人ではきかず、無錢宿泊などでのトラブルも多々起つてゐるらしい。この町のすべてが恩恵を受けてゐるのだから、クロムの使徒には便宜をはかるのが当然であり、すぐにロイヤルスイートを無料解放すべきである、などと無茶を言って憚らない連中までいるとか。

そんな具合だから、サブリミナル信号を含む洗脳音樂に違ない、って噂さえ出てくる始末だ。

「あれはイクナイものだよ！ 今のうちに潰さなきゃ手遅れになるかんね！」

うーん。

まずい雰囲気になつてきたな。

いつまでも捕まれている腕ごと双子をぐつと引き寄せ、密談モードに。

「あまりでかい声で黒ムツの悪口言うなつて。刺されつぞ」

これは冗談じゃない。

既に嫌な感じの視線が集まつてきてる。

「ふつふーん、素人に後れをとる拙者ではござらんよ♪」

「大丈夫、まかせて」

と、人の心配をよそに、二人とも自信満々だ。

そういえばこいつら、こう見えて珠坂古来の旧家のお嬢で、伝

來の古武術みたいなのが叩き込まれてるんだっけ。

体育の時間とか、突出していい動きしてるのが遠目にも分かる

もんな。鈴菜が柔道部員を「ほんほん投げ飛ばしまくつたのを覚えてるし、姉の方も片目で妹と遜色なく動けるんだから呆れる。俺も叔父さんに相当仕込まれたけど、こいつらにはちょっと勝てる気がしない」

それでも、いや、だからこそどうしても危なつかしさを感じてしまう。

「既に公言しちまつたのは仕方ない。相手が一人とは限らないからな。いつも二人で行動しろ」

黒ムチャには、中学生どころか小学生までいるから。

黒六連は不良学生にとつては神様のような立場になつてゐるが、同時に、わりとレベルが高いと見なされているここ紫城中等部においてもファンの性質に大差がないというのがとても不思議だ。

「おお、心配してくれてあんがとね」

「向こうから手を出してきたとしても下手すると過剰防衛にされるから、まずは逃げる事を考えろよ。お前ら足速いんだから」

これも叔父さんに習つた事だ。三十六計逃げるにしかずと言う。相手が武器を持つていたらつい反撃したくなるだろうが、そういう場合の手加減は難しい。怪我をさせないよう武器を取り上げるには相当の実力差が必要だし、ちょっと力が入れば一発で過剰防衛だ。実際、集団で組み付いてくる黒ムチャ達を手近な棒で殴つてしまつて捕まつたような話も聞く。

七瀬の双子は見た目いかにも弱々しいから心証的には有利かもしれないが、武器を持った小さな子供や老人に襲われる場合が多いとは言えない。

非常識と思うだろ？ それが黒ムチャ過激派なんだ。むしろ弱々しい人たちほど取り込まれているような氣もする、と叔父さ

んは言つてたっけ。

あちこちで無茶苦茶をやつてゐる割に問題になることが少ないのは、学校の先生や警察内にまで多数の黒ムチャがいるからだつて、いうぞつとしない噂もある。

本当に洗脳音樂だつたりしてな。

「で、そういう連中を見逃したとして。次に襲われるのは、高天君の家族や大切な人かもしれないよ」

鈴菜がおちやらけた口調を一変させた。

「暴力を向けたら命のやりとりの開始宣言だつてのは、獸にだつて分かる当たり前のことなんだし。それさえ分からぬほど『外れちやつた』相手は排除するしかないって」

いつも通りの明るい声だが、発言内容は時代小説の剣豪か何かのよう。

現代日本じややばすぎるぞ、その思想は。

「あのな、そういうのは警察だろ」

ある割合ではヘンなのも居るんだろうけど、基本的には権限を与えられているところに任せることかないとろくな大人にならんぞ。のなんだから。

「ううん、これはもう斗流十家の管轄。ハートの女王が首を刎ねろと仰せ」

七瀬姉はいつもの調子でさらりと言う。

何の例えかはよく分からぬが、ろくでもなさそうな気配がぶんぶんと感じられる。

「片つ端からやつちやうといろいろ大変だし、出来れば大元の方をなんとかしたいんだ。物理的にやつたら余計に盛り上がっちゃうかもしれないから、なるべく平和的に退場してもらえる方法を

考えた」

冷蔵庫の残り物から一品作つてみたけどどうよ、とでも言わんばかりの微妙に得意げな表情の七瀬妹。

しかしまあ、姉妹揃つてなんつー不健全な。

このちっこい双子が心底怖いぞ。

要するに「ここまで広がつた黒ムチャの完全除去は町の崩壊と同義だから、原因である黒六連を潰したい。闘討ちして再起不能にしたら大暴動が起こりかねないから、人気を下げて忘れ去られるようにし向けよう」って事だろ。

間違つてはいないんだが……なあ?

なんだよこの上から目線。

たどり着いた結論や手段の現実味はともかく、思考経路には相当問題がある気がする。

これ、俺と同い歳の中学生が考えつく内容か? なんか大事なものがごつそり抜け落ちてないか?

ある意味黒ムチャ以上に不健全にさえ思える。

今のうちに矯正しどかないとろくな大人にならんぞ。

とか使命感を感じてしまふ俺は、やっぱりあの叔父さんの甥なんだな。

「わかった。ちょっとだけならバンドつきあつてやる。だから短絡的な真似すんな。それから自分らの席もどれ」

やーな視線を浴びつつ、先生の千年一日のごとき連絡事項を聞き流す。

こんな状況で萌衣のバンドは大丈夫かな、とも思うが。

まあ、黒ムツのライバルと目されるのは簡単な事じやないし、

彼女だけが突出したところで、バンド全体としての完成度は遠く及ばないだろう。
楽観視していた俺だが、後にこのときの見通しの甘さに地団駄踏む事になる。

行きたいんだろ？ハーバンド
ずいぶん楽しそうじゃないか。

萌衣がやりたいようにやつていいよ。

俺が萌衣にやってやれる事ってほとんど無いからな。

ああ、念のため言つとくけど、過激な黒六連ファンには萌衣も
気をつけろよ。

W3〇月〇日 水

放課後の音楽室。

あいつらいろいろ危なすぎるから、ちょつと教育してやる。
どうせおままでレベルになるんだけどな。
ド組むことになっちまった。

「悪い。恩に着る」

今日のドラムはなんでか絶好調。
「なあに、高天には何度か無理言つて叩いてもらってるしな」と安請け合いした同級生の顔が引きつり始めるまでに、そう時間は掛からなかつた。

寛彰

「ケラケラケラケラ～♪」

『ぼほんぼほんぼほぼほん』

コーカロリィはガールズバンドなので、黒六連とはかぶらないと思いますよ。
ヒロ君とバンドが組めるって、その双子さんがうらやましいです。
……ツインドラムやりたいな。

山根さんが船をこぎながら普通に料理してました。さすがメイドマスターに最も近いと言われた人です。

萌衣

ありがとう。つてこればかりですね。

W3〇月〇日 火

「ヒッキーー!?」

「へいへい、今張り直す」

このぐらいは手馴れたもんだ。親父にさんざん手伝わされてる。

さつさと作業を完了して、仕切りなおし。

『ぱぱらぱぱらぱららららら!』

七瀬姉の精密機械のような単調なピストンワーク。緩急も揃ら

ぎも全くない平板きわまりない音色。

俺にこれをどうしろと。

脊髄反射でドラムを叩きつつ途方にくれていると、

めきや。

「折れた！」

妹のほうが、だらりと弦を引きずったネックをぶらさげている。

なんで得意げ？

「素人に直せるか！ つかそんなん折るな！」

今日のところはお開きとなつた。

「天才だわこいつら。少なくともうちじや手に負えねえ」

「こんなとき、自分が凡才でよかつたと思うよね」

「どーするつもりだ、高一？」

口々に同情する軽音部員たち。

他人事かよ！

いや、他人事なんだけどさ。

「……じっくり腰をすえてやるしかないだろ」

「ま、がんばれや。同じ天才のお前にならできるかもしないしな」

部長はぽんと俺の肩に手を置いた。

「とりあえずだが、顧問に頭下げに行つてくれ」

「俺がかよ!?」

「そりや、ペットのおいたは飼い主の責任だろ」

「飼い主違うわっ！」

先行き不安な滑り出しだつた。

つかれた。疲れ果てた。

七瀬姉妹、半端ねえ。

鈴菜のウッドベースがやたらパワフルな音出してると思つたたら、音楽室備品のベースの弦を次々切るわ、しまいにやネックを握りつぶすわ。

結局、音はまるで素人の打ち込みにしか聞こえない。

筋力と運動神経については二人とも空恐ろしい性能だし、耳の良さも相当だつてのに、音楽的な感性は限りなくゼロに近いってことがよく分かった。

しかも、備品壊したつてのに、七瀬の名前出したらおとがめ無し。あんな傍若無人な発想の生き物が出来るわけだよ。

前言撤回したくなつてきたけど、乗りかかった船、男子に二言なしだ。

愛する音楽を通して、あの野生児どもに人間らしいハートを取
り戻させてみせる！

ツインドラムいいよな。せめて連弾ぐらいならなんとかならないかな?

山根さんは特殊すぎて参考にならないので真似しようとか考えないようだ。

寛彰

W3 月〇日 金

＊＊＊

確かに上達してる。

三日目で曲がりなりにも音が合うようになったのだから、驚異的な速度と言つてもいい。

「鈴菜、そこは、べべーん、じやなくて、べぼふん、な」

「おっけー！」

正確に説明しても伝わらないのに、これで意思が伝わるのだから不思議だ。

一流の指揮者は言葉の通じないオケでも指揮できちゃうわけだから、こんなんでも結果が出ればいいのだ。

と自分を騙しておくことにする。

「撫菜、四小節目の出だし、ちょっとだけためた方が良くないか？」

「指示は具体的に」

「また難しい注文を。」

「……頭に128分休符を入れて、二音目の尻尾を同じだけ削つ

てくれ」

「了解」

それで言つたとおりに出来ちゃうんだもんな。

指示を出す度に瞬間に頭の切り替えが必要で、こっちはどうしても混乱するが、幸い七瀬姉妹は物覚えがいい（アホだけど）。が、一つ問題解決のめどが立つと、別の問題が持ち上がってくるもので。

鈴菜のご機嫌な歌声が、軽音部員達の眉を顰めさせる。

下手とは言わない。歌自体はむしろ上手いんだが……

止めてくれるなお兄ちゃん 背中でリボンが泣いてます♪

右のポッケに電動バリカン 左のポッケにスタンガン♪

あなたを狙うあの女 明日の朝には丸坊主♪

ケケラケラケラ ケケラケラ♪

止めてくれるなお兄ちゃん 頭のツイテが泣いてます♪

右の腕にはブラックジャック 左の腕には釘バット♪

あなたのを狙うホモ男 明日の朝には去勢済み♪

ケケラケラケラ ケケラケラ♪

「……本当に那人前で歌うのか？」

「愛するお兄ちゃんへの一途な思いが伝わってきて、ぐぐっと来るつしょ!?」

「来ねえよ」

「＊＊＊」

七瀬姉妹向けの新品の楽器が支給されてきた。十家ってのはほ

変則ですが、明日も私が書きますね。

んと無茶苦茶だ。

あいつら、早速名前をつけてたな。

撫菜のベットは『マカロニ』で、鈴菜のベースは『スコルツエ

ニー（で良かつたよな？）』だつてさ。

意味については知りたくもないね。

萌衣

W4〇月〇日 日

＊＊＊

先週と同じく『うさぎの穴』での待ち合わせ。

地上のお店には糸目のお兄さんは不在で、先週とは比較にならないほどの客が列を作っていた。

その一方で、半分を占める成人向けコーナーでは閑古鳥が鳴いている。近づこうとする者のことごとくが、メイド服姿の店員さん二人の笑顔と軽蔑混じりの視線で、それはもう面白いように撃墜されているのだった。

これ、売り上げ的にはどうなのかなあ、と苦笑してると、店員さん達と目が合った。

あ、二人ともこっち来ちゃった。

野暮つたいクランカルなメイド服に身を包んでいる割には、一拳手一投足がいやに色っぽいお姉さん達だ。

ごちゃついた狭い通路（商品の隙間、とも言う）をボリュームのあるロングスカートで器用に歩き回れるものだ、と変なことに感心してしまう。

「お話は伺っております、高天様。わたくし、くどうくわい宮藤初と申します」

ふかぶかー、と腰を折って、年下の小娘相手におっそろしく丁寧な態度。

「同じく、宮藤終です。お待ちしておりました。どうぞ、こちら

比翼連理

W3〇月〇日 土

寛彰

いいですね。楽器に名前。

私たちはたくさんセットで持つてるから、難しいんですけど。

きっと七瀬さん達とのセッションが、いい刺激になってるんですね。

私も頑張ります。

に

宮藤姓の双子の美人。

左右逆の横ボニー。同じく片方ずつの長手袋。どっかのモアイ像モドキではないけど、鏡写しのような対。

実物を見るのは初めてだけど、知識のなかで条件に該当するの一組。

高等部の有名な先輩達だった。

この二人、知る人ぞ知る珠坂古来の名家たる斗流十家の第九位、宮藤家のお嬢様達のはずなのだけれども。

なんでそんな大物達がこんな場末のアニメショップでメイドコスしてアルバイト？

「当主代理からのご推薦で、店主の留守中の店番を仰せつかつております」

と、終さんが倉庫の奥まで丁寧に案内してくれる。

ヒロ君の友達の七瀬さんところ程じゃないけど、相当いいところのご令嬢であるわけで。そんな人達を手伝いに出すなんて、十家も人材が払底してるんだろうか。

「何か御入り用のものがございましたら、遠慮無くお声をかけてください」

でも、控えめで丁寧な言葉遣いにも立ち居振る舞いにも無理を

したところはなく、人に使われる立場に慣れてる印象がある。

山根さんよりよほど本職っぽいのはどういう事だろうか。と疑

間に思つてみたり。

「ええ、ありがとうございます」

地下スタジオに着いたのは、今日もまた私が最初だった。

ただでさえ週一のスローペースなのに、こんなで大丈夫なのかな。

「どうぞ」

一人だけ座らされたばかりか、終さん手ずから紅茶を入れてクッキーまで添えてくれた。

部屋にドリンクサーバが増えてるのに気づいてしまっていたので、どうにも居たたまれない。

しかも飲み終わっても帰つてくれない。斜め後ろに控えてる。

「紅茶のお代わりはいかがですか？」

うちのメイドさんはこんなに気が利かない。よく言えば自主性を重んじ、悪く言えば放任主義。姉が一人増えたようなもの。

「どうかお構いなく。宮藤さんはお店の方をお手伝いしてあげてください」

「いいえ、高天様は私どもの大切なお客様ですから」

丁寧で温厚そのものに、ユリさんやミノリさんから受けるのと同系統のプレッシャーを感じさせるなあ。

暗に上のオタクどもはどうでもいいって言つてる気がするし。

「できれば、演奏前には一人にしていただいた方が落ち着きますので……」

これでは落ち着かないのは確か。嘘はついていない。

「それは申し訳ありません。配慮不足でした。ご容赦くださいませ」

が、さんざん恐縮して退出していく終さんを見ていると、むしろこっちの方が恐縮したくなつてくる。

悪いことしちゃったかな。

そこまでして一人になつたというのに。二分と経たぬうちに、

ナナさん、ミノリさんが初さんに連れられて降りてきた。

「初さん、わざわざ案内には及びませんって。内輪相手に気を使いすぎですよ」

「他人行儀すぎ」

初さんは優雅に首を振り。

「狼の群れにさえ役割分担があるそうです。ましてや我々は野獣ではありませんし、なれ合ってしまっては統率などあつたものでは。主筋との間には一線あつてしかるべきです」

とか言い切った。

大袈裟な言い回しだけれど、そこに先輩達なりのポリシーがあるんだってのは、わかる。

斗流十家から見れば私なんて小金を持つてるだけの卑しい樂士の娘に過ぎないけど。そのポリシーに従えば、上位家の客に対しても上位家に対するのと同じだけの敬意を払うべきだということになるのだろう。

ん?

何か引っかかる。

「おはようございます」

「うん、おはよう、モエちゃん」

「御機嫌よう。息災で何よりね」

愛想がいいナナさんと、かなり愛想が不足しているミノリさん。

ちょっとアンバランスでエキセントリックなミノリさんと、オーネドックスなナナさん。

でもこの凸凹な二人の息はぴったりで、いいコンビだつてわかる。

例えるならお姫様と乳姉妹のお付きかな。きっと普段もこんな風なんだろう。

……んん!?

内輪とか主筋とか言うことは。

「あの、ナナさん、ミノリさん。いきなり不躾ですけど……もし

かしてお二人も、斗流十家に連なる方々でらっしゃいます?」

ナナさんが息をのむ。動搖が見え見え。なかなか隠し事が出来ないタイプだなあ。

ミノリさんはポーカーフェイスに見えるけど、あれは本気で無関心なんだろうと思える。勘だけど。

「いえ、皆まで仰らないで結構ですけど。察するに、禁則事項ですか?」

「まあ、別に大袈裟な話じゃないけど、そこはそれ」と、人差し指を立てて唇に当てて苦笑するナナさん。私に暴露

する意思がない様子なので安心したんだろう。

「そうねえ、空氣読んでくれると助かる」

鉄扉から顔を出す金髪。相変わらずの露出度。

ユリさん、今日は意外と早い。

「居心地のいい場所って大抵は薄氷の上の絨毯敷きだつたりするから。不用意な衝撃で崩したくないものよね」

……どこまで知ってるんだろう、この人。

「それ、激しく同意です」

考へても無駄なのだろう。どうせみんな訳ありなんだろか。

「……おはよう……」

眠い目をしたサガノ先輩が、ユリさんの陰からゆらゆらと現れる。

今にもゼンマイの切れそうなキレの悪い動き。相変わらずのテンションの低さ。

たちまち壁にもたれてしまつた。

「サガノっち、早速寝ないの」

ユリさんがぱんぱんと手を打つ。この人は他人に命令し慣れてるなあ。

両手に紙袋を提げた終さんが進み出て、指示された物をメンバーに配つて歩く。

絶句するナナさん。こめかみを押さえてため息をつくミノリさん。

言われるままに装着するサガノさん。

「これ、何ですか？」

「何って、見ての通りのマスクと黒マント」

それは分かつてますつて。

「正体不明、つて言ったでしょ」

ヴェネチアのカーニバルのあれほど派手派手ではないにせよ、仮面舞踏会でつけるようなやつを想像してもらえると近い。羽根飾りとかはついておらず、目の回りだけを覆うデザインだ。マン

トは裾がぎりぎりのながーい奴。

どのぐらいブライバシーを隠せるかというと、怪盗な人とか怪傑な人とか螺旋の星の人とか彗星な人とかあの程度。わたしらオペラ座の怪人ですか。

「……バレベレだとと思う」
ナナさんは意見が合う。

「それでもばれないのがお約束ってね」
ユリさんは笑うが。

……いや、これ、笑えない。

化けの皮を剥がれるのが前提というか、そもそも隠す気がまる

でないんだろう。

もう既に素性は隠してるっぽいが、この人達が何者なのか私にさえ薄々見当がつくわけだから、分かる人には簡単に分かるはずだ。

お約束。確かに物語なんかでは、バレバレーの変装にもしつかり騙されてくれる。それは往々にして察しの悪い読者（視聴者）への配慮だ。

だがそれを現実世界に持ち込んでしまえば、分かっても騙されておくのが礼儀ということになりかねない。

こんな事を考えたことがある。

例え江戸時代でも情報のやりとりはあるだろう。あちこちで騒ぎを起こす越後の縮緬問屋を誰も知らないというのには無理がある。

ならば、認知症が進んで自己顯示欲の肥大した老権力者の機嫌を取るため、殿様以下藩全体で太芝居を打つことが慣例化している可能性はないか？

助さん格さんも峰打ちで倒される侍達も、みなシナリオ通りに動いているのではないのか？

では裸の王様はどうだろう？

彼が真の権力者であつたなら、騙されている事を指摘した人々を許しておくだろうか。お似合いですと追従した者もまた許されないかもしれない。褒めれば良いのか、笑えば良いのか、それとも諫言すればよいのか、その判断は容易いことではない。

王様は敢えて愚かな振りをして部下や市民の反応を試したのではないか？いや、例え本当に愚かであつても権力者は権力者だ。意向の推察に確信が持てない市民達はさぞ混乱したろう。だか

らこそ最善の策として、内心の恐怖を押し隠しつつ王の行列が通り過ぎるのを待った。空気の読めない子供がすべての配慮を台無しにするまでは。

市民達は王様を嗤ったのではない。命運ついたことを悟り、もう笑うしかなかったのではないか。

宴會で気むづかしい社長が「今日は無礼講だ！」と言い出した

粗略には扱えないが、かといって露骨に配慮することも出来ない。

権力者の奇行というは面倒なものだ。その行動が戯れから来る物であれ本気であれ、絶対に安全な対応法が見つからない。

相手がその気であれば、どう動いても因縁をつけられるだろう。それとも最初から肅正自体が主目的かもしれない。

役所の上の階あたりでそんな議論をしながらガクブルつてゐるであろう偉い人たちに同情する。最近とみに薄くなつてきた市長さんのバーコードの密度がさらに低下しそうだ。

「あっさりバレても機嫌悪くしないでくださいよ」

「あと、自分で正体かくしておいて配慮不足だとか文句つけるのもアウトです」

しつかり釘を刺してくれた。気まぐれな上司を少しでも制御する

のが自分の役割と定めているのだろう。この人には本当に偉そうなどころが全然無い。

その通り、とばかり深々と頷いたのはミノリさん。

遊びに力関係を持ち込むのは、大人げない。そこを割り切れな

い人間は遊ぶべきじゃないわ」

これは遊びじゃなくて真剣な実力行使だ、と言つてゐるようにも聞こえるのは氣のせいだらうか。

「……ミノリちゃんはもう少し肩の力抜こう。怖いから」

ナナさん、苦労するなあ。

「あたしって信用無いわね。いつも眞面目に遊んでるってのに」

これを、自分にとつてはあらゆる事が遊びでしかない、と意識してしまう自分の頭が嫌になります。

「不當に失礼な扱いを受けるのも慣れっこだしね」

本来なら誰に何を言われても失礼に当たる、と。

「羨の悪いチワワに吠えつけられた程度で目くじら立てるほど器は小さくないつもりよ」

つまり、他人を愛玩犬程度にしか見てないからこそ、寛容でいられると。

顔に出ていたのだろうか。こちらを見たユリさんが、にやつと微笑んだ。

「モエっちも相当のものね。呆れてはいても、全然恐れてはいないでしょ」

「ほんの小娘ですから、皆さんの本当の怖さを知らないだけです」

「それは違うわね。よつて立つ裏付けを持つてるからよ」

へえ。

……看破されてしまった。

「その年齢でまったくブレがないなんて、末恐ろしいわ。あたしとミノリちゃんがこんな会話してれば、市議のじいさんどもなら気配だけで逃げ出してくるわよ」

じゃあ、両目のピントを虚空においてぼーっとするサガノさん

は何なのだろうか。

私の視線に気づいたか、ユリさんは満足げに笑う。

「ほんっと、この町には大物が多いわ。退屈しない」

それでも、ここはほんとに美人率高い。

ユリさんの衣装は見るからにビジュアル系だけど、顔立ちちは基本的に落ち着いた和風辛口で、口を開かず立ち居振る舞いに気をつけさえすれば、十分お嬢様に見える。

ちぐはぐな格好をしているけど、ミノリさんが人形じみたとてもない美少女であることは前述の通り。凛々しくしかも優しげなナナさんは、女子校ではお姉様として慕われそうだ。

そこでぐんにやり垂れているサガノさんだが、しゃきっとすると豹変するのは先週確認済み。一見地味だが整った顔立ちだし、ギターを手にしたときの彼女にはえもいわれぬ華がある。だらーっとした服装を改めて背筋を伸ばせば、ピクリとするぐらい魅力的になるだろう。

性別は違うけど、総合的に黒六連とでもいい勝負が出来そうだ。ちなみに、読者諸賢のために補足しておくと……ナナさんは長身でスマート、ミノリさんは華奢、同じぐらいの身長のユリさんはワガママボディー、サガノさんは意外におつきい（なにが？）。私？ 相応にペたんこですが何か？

「私はともかく、みなさんお綺麗だしマスクで隠すのは勿体ないですね」

「いや、絶対モエちゃんの方がずっとずっと可愛いと思う」

ナナさんがなぜか力説する。なんでそんな必死？

「そうね、十分綺麗よ」

「はあ……ありがとうございます」

誰にでも好かれたいたわけじゃないし、ミノリさんみたい人に言われても複雑な気分だけど、でもこの顔を魅力的って言つてもらえるのは嬉しいかも。

「あたしも見た目は相当のものだと思うけど、」

ユリさんは謙遜とか言う言葉とは無縁の人種に見えたが。それとも他人事なのか。

「別に容姿で音楽やる訳じゃないから」

見た目がネックになって売れてないバンドが聞いたら暴れるじやすまないな。

うちのリーダーがごめんなさい。と心の中であやまつておく。

「だから、あくまで音楽で勝負できるメンバーを集めたつもり」その言葉に対し、ナナさんは自分の顔を指さして首をかしげてみせる。

「昔ミノリちゃんに誘われてから、通信講座でだらだらやつてただけです。しかも六年も掛かってやつと卒業できたレベルですよ」「どちら辺がちょっとだか」

ユリさんが、にやあり。と嫌らしい笑みを浮かべる。

「珠坂新聞社の通信ベース講座はね、ゴッドフィンガー高天光照の完全監修というか趣味の産物よ。アルティメットコースまでやり遂げた人間は五指に満たないって話。他人と合わせた事がないだけで、実力的にはその辺のプロには劣らないんじゃないの」

ああ、アレかあ。

冗談だとばかり思つてたのに、あんなの一人で最後までやる人、いたんだ。

「せめてコースぐらい終わらせてないと、恥ずかしくて聞かせられないと思つてたのに……」

ナナさんは呆然。魂を抜かれたようになつていて。

「小学校の時、合奏を断られたんだ。『私と合奏したいなら、何か一つまともに弾けるようになりなさい』って」

「あんなの冗談よ。なんとかの一念? ほんと地道魔神。珠坂を離れてる間もずっとやつてたの? 呆れるわ」

ミノリさんのこれは、褒めるのだろうか。

「うん、絆だつたから」

きやー。

直球!

「……ナナはもう少し人心の機微というものを勉強する必要があるわね。そう無防備だと、きっといつか致命的に騙されるから」

「ふいと顔を背けるミノリさん。うわあ、シンデレだ。

「ミノリちゃんは騙したりしないよ。現に今、一緒に演奏しようとしてるし。無駄にはならなかったでしょ」

「……ああもう、軽口につきあつてる時間はないのよ。さつさと始めましょう」

クールなミノリさんだけど、ナナさんにだけは弱いんだなあ。

時間、かあ。

そういえば、一番大事なことを忘れていた。

「そんなに急ぐ理由とかあるんですか?」

沈黙。

「そもそも何のためにバンドやってるんです?」

視線がユリさんに集まつた。

「……みんな、一体私に何を期待してるの?」「それがリーダーの台詞ですか」

とげとげしい視線。ミノリさん本領發揮。

「面白そうちからほつてるだけよ。大体、アリスの意図なんか誰に分かるつての……あ」

あ?

「そろそろ、コーカロリーはタイムツに出るつてことで」

タイムツ?

「で、黒六連をたたきつぶすの」

ふざけんな!

ヒロ君ならそう言つてるだろう。いや、たぶん言つたんだろうな。七瀬さん達に。

今思ついた振りをしてるけど(あるいは忘れてたのかも)、それが十家の総意なのかもしれない。

それなら、これだけの豪華(政治的な意味で)メンバーをそろえてきたのも納得できる。

アリス、というのもあるいは十家の偉いさんのコードネームなのかも。

「そのタイムツってのは何ですか?」

ナナさんが代わりに質問してくれた。

『珠坂インディーズバンド祭』で通称タイムツ。ゲストにインディーズ上がりのプロも呼ばれたりするけど、基本的には素人バンドの祭典ね。これの優勝者はメジャーデビューへの道が開ける、プロを目指すバンドの登竜門の一つとされてる

なるほど。

「では、今年の優勝候補はぶつちぎりで『黒六連』ですね」

ピンと来た。

「今頃はきっと、主催側とレコード会社の間でデビューの計画が出来上がってるはずです。あるいは、わざとインディーズを経由したのかも」

きわめて素直な思考でそう思ったのだけど。

「モエちゃん、やな中学生ね」

ユリさんに非難される筋合いはないと思います。

「で、スケジュールは？」

「一月後の日曜」

ミノリさんの質問に、ユリさんが事もなげに答えた。
ため息がスタジオを埋め尽くす。

一度も音を合わせたことがない、我らがコーカロリイ。目標は強敵というのもおこがましいインディーズ最強バンド、イベントはおそらく出来レース。

呆れた話だ。

先ほどから沈黙を保っていたサガノさんが立ち上がった。

「……一つだけ聞かせて」

壁に立てかけられていた見覚えのないギターを手に取るや、彼女の弛緩しきっていた瞳に眼光が宿り、たちまちプロフェッショナルの目つきになる。

この人、やる気なんだ。

「……黒六連つて、何？」

再びため息の嵐。

「有名なバンド」

ユリさんの言は間違っていないが、まるで説明になつてない。

「ふうん」

が、質問したはずのサガノさんは気にした様子もなく。

「あたしは音楽、聞かないから」

なんでこんな人がここにいるんだろう？

「ただ弾くだけ」

彼女が無造作に紡ぎ出したただ一和音が、私たちから言葉を奪つた。

本物の才能と本物の楽器の組み合わせは、理屈でなく魂を直接搖さぶつてくる。

「演らないの？」

今日は初めて『コーカロリイ』の音あわせしました。

ギターのサガノさんは本物の天才です。いつも寝てるのに動き出すと凄い。まるで山根さんみたいな人です。何というか、よく知ってる音のような気がしますが……言わぬが花ですね。

ナナさんのベースは面白みはありませんが堅実で完璧で、眞面目な人となりが感じられます。これも聞き覚えがあると思ったら、珠坂新聞社の通信講座出身とかで、父さんと同じ音でした。

ユリさんはサガノさんとはまた別種の天才です。運指法も何もあつたものじやないのに、どうしてちゃんと弾けてるのか不思議でなりません。

ミノリさんは……まさに奇跡の歌声でした。

演奏する曲には十分な注意が必要だと思います。特に歌詞。

当面の目標はインディーズバンド祭だそうです。最初は無謀だと思ったのですが……

黒六連相手はさすがに無理としても、このメンバーなら結構いいところまで行けそうな気がします。

そうそう『ヨーカロリィ』は獣犬座の星の名前だそうですよ。別に栄養価が高いわけじやなくって、チャールズ王のハートとかいう意味だつて。

『黒六連』の六連はすばる星の別名だそりだから、それに引っかけた名前なんでしょうね。

萌衣

W4〇月〇日 月

ヨーカロリィのウェブサイト見たよ。

集合写真と名前とパートが書いてあつたな。

仮面にマントでもはつきり分かる美人集團じゃないか。中等部

中で噂になつてる。

来週には配信開始、再来週には初ライブだつてな。頑張れ。

寛彰

W4〇月〇日 火

ウェブサイトなんて初耳です。
……検索検索。

ほんとだ。確かにこの間集合写真撮りましたけど。いつの間にこんなのが作つてたんでしよう。配信もライブも聞いてないのですけど、忘れたのかわざとなのか。どちらにしても、あのユリさんなら大いにありそうな話です。

萌衣

W4〇月〇日 木

七瀬の双子、タイムマッ出る気満々だと思つたら、最初からやらの分の枠空けてあるらしい。

あいかわらず恐ろしいコネだな。

このままじゃ絶対にだめな大人になる。それこそ山根さんみたいな。

いつべん思い知らせる必要はあるんだが、いくら何でも大人數の前でやらかしたらフォローしようがないだろ。

ブレーク役が必須だと思うんだが……

このままだと萌衣の予定とまともにかぶるんじやないか？

寛彰

W4〇月〇日 金

困りました。まさにダブルブッキングですね。

こうなつたら、山根さんにお出まし願うしかないと思ひます。
私とヒロ君と交互に説得しましょう。

萌衣

W4 ○月○日 土

山根さん、説得するまでもなくノリノリだった。
かえつて不安。

寛彰

W5 ○月○日 日

* * *

相変わらず集まりが悪い……。

今週は配信用の録りをやる事になつてているのだけれど、実はまだ曲が決まってない。

「古今和歌集にグランドビートとコーラスを入れるってのはどうでしよう」

「それも悪くないけど、今回はそういうプロジェクトじゃないか

ら」

前回の集まりでナナさんが出したアイディアはあつさり却下さ

れてしまつたわけで、ユリさんにはなにか腹案があるのだろう。
そのユリさんはまだ来てない。

そのかわり、見覚えのない長身やせマッチョ系のお兄さんと、
ほんわかにこにこ系の可愛らしいお姉さんがいる。

ずいぶん距離が近いけど、恋人同士かな。

お兄さんの方がひょいと右手を挙げ、話しかけてきた。

「あー、君がモエちゃんだな。うちのバカ従姉妹と妹が迷惑かけ
てるらしいね、ほんと悪い」

ミノリさんのお兄さんかな。

彼女はユリさんのこと姉さんって呼んでいたけど、そういう事

なら正確には従姉妹同士なのか。

「篤史ちゃんと私はただのお手伝いですから、気にしないでくだ
さいね」

「こらゆつか」

アッシと呼ばれたお兄さんが、ゆつかと呼ばれたお姉さんの口
を掌でふさぐが、時既に遅し。

……ええと。

脳内検索。ヒット1。

高等部の新川篤史先輩と婚約者の遠野結香先輩。
また有名人ですよ。新川といえど斗流の筆頭家。

これでユリさん、ミノリさんの素性まで芋づる式。

脳内リンク追跡中。合致率95%。

こ、こんなところに上様がいらっしゃるはずがない！

と言うことは。あのお方と一緒にいるナナさん……脳内検索、

ヒット数0。もしかしてナナコ、ナナミ、ナナオ。
さすがにナナオはないとして、脳内あいまい検索中……合致率
85%、32%、28%……えええ？

きやー。

orz
ORZ
OTZ

ああ、出来ることなら最後まで気づきたくなかったなあ。

正体隠すのなら、しっかりきっちり隠し通して欲しいところですよ。

ほんと、どんな顔して会えばいいんだろう。

そういった内心の動搖はおくびにも出さず（出てないと信じたい）、にこやかに挨拶しておく。

「お初にお目に掛かります。高天萌衣と申します。もしよろしければ、お名前をお聞かせいただけませんでしょうか？」

「返す返すも、悪い。助かる」

新川先輩はそう言って頭を搔いた。

意外に愛嬌がある人物のようだが、素性を知っていると実にやりにくい。機嫌を損ねさせる者がいたら、珠坂に住めなくするぐらいいのことは簡単だろうし。

こんな人たちと一緒にやつてく同級生は心労が多いだろうな、と思うけど……実際にはそこまで一般に知られてるわけじゃないのかもしれない。

考えてみれば、この間のオタクな人たちも宮藤さん達にデレデレしてはいても、恐れ敬ってたようには見えなかつた。

私にしてもたまたま叔父が詳しかつたから、超V.I.P.だつて先

入観で畏れ多く感じてしまつただけ。

こうやって面と向かつて話してみれば、実際には年齢相応の普通の人たちなのではなかろうかと思えるようになつてきてる。

「とりあえず、えーと、アキオとサナエということによろしく」
なんてあからさまな偽名……普通を通り越して俗っぽいなあ。

全員揃うまで二十分ですんだ。早くなつた、と喜ぶべきところだろうか。

「なんつか、統一感のないチームだな、これ」

私たちを見渡し、篤史さんもといアキオさんは失礼かつ適切な感想を漏らす。

「チームでなくてバンドなんですけどね」

「……それにしても……似合うな、ナナ」

「全然嬉しくないですから」

正体に気づいてしまつたこちらとしても複雑な気分。

……妬けるなあ。

「それで、何を弾けばいい？」

ギターを抱いたサガノさんは既に臨戦態勢。

彼女の指がワキワキしている。いつもながら、普段の気の抜けたようなサガノさんは別人のような気合い。

私たち『ヨーカロリイ』が先週弾いたのはありふれた練習曲だった。

でもそんなもので黒六連に対抗するのは不可能だ。

リーダーが何か考えてくれてる、はず。と思いたい。

『ケラエノ』作詞連鳴、作曲・編曲連調

一齊に息をのむ気配。

それはそうだ。私たちが当面の目標と見なした黒六連の代表曲なんだから。

驚いていないのは言つた本人であるユリさんと、音楽を聴かないというサガノさん、それから状況を理解できていないサナエさんぐらいのものだ。

「正気か?」

質問とも感想ともつかないアキオさんの発言は、私たちの感想を端的に代弁していた。

「まずは黒六連のファンバンドを装いましょ。それが彼らにとつて替わるための第一歩」

うわ、恐ろしいことを考える人だな。

「だから適度に手を抜かなきゃならない。彼らが『コーカロリィ』に脅威を感じない程度にね」

むしろこのメンツで、下手に弾くなんて器用な真似が出来れば苦労はしないんだけど。

「安心なさい。そそそこの腕のコピー・バンドの録音を聞かせるから、これをお手本にして演奏すればオーケー」

確かに。そういう曲だと認識してしまえば、その通り弾くことは可能だと思う。

思いつきで適当に行動しているように見えて、実に準備がいい。

この人だけは敵に回したくなないな。

そのユリさんはマルチアンプの大仰なオーディオシステムから大蛇のようなケーブルを引っ張ってきた。

無理矢理ミニプラグに変換して携帯プレーヤーを繋ぐ。実にバランスが悪い。ケーブルの値段だけでプレーヤーの数十倍か。

ケーブルの硬さでプレーヤーが浮いちゃってるんですが。

そして、半端でないクオリティーで録音と演奏のアラが聞こえまくり。

初っぱながらノイズしゃーしゃーの酷い音源。

音は外してないけど一音一音にムラのある、びつみよーなギターソロから入る。

狭いダイナミックレンジ、高域の落ちたこもった音。

ベースは音色は悪くないけどリズムキープに難あり。

ドラムスはパワフルだけど時々すっぽり力が抜ける。

ボーカルは勢いはあるけど技術がついてきてない。

……たしかにそこそこだ。素人としては悪くはないけど本家には遠く及ばない、といった程度。

こんなの真似したら、下手になりそう。録音技術も稚拙きわまりない。

でもその演奏の端々から、一から十まで完全に黒六連をコピーしようというこだわりが透けて見え、ひいては黒六連が好きで好きで好きで仕方ないという強い思いが伝わってくる。

「さあ、黒六連のファンになるわよ」

我らがリーダーはカードよろしく両手にCDジャケットを広げて見せ、またも奇っ怪なことを言い出した。

「はあ?」

不死鳥でも撃墜できそうなミノリさんの冷視線を軽く受け流し、「狂信者は異端には敏感きわまりないからね。表面だけ真似しても簡単にばれるでしょ」

子供に迎合しようと人気ゲームの話題を出した親や教師がかえつてバカにされる、というのはよくあるシチュエーションだ。

黒ムチャさん達相手ならさらに難易度が高いだろう。同じものを好きな者同士の連帯感や嗅覚を甘く見ることはできない。

「対策はただ一つ。本気で彼らを好きになること」

それはそうだろう、けど。

「いいんですか? これから倒そうとする相手に感情移入するような真似しちゃって」

下手するとミイラ取りがミイラになりそうだけれども。

「今さら仮面の一枚や二枚増やしたぐらいでどうこうなるとは思えないけど」

ユリさんの言うのは、黒六連が好きな振りをするのではなく、

彼らを本気で好きな仮の人格を上に重ねる、ってこと。

一流の役者かスパイのような真似を簡単に要求する。ナナさん

達の能力を信用してるとんでもうけど。

私は自分を偽るとか苦手だな。

「それに、何かを尊敬し愛することと、それを超えようとすると感

情は矛盾しないわよ」

うわあ。

「俺は今日こそ師匠を超えるつ！」

「この儂に挑もうとは百年早いわ！」くおのザアカ弟子めがあ

つ！

「サナエさんとアキオさんの小芝居じゃないけど（息あつてゐるな
あ）、先代を倒せば相伝、みたいな暑苦しい発想に聞こえる。
まあ確かに、黒六連なら相手にとって不足はない。

「じゃ、まずはメンバーのチェックね。かむかむえぶりぱいで」

皆がテーブルを囲んだところで、ユリさんはタウン雑誌の黒六

連紹介記事の中からサングラス＆髪のおじさんの写真を示す。

「そいつがガイアだな。そつちのでつかいのがオルテガ」

「いや、それ三連星だから。話続けていい、アッキー？」

「……いや、つい。申し訳ない」

ユリさんはこほん、と咳払いを挟むと、

「彼が鳴^{めい}。通称大将。楽器万能でトーキーの名人。彼のような天才でなくては百戦錬磨のミュージシャン達のリーダーはつとまらない

いわ」

続いて、退廃的な雰囲気をまとった垂れ目の美少年。

「こっちがボーカルの響^{ひびき}。自慢の美声とイケメンに女の子はイチコロ」

「これは轟^轟、ドラムの天才。驚異のリーチでダブルドラムでも叩いてみせるわ。でも、飛行機だけはダメっぽい」

髭に和装、枯れ枝風の青年。

「着物のが弾^{だん}。ベーシストとしての腕は天下一品！ オタク？ 変人？ だから何??」

いかにも利発そうに見える小柄な美少年。

「彼は、キーボードの奏^{かな}。ファンサービスは、美貌と頭の良さでお手のもの」

……コピべ然とした説明ありがとうございます。

「んでもつてオーラス、リードギター、調^{しゆう}！」

と、ユリさんがラスト一人を指さした直後、

「……!?」

らしからぬ俊敏さで雑誌を引つたくり、食い入るように見つめるサガノさん。

その速度ときたらカメレオンの捕食ぱり。

「黒六連の演奏、聞かせて。さっきの曲でいい」

珍しくも氣色ばんだサガノさんに詰め寄られ、さしものユリさんも少し引きぎみ。

「ん、うん」

冒頭のギターソロを耳にした瞬間、やっぱり本物は全然違うなと感心する。

が、サガノさんの感想はちょっと違ったようだ。

「……見つけた」

あたかも肉食動物が獲物をロックオンしたかのような眼光。いつもが感情を感じさせない鴉のそれなら、今は猛禽。

ほんと、ギターがらみだと人が変わる。

何を思ったか。サガノさんは自分のギターを引き寄せ、スピーカーから流れる演奏に割り込んだ。

彼女は黒六連を知らないはず。ならば、さつきコピー・バンドの演奏を一回聞いただけで一発耳コピ?

違う。あれは……本物の黒六連のリードギターを再現している!

一同でラストまで聴き入ってしまった。

拍手。

いやあ、本当に天才なんだ。ただただ凄いとしか言いようがない。

けど、今のはただ才能があれば出来るってものじゃない。

とすれば、

「知り合いか?」

ミノリさんの言うとおり。調さんとやらの音を知り尽くした間柄であるなら、そんな真似も可能かもしれない。

「兄さん」

なるほど。

サガノさんの答えに一同納得しきけたが、首をひねった者が約一名。

「一人っ子じやなかつたか? 先輩」

アツシさんもといアキオさんのツッコミ。

「正確には又従兄。あんまり上手くなかったけど、ギターが好きなんだった」

過去形で言うのはあまりにも氣の毒な気が。

「しかも昔よりダメになつてゐる。ギタリストとして、なにより人として」

これまた強烈なダメ出しですこと。

あれで?

後半についてはサガノさんに発言権はない氣がするけれど。

「是が非でもつかまえて何があつたか白状させないと」

と、完全に犯罪者扱い。ギター持つた彼女はほんと強気です。

「よーし、じやあいちど合わせてみるわよ。さつきの『黒の六号』を参考に」

ユリさんが指をならすと、メイドさん達（宮藤の双子さん）によつて楽譜が配られる。

うわ、楽譜上にこまかにミスがいちいち指示されてる。こんなのが初めて見た。

汚染されないように別人格で演りたいぐらい。

「まかせて。完璧に下手に弾いてみせるから」

「サガノちゃんに關しては心配してないけど。ミノリちゃん、間違つても普通に歌つちゃダメだかんね。感情も込めないで」

「そちらへんは承知してるとから」

ほんとうだ。歌詞も意味が通らないよう、いろいろ改変されてる。音だけならなんとなく原曲っぽく聞こえなくもない。

これは賢明な措置。偶然なんだろうけど偶然とは思えない出来事が連発。先週の惨事は思い出したくもありません。

彼女は巫女さんみたいなものなのか。そういういた運命に溺愛さ

れてる系の方には、とにかく慎重に行動していただかないと大変なことになります。

「よーし、みんなお疲れ！」

通し演奏五回でユリさんのオーケーが出た。

レコードに録音された、最後の演奏を再生してみる。

「で、どうよ？」

「完璧な出来に聞こえます。微妙に不慣れで絶妙に間違った演奏として、これ以上は望めないかと」

というのが私の感想。

「何度も何度も聴きたくなるような妙な魅力、というか魔力がありますね」

『黒六連』の演奏にはあって、コピーバンドである『黒の六号』にはなかった何か。

「ふふふ、みのりんボーカルは伊達じゃないわよ」

そういうユリさんの演奏にも魔的な何かが感じられてならないのだが。

「……なんか徒労感が」

ナナさんは、そうだろうなあ。上手くなるために黙々と練習してきたのに、下手に演れって言われたんだから。

「出来ないことは要求しないわよ。メンバーを信じてるからこそこんな無余が言えるんだからね」

ほんと、他人をたきつけるのが上手い。

「はあ、二本豪華お菓子喰うネルソン」

ええと。

察するにミノリさんは、『日本語がおかしくなりそう』、と言ひ

たいのだろう。

言語野に機能的ダメージを与えそうな空耳歌詞になりはててるから。それを何度も通して歌つたのだから、まだ影響が残ってる模様。

「指令、心靈、終礼、失礼……戻った？」

「ぱつちり。すっかりいつものミノリ」

サムズアップするサガノさんういすギター。

いつもこうしてれば明るくて格好いいんだけど。

ギターをスタンドに置いた途端に、しなーっとしてしまった。だぼつとした感じの服装が、單にだらつとして見える。

「……疲れた」

憑かれてた、の間違いじゃないの？ もしかしてギターが本体？

とか、いつもの事ながら疑念が浮かぶ。

「じゃ、みんなの許可も出たつことで、これうるから。そのようにしておいて」

「らじや」

あのサイト、アキオさんが作ってたのか。

「あと適宜噂流せばいいんだな」

「おお、なかなか分かっておるではないか越後屋」

「いえいえお代官様こそ」

いっぷひ、と時代劇調でお下品に笑うイケメンと金髪美女。

いやな構図だ。

「ユリさん、想像してたより遙かに俗っぽいな。あんまり違和感ないぞ。っていうかいつもの姉さんと大差ないじやんか」

「そりやそりや。人より出でて人より人、つてね。少なくとも今

の私はあんまり高尚な生き物じゃないわよ。サナエちゃんがサナエちゃんであるようにね」

暫しの間きょとんとしていたアキオさんだが、今度は苦笑する。

「なるほどね、さすが姉さん、と言わせてもらおう。つたく、非常識な」

アキオさんが何に呆れてるのかはわからないが、どうやらあまり愉快でない話題と推察される。深入りしないでおこう。

「ミノリもおんなじように、は行かないんだろうな」

「無理でしょ。北斗の領袖ってのは北斗そのものと同義だし。人の一部に過ぎない頭が人そのものを統べてるようなもの」

「そうだよなあ。アレだしなあ」

全然分からぬながら、さらに不穏な感じになってきた。やつぱり方向転換した方がよさそう。

「ところで、アキオさん達は参加しないんですか？」

「俺？ 消費専門。サナエもソプラノリコーダーぐらいしかできないぞ。ああ、初さん達はいるんじゃないのか？」

「私たちですか？」

急に話を振られて少々驚いている双子メイドさんズ。

ヒロ君の話じゃ七瀬さんところの双子は凄いらしいけど、確かにこちらのお二人も才氣煥発って感じがする。

「歌ぐらいいしか歌えませんが」

いや、それはそれで。

「双子でハモるのはいいかもしません」

ナナさんに賛成。この二人なら見栄えもするし。

「目指せザ・ピーナッツ？」

それは古すぎ。ユリさん何歳ですか。

「あつちがプレアデス、私たちがコル・カロリ。なら、初さん終さんのデュオ名は『フォマルハウト』ってところかしらね？」

ミノリさんは茶化すように言うが、なんだか表情が浮かない。

声音にも若干のこわばりがある。

「げ。今〇美×とか歌われると嫌だな」

「ダメです没です絶対封印」

またも不穏な雰囲気発生。アキオさん達にも感染。ナナさんなんて両手で大きなバッテン出し。

「私たち、核爆弾か細菌兵器が何かですか」

「ねえ」

さすがの二人もちょっと表情が引きつって見える。

「似たようなものでしょ。間違つても一つ星に誓つたりしないようにな」

「御意のままに」

誓うと核爆弾並みに危ないんだろうか。うーん。

皆の至極面白な表情（約一名氣の抜けてるのを除く）を見たところ、すべて冗談というわけではなさそうだ。

もちろん、全面的に信じられる訳じゃないけど、ミノリさんのような例もある事だし。

どういう人たちなんだろう。十家って。

だめだめ。考えたらだめ。間違いなく珠坂の暗部なんだから、深入り禁止。

＊＊＊

今日、配信用の曲を録りました。

もうアップロードされてるはずですが、微妙な出来なので聴かないでください。お願ひです。

それより、来週日曜に駅裏の『れれこん』で初ライブやるそうです。練習試合のようなものですね。で、土曜にも集まることになっちゃったんですが……出来れば、ですけど。ダメですか？

ありがとう、ヒロ君。

いただいた土曜日、大切に使わせてもらいますね。

リソリーン&ベンベンで『りんべんバンド』ですか。巧いし、可愛いんじゃないですか。

でもヒロ君の名前が入ってないのは残念かな。

『りんべんバンド featuring 高天寛彰』とかどうでしょう。

W5○月○日 月

萌衣

お、初ライブおめでとう。

凄いな。とんとん拍子じゃないか。

土曜は遠慮無く使ってよ。ウイークデーはほとんど俺が好きにしてるんだからさ。

W5○月○日 水

萌衣

萌衣たつてのお願いだから俺は聴いてないけど、『コーカロリ』の演奏、早速話題になつた。

そういうえらうちのバンド名も一応決まつたんだが、『りんべんバンド』だと。

あ、来週帰つてくるつて親父殿から連絡あつた。タイムマツの主催者の四三氏から招待状が来たつて。母上様ともどもレコーディング中断して戻つてくる気らしい。どういう風の吹き回しだろう。

寛彰

W5○月○日 火

寛彰

W5〇月〇日 土

最初に、ごめんなさいを言つておきますね。

W5〇月〇日 木

父さん達が？ 豪華ゲストじゃないですか。

驚きました。それが本当なら恥ずかしいところは見せられませんね。

今年のインディーズバンド祭りは盛り上がりそうです。

萌衣

W5〇月〇日 金

いや、あくまでも観客らしいけどな。△高天夫妻

山根さんが来週に備えて寝貯めしてるので、今日は三食とも総菜パン。

腹減るなあ。

こりや明日明後日も期待薄だ。萌衣は外食していいからな。そこのぐらいなら小遣い残ってるだろ。

寛彰

W6〇月〇日 日
＊＊＊

テーブルで牛乳と味気ない総菜パンを腹に詰め込んでいると、「おはようございます」

食堂のドアが開き、舌つ足らずな甘ったるい声が聞こえてきた。
あれ、起きてきたよ。

「本当に早いっすね。まだ十時なのに」

「昨日はたっぷり寝させてもらいましたから。目覚ましが鳴る前にお目々ぱっちりですよん」

と、皮肉を解さずガツツボーズをとつてみせるが、全然似合わんなあ。

いつものようにスタジオに行つたら、なぜかびっしり布団が弾いてあつたんです。ユリさんは明日に備えて英気を養うように、つて言われて。そのまま集団お昼寝の時間になつてしましました。サガノさんなんて三秒で熟睡です。びっくりです。でも御陰様ですごく元気になりました。明日こそはちゃんと頑張りますから。応援してくださいね。

萌衣

「それはいいから着替えてください。親しき仲にも礼儀ありつてね」

この人ときたら、レースのヒラヒラネグリジェという扇情的な姿で家中を闊歩するんだから困りものだ。

「まあたヒロ君たら。本当は嬉しいくせに。このツンデレくん」「いやマジでどうでもいいっすから」

「がつがーん！」

実際、今さらドギマギすることはないな。一緒に暮らし始めてすぐに底が見えちゃったし。

うちで住み込みのお手伝い（本人によれば『メイドさん』）をやつてくれているこのロリおねえちゃんは、名前を山根愛子とう。初見でこれを『なるこ』と読める人はまず居ないが、名は体を表すとはよく言つたものだ。

うちの母上の後輩だっていうから三十前後にはなつてゐる筈だけど、垂れ目の童顔・わっこい身体で、うちのエステ漬けの母上とは別の意味で年齢相応に見えない。留守がちの両親にかわつて子守に雇われ、うちに来た頃から見た目がまるで変わつてない氣がする。

まあ別に容姿はどうでもいいんだが、この人と来たら中身も見た目通りの子供っぽさなのだ。

確かに家事全般に関して優秀な能力を發揮するのだが、お手伝いさんとしては多分に問題がある。

なにせやたら寝る。買い物に出れば迷う。十年暮らした町なのに全然道を覚えてないんじやなかろうか。

そんな山根さんだというのに、あの母上が一目も二目も置いてるのが不思議で仕方ない。なんか弱みを握ってるのかもしけんな

とも考えたことはあるが、そんな方向に頭が回る人とも思えない。ともかく、このロリおねえちゃんこそが俺と萌衣の唯一の理解者にして協力者なのだから、あんまり無理にも出来ないわけで。

「だーっ！ そこで着替えるな！」

「三つ編みにするの手伝ってくれます〜？」
あんまり無碍にも出来ないわけで。

「はいはい、へいへい」

山根さんの柔らかい焦げ茶色の髪はすべすべツヤツヤ。やっぱりたっぷりの睡眠がポイントかね。

「かなり長くなつたっすね。そろそろ美容院行つたらどうつか？」

「こここのところ萌衣ちゃんがバンド活動で忙しくて一緒に行つてくれないから」

外出時には保護者必須だしな。GPS携帯ぐらいじゃまだ不安が残る。

彼氏でも作ればいいのに。

「かわりにヒロ君ついてきてくれる？」

「だが断る！」

勘弁してくれ。

七瀬姉妹だけでも手に余つてゐるのに、休みの日までこんな大人子供を相手にさせられてたまるか。

ああ、あいつらほつといたらこんな感じのダメ大人になりそうだよな。

「最近ヒロ君が冷たい。しくしく
「嘘泣きしてもダメっす」

昔はそれなりに頼れるお姉ちゃんだったのに、最近はこんな具合。

甘やかすと限りなくつけあがるからなあ。

「俺は今日は寝てるから、後頼んます」

「今日は萌衣ちゃんが外出る日だっけ。じゃあついでにお買い物頼んじゃおうかな」

にゅふふ、と笑う。

見た目も中身も女学生みたいな人だ。

「ダメっすよ。忘れたんですか、今日萌衣の初ライブじゃないっすか。邪魔しないであげてください」

「あ～、そうだったねえ。じゃあまた寝ようかな」「寝るな！」

＊＊＊

「おはようございます、山根さん」

「おはよう、萌衣ちゃん。今日も可愛いわね」

「お上手ですね。山根さんもとっても可愛らしいと思いますよ」

「うう～ん！ 私に優しい言葉をかけてくれるのは萌衣ちゃんだけっ！」

下手すると娘ぐらいの歳の子供に、ひしひしと抱きついてくる。

ほんとうに子供っぽいなあと思いつつも、嫌な感じはしない。

母親とのふれあいにあこがれてるのかなあ。

「もしかしてヒロ君に何か言われたんですか？」

「美容院にも買い物にもついてきてくれないし、寝るなとか言うんだもの」

「よしよし。今は無理ですが、再来週にはきっとお供しますからね」

「約束ね？」

上目遣いで見上げてくる表情を見ていると、どっちが年下か分から無い。

「ええ、約束です」

指切りさせられてしまった。

この人、こんなに可愛らしいんだから優しい彼氏つくればいいのに。

学生時代にはきっともてたろうと思うけど。ここ何年もうちに籠もっちゃって全然出歩かないから。

もしかして私たちのせいなのかな、と責任感じてしまう。

「そんな顔しなくていいんだよ。ヒロ君は光耀さんとお妙さんの息子だけど、萌衣ちゃんは私が育てた私の娘みたいなものなんだから。萌衣ちゃんの成長を見守るのが私の一番の楽しみ」

「ああ、こんな事を言われてしまっては、現状を受け入れてしまうしかないじゃないか。

ほんと、この人には敵わないなあ。

「それじゃライヴ頑張ってねー！」

「ありがとうございます」

夕刻。

駅裏の『テレセントリック・コンセントトレーシヨン』。通称れこん。語呂はいいけどちっとも意味が分からぬ名前のライブハウス。

発足直後の単独・単曲ライブという無茶な状況にもかかわらず、二百人級のスペースを聴衆が埋め尽くしていた。

私の常識ではちょっとと考えられない話だが、ユリさん達のバッカを考えると何らかの動員が掛かってる可能性は十分ある。

そんなことを考えてしまう自分がちょっと嫌になる。我ながら冷めてるなあ。

でも。だからこそ。

観客席のノリを見て、彼らの瞳の輝きを見て、驚いた。

この人達、本気で『ヨーカロリィ』に会いに来てる！

いや、ユリさんアキオさんの手腕恐るべし。これならナイスで宣伝大臣が務まる。

ふと笑いがこみ上げてきた。

左肩に手が置かれた。

「モエちゃん。あなたの自身も、あなたを含めたこのチームも、十分信じるに足ると思うけど。自分も信じられない者に追いつかれ

るほど『黒六連』は甘くないわよ」

「そうですね、失礼しました」

この人もちょっとエキセントリックだけど、やっぱり大人なんだな。

「ギター持ったサガノちゃんやミノリちゃんを見習えばいいわよ。

「ガングンいきましょ」「ふふふ、分かつてゐるじゃない」

「それに、ユリさんもですね？」

「ふふふ、分かつてゐるじゃない」

観客席から声が上がる。

「「ナナさーん、ミノリーん！」」

ああ、端から見てもあの二人はペア扱いなんだ。
とくだらないことに感心してしまう。

律儀に腰を折るナナさんに、さつと一瞥をかえすだけのミノリ

さん。

「「ユリさーん！」」

軽く片手を振つてみせるリーダー。

「「サガノさーん！」」

和音一発で答えるギター。

それから、

「「モエちゃん！」」

「「モ・エ・たーん！！」」

高揚と同時にちょっとした悪寒が。最前列付近に一様にツーテ

ールをくつつけた暑苦しいお兄さんの一団が混ざってる氣もするけど、意識の隅に追いやっておく事にして。

とても不思議な感じがした。

吹けば飛ぶほどちっぽけな高天萌衣という小娘の存在を認め、心にとめてくれる人がこれだけ居る。

形式上はどこにも存在しないことになっている人間にさえ、彼らは声援を送ってくれている。

外へ出ろと言う、ヒロ君のアドバイスを聞いて良かつた。

ユリさんのスクウトに乗つて良かつた。

私はきっと、幸せ者だ。

リーダーが、ぱつと右手を挙げた。と同時に、一発で観客席が

静まりかかる。

さすがユリさん。大スターなみの風格を備えている。

あの人、学校の先生とか意外と天職かもしれないな。さもなき

や独裁者（笑）

「我らが黒六連に捧げて『ケラエノ』行くよ！」

続いて親指を立てたのは私への合図。

了解。

ヒロ君が稻妻を彫った、黒のステイック。私が波を彫った、白

のステイック。

二本のステイックを打ち合わせ、カウントダウンを始める。

「ワン・ツー・スリー・フォー！」

どつ、と観衆が沸いた。

私たちの演奏は完璧だった。

どのぐらい完璧だったかというと、

「いや、凄かったよ。本家はともかく『黒の六号』と同じぐらい

には十分上手い！ 見た目は段違いだけどな（笑）」

とライヴハウスのマネージャーさんに評されたぐらい。

ほんと、このメンバーは最高です。

惜しむらくはヒロ君が参加できることだけかな。

「モエちゃん、はい」

あれ？ 私、泣いてた？

ここでハンカチがさっと出てくるのがナナさんがナナさんたる所以だな。ミノリさんは気が感じないだろう。

「ずびばぜん」

「前にたまってるファンや黒ムチャさん達は私たちが相手してお

くから、モエちゃんはもう帰った方がいいよ。そろそろ中学生に

は遅い時間になっちゃうからね」

「ご配慮ありがとうございます」

「ううん、気をつけてね。うちからお迎え来てもらつた方がいいかも」

「あはは、きっとお迎えの方が迷っちゃいますから」

コスチュームを脱いで髪型を変えてしまえば、盛り上がる群衆

のど真ん中を突っ切ってでも簡単に脱出できる。

仮面バンドの最大のメリットを最大限に利用つてわけ。

「それじゃあ、あとはよろしくお願いします」

「はい、任されたよ」

明日からしばらくの間、姿を消しますね。山根さんにはよろしくお伝えください。

人前で演奏するつてこと。知識ではよく分かつたはずなのに。

自分で経験してみると、ひと味もふた味も違いました。

大勢の人に求めてもらえる事が、こんなに自分を力づけるとは思いませんでした。

チャンスをくれたユリさんにありがとう。

思い切つて町に出た自分にありがとう。

そして誰よりも、ヒロ君にありがとうございます。

萌衣

W7〇月〇日 月

「今帰ったぞ。不肖の息子よ、うん、元氣で何よりだな。はつは
つはっ？」

「こらこら、親の方が不肖とか言うなよ」

息子相手だから偉そうな物言いなわけじゃない。テレビでもこんな感じなんだよな。

實際、このオッサンは各界の重鎮と同等の扱いを受けている。こんな態度も含めて高天光照という強烈なキャラクターを形成している事を、ただただ実力で認めさせているのだ。さすがはゴッド。

「そろそろ彼女は出来たかしら、ヒロ？」

「いや、母さん見てたら到底女性に幻想は持てない」

「うん、それもまた良し」

何がいいんだ、妖怪オババ。

「さて、せっかく我が家に帰ってきた事だし。俺たちは寝室に籠るもので後よろしく」

「弟が欲しい？ それとも妹がいいかしら？」

「さ、最低だな、このデリカシー欠如夫婦！」

* * *

こらこら、第一部完、みたいなモノローグで終わるなっての。

ドキッとしたぞ。

まあ、萌衣が自信をつけられたんなら良かったよ。俺も時間を割いた甲斐があつたつてものだ。

いや、我が両親とはいえ、あの二人強烈だわ。

親父殿は相変わらず神様じみてるし。母上様は妖怪じみてるし。

でも、これはチャンスだと思う。

萌衣がいつまでもこそそしなきやならないのを、仕方ないですませたくないんだ。

まかせてくれ。きっと何とかしてみせるから。

寛彰

W7〇月〇日 火

私は今まで十分です。高天家に波風立てようなんて思つてません。

ヒロ君に存在を認めてもらつただけで、それで満足。

タイムツまで表に出ませんから。
ごめんね、面倒かけちやつて。

萌衣

W7〇月〇日 金

* * *

「親父、お袋。相談がある」

両親が帰ってきてから数日来タイミングをはかつてていたが、落ちついた朝食後の席で話を切り出すことにした。

「分かってる分かってる。弟の名前は寛彰に決めさせてやる」「ふざけたらはり倒すからそのつもりでね」

落

いらっしゃいらいらいら。

「ふざけてるのはそっちだ！」

「おお、悪い悪い」

「掌がじんじんするが、ここで痛がつてしまつてはまた冗談モー

ドに戻つてしまふから顔には出さないようにな。

表情と態度で、精一杯真剣さをアピールする。

ここまでやれば、さしもの非常識夫婦にも、こちらの本気度が

伝わつたと見える。

「なあ……俺には本当は兄弟がいたんだろ」

両親は少し面食らつた様子だつたが、さすがに立ち直りが早い。

「……愛子、ね」

「まあ、良くある話だ。それぐらいでいいだらう」

二人にとつても俺にとつても愉快な話じやない。

これまで話題にしなかつたのは、人としても親としても当然だ

ろう。

でも俺は話を続ける。

「小六の頃、自分の生い立ちを調べる授業があつたんだよ。ちょうど親父もお袋も海外に行つたときで、山根さんに無理言つて

昔話を聞き出したんだ」

「……そいつあ間の悪い話だ」

「残念だつたけど、それだけの事よ」

両親にとつても衝撃は軽いものではなかつた筈だ。

心騒がされず、目を背けず、その記憶をただ歴史として受け入れられるようになるまで一体どれほどの時間が掛かつたろうか。

あるいは今でもなお、それは成し遂げられていないのかもしけれ

ない。

「そうか」

だからこそ、俺は言わなきやならない。

「最近、兄弟と連絡を取つてゐる、つて言つたら、驚くか？」

お袋が親父の胸ぐらを無言でひつつかむ。

がつ。

想定外の行動だつた。

「あ、あの、妙さん？」

「三秒あげます。証明なさい」

我が母親ながら嫉妬深い。見事な邪推。目が三角になつてます。

「知らぬ！ 存ぜぬ！ あずかり知らぬ！」

我が父親ながら、清々しいまでに勢いだけの否定連打。

「その意氣や良し」

あれ？ それで引き下がつちゃうんだ。

「信じられない男と一緒になる筈がないでしきう」

「ふん、それが夫婦の絆つてもんだ」

親父、頬が引きつってるぞ。

事あるごとにこんな風に釘を刺されてるんじや、浮気はできん
だらうな。

というわけで、隠し子説は却下された模様。

「騙り、とすれば何が目的かしら」

「大財閥の跡目争いじやあるまいし、うち程度の財産狙いとして
は効率が悪すぎる。なら業界への影響力か？」

「何にせよ、私たち夫婦の信頼関係、甘く見られたものね」

「違ひない」

不敵に笑い合う高天夫妻。

……息子に仲の良さを見せつけたいだけなんじゃあ。うぜえ。
「そりやないな。むしろ本人は親父達には秘密にしておきたがつ
てる。話したのは俺の独断だ」

「ならもう少し詳しく話せ。まだ歳も名前も教えてもらつてない」

親父の言うことはもつともだが。

「悪い。俺の口からはこれ以上は話せないけど、とにかくインデ
ィーズバンド祭に行つてくれ」

「つてことは、そいつ音楽やつてるって事だな」

「聴けば分かる、つて言いたいの?」

「なるほど、とお袋。

「四三さんからの招待状に『後悔させません』つてあったのはこ
れね」

「あいつの仕込みか。面白くなつてきたな」

「両親なりに納得しているらしいが、なんとなく行き違いがある
氣もしてきたな。少しヒントを出しておいた方が誤解が減るかもしれないな。」

「そうそう、山根さんは本人に直接会つてるはずだけど」

「当の山根さんは、午前中いっぱい食のため放送休止中。」

「聴くだけ無駄ね」

「混乱するだけだな」

「山根さん、信頼度ゼロですね。」

「なんとか話の切つ掛けは作つた。

きつとうまくいく。いかせてみせる。

萌衣にこれ以上肩身の狭い思いはさせない。

寛彰

W8〇月〇日 土

明日は頑張ります。

だからヒロ君、一緒にいてくださいね。

萌衣

W8〇月〇日 日

珠坂インディーズバンド祭当日。

待ち合わせ場所に現れた七瀬の双子は、濃い紫のワンピース、
二本しっぽにはレースのリボン、というふざけた出で立ちだった。
間違つても、バンド、つて感じじゃないな。小学生のピアノ発
表会みたいだ。

樂器ケースを下げるといふ。本当に娘っぽい。樂器が大きい分、
ただでさえ小柄な身体がさらに小さく見える。
……つて、ハードケース入りのコントラバスを軽々片手持ち!?
このゴリラ女。

こいつら、見た目だけは微笑ましいんだけどな。

「よおヒッキー。真打ち気取つてようやくのお出ましか。怖じ気
づいたかと思つたぜ」

「お前は少しぐらい怖じ気づけ」

だから、タイムツでは精一杯いい演奏してくれよな。

鈴菜には緊張するという回路がないらしい。

「少しは心配していたのだけど」

少しだと言い切るところが撫菜らしい。

そうそう、こいつは珍しくもベンギン眼帯じゃない。顔の右半

分を隠す銀色のマスクという外連味あふれるアイテムを装備している。

「悪い。うちのスタイルを引っ張つてくるのに手間取った」

「はあい」

「おーすげー、メードさんだよ」

「正確には『メイドさん』です。伸ばさずに『イ』をはつきり発音してくださいね。ここ大切です」

と、自己紹介すらすっとばして、どうでもいい事を訂正する山根さん。

「これが遅れた元凶。うちで俺たちの世話をしてくれる山根さん」

「山根愛子です。忘れ去られフラングだから、『なるちやん』って呼ぶのだけは勘弁してね」

「七瀬ベンベンです。通称撫菜で通つてます。こちらは妹の鈴菜

ことリンリン」

完全に流してボケ返した。さすが。

ボケばかり三人にツッコミ不在。会話が成立しない恐ろしい世界だ。

「買い物にナビが必須なのに午前服は不要なメードっていう、世にも不可思議な生き物だから、この人」

「のんのん。りぴーとあふたーみー。『メイドさん』

「メイドさん」

「……」

三人分、五つの非難がましい視線が集中する、

俺か？ 俺が悪いのか？

「わんすもあ。『メイドさん』」

「「メイドさん」」

何で俺まで。

「おまえら、異様な一団と化してるな」

最悪のタイミングで親父達に補足された。

うわ。

見た目コワモテな親父は着流し。若作りなお袋はいつもはまとめてる髪を下ろし、妙に胸元の強調された真っ赤なスーツ姿。どつから見てもやーさんとその情婦以外の何者でもない。

「やあ、ゴッドフィンガー氏とその奥方。お初にお目に掛かる！」

「コスプレ乙」

一発でぱれていた。

「お？ なんだ、こちらのちとエキセントリックなお嬢さんたちは」

親父を引かせると、やるな双子。

「俺のバンド仲間だ。残念ながら」

「おう、残念だな」

「ええ、残念ながら」

失敬な。

「自分らの方から引っ張り込んだきながら……」

「もしかして、七瀬家の双子さん？」

「もしかしなくともベンベン＆リンリンちゃんです」

山根さんの発言に、母親は滅多に見せない緊張した面持ちになる。

「寛彰、今の態度はまずいわ」

「本当の実力者にだけは失礼しちゃいかん。今まで首がついててラッキーだったと思えよ」

「息子が失礼いたしました、七瀬さん」

二人並んで、一礼。

嘘だろ!?

あの偉そうな親父&お袋が、息子の同級生に過剰なぐらいの氣を使つてゐる。

確かに旧家のお嬢たってのは知つてたが……御当主様あたりならともかく、こいつらただの中学生だぞ。

親父やお袋ほどの人物がそこまで氣を使う程の相手なのか?

いやいや、両親一流の手の込んだ冗談の可能性も十分にあるが。「くるしゅうない。下賤の者が失礼なのは当たり前だし。いちいち腹立てても仕方ないよん」

利用価値のある間は、お友達

「お前ら……」

大人相手でもお構いなしかよ。

鈴菜はともかく、撫菜の言い方は冗談に聞こえないんだよなあ。こいつらぜつて一矯正してやる。

りんペんバンド専用の控え室まで用意されてゐた。至れり尽くせりだなおい。

「スタイルリストいらぬじやん」

「高天寛彰、つまらない男」

言いたい放題だなこいつら。

「まあ、諸事情あってな」

いつもの制服だ。文句あるか。

どうせ男の衣装なんてだれも気にしてないつて。

こいつら見た目は美少女だし、視線はそっちに行くだらうよ。

そんな事情はどうでもいい! 今日はえぐり込むように叩け!

叩け! 叩け!

緊張はしなくともテンションは無意味に上がりまくるんだな。

「さもなきやわたしが高天寛彰を叩く」

撫菜のこれも、テンションが上がつてると解釈していいんだろう

うか。うーむ。

「叩くな」

「では撃つ、ということでおひとつ」

「撃つなつての」

「じゃあせっかくだから私は『撃ち殺す』を選ぶぜ!」

「……」

だめだ。こいつら本当にわからん。

意味のない会話につきあつていると、控え室のドアがノックされた。

「りんペんバンドさん、そろそろ舞台袖にお願いします」

「うーいす」

「その返事は女の子としてどうかと思うぞ、鈴菜よ」

「了解。七瀬鈴菜・高天寛彰とともに舞台袖に急行、別命あるまで現場で待機します」

「いや、それもやめとけ」

呼びに来たイベントスタッフの頬は引きつりまくつていたが、最後まで笑顔は崩さなかつた。プロだなあ。

ここいらでは最大のコンサート会場、珠坂野外スタジアム特設ステージは満員大盛況だった。

収容人数六千人級の筈だが、強引に八千人強の座席を用意してある。

立ち見含めれば一万人行つてゐるんだろう。

去年までは座席が八割ぐらい埋まる程度が普通だったって話だから、黒六連効果で観客倍増と言うことになる。

おそるべし黒六連。

俺もさすがに緊張してきた。ライヴハウスぐらいならともかく、これだけの人前で演るのは初めてだしな。

『四番手は可愛らしい地元中学生バンド『りんぺんバンド featuring ヒッキーT』。名門珠附紫城学園中等部から特別参加だー！』

おーっ！

巨大モニターにアップで映し出される双子のアップに盛り上がる会場。

写真に性格は写らない。昔の人はよく言ったものだ。

『トランペットのベンベンとウッドベースのリンリンは、見ての通り双子の美少女だー！ そして！』

カメラが俺に向く、こらこら。

『ヒッキーTはなんとゴッドファインガー高天光熙氏のご子息！

ゴッドのディスクにも何度もクレジットを残してゐる実力派ドラマーだぜ！』

ここで親父の名前を出すなよ。分かってねえなあ、司会。

あれが高天寛彰か？ 曲から想像してたよりずっと若いな！

とか分かってる感想が聞こえてくるとちょっと嬉しい。

しかし、きやー可愛いー！ という声がさつきより多いのはどういう訳か。

考えない考えない。

今は演奏に集中だ。

「よくぞ集つた我が精銳達い！」

おーっ！

一言目からなんちゅうMCだ。やっぱ錦菜にマイクは問題あつたか。

しかし客席ノリいいな。

「我らの曲を耳にしたこと、汝ら一生の誉れと思うがよい！ 伏して拝んで有り難く拝聴するよう！」

「だまつて聴けやゴルア」

おーっ！

ここまで言われても誰も怒らないのね。

だめだ。みんなこいつらを甘やかしすぎです。

「そんじやいくよん、『ウチとアニキのケケラケラ』！」

どつ

お氣楽脳天気なメロディーとアレンジ。強烈な歌詞。

あまりの落差の激しさに客席大爆笑。

俺たちリンベン以下略は、あれの完全版を一万人からの前で演

り……これ以上はないバカウケを勝ち取つた。

アンコールでは観客総立ちで手拍子、三回目には大合唱まで入る始末。

確かに楽しかつた。あそこまで客に喜んでもらえると演奏者冥利に尽きる。

でも、良かつたというか、悪かつたというか。

こりやもつと増長するな。はあ。

まで集まっているというのに、まだ姿を見せないリーダーに気をもんでいたのだろう。

「ほんとうに申し訳ありません」

『リンベンの件でちょっとおしてるが、休憩を短縮して巻いてくれ！ 後半開始は十五分後だ、遅れるな！』

なんでこう絶叫するかね。

「山根さん、そろそろ」

「はい～」

関係者席をそっと抜け出そうとしたところを、鈴菜に補足された。

「おっと兄ちゃん、どこいくん？」

「悪いが所用があつてな。しばらく両親の相手頼む」

「いつも肝心なときには姿がないと思ったら、こつそり白馬の王子に変身ですか」

「何の話だそりや」

鈴菜はいかにも理解不能だが、撫菜の発言は良くわからないなりに意味ありげでドキッとさせられることがある。

「とにかく頑張って」

「なんかわからんが、気持ちだけ受け取つとく」

* * *

「遅くなりました」

慌てて楽屋にやってきてみると、

「セーフです。ユリさんまだですか？」

ナナさんが肩を落とす。

サポートのためだらうか、アキオさんやサナエさんに宮藤姉妹

らぶつちぎりかねん、と言つてるよね。

「……ども」

サガノさんはまだギター持つてないからローギア状態のようだ。

「そちらの新手のメイドさんは？」

ミノリさんの疑問もごもっとも。

確かに。ここメイドさん密度高すぎです。秋葉原じやあるまいし。

「山根愛子と申しますー。斗流十家の皆様におかれましてはごき

げんよろしくう」

「しーっ！ しーっ！ しーっ！」

ああ言つちやつた。露骨に言つちやつた。

迂闊だつたなあ。この人連れて来ちやつたの。

「気がついても、空氣を読んで言わないのがお作法ですから」

さらに危険な言葉を紛ぎだしかねない口を押さえて黙らせる。

「モックタートルにアリス、兎の穴ときて……今度はヤマネ」

「あの人、ハートの女王だつたよね」

ミノリさんナナさんがなんとも微妙な表情になつていた。

「なんにせよ、粗末に扱うと危険な感じがしない？」

「ええ」

すぐに結論に達したようだ。

「不在のリーダーになりかわり歓迎します、山根さん。ボーカル

の古河ミノリです」

『コーカロリイ』樂屋にようこと。ベース担当の三ヶ所ナナです』

精一杯友好的な態度に、ほつと一安心。

宮藤の双子がすっと進み出る。

「まさか大先輩にお目にかかるとは思いませんでした。わたくし、宮藤初といいます」

「同じく終です。行ける伝説と同席できて光榮です。以後お見知りおきを」

宮藤のメイドさん姉妹は山根さんを知っているようだったが、不思議な話ではない。

スカートをつまんでの教科書的に綺麗なお辞儀に対し、山根さ

んは鷹揚に頷く

「どうもー。お噂はかねがね。珠大家政科志望でらっしゃるそ
で。ぜひ頑張ってください」

「はい、先輩のお名前を汚さぬよう精進いたします」

「今後ともご指導ご鞭撻のほど」

普段感情をあまり出さないクール系のお二方が、明らかな感激

の表情を浮かべている。

なんでも山根さん、業界（？）では有名人、らしい。

珠坂大家政学科で飛び級を重ね、前人未踏の成績をおさめ、メ
イド殿堂入りを果たした超逸材だと、自ら言い張っていたものだ、

普段の様子を見ているとともに信じられないし、今まで信じて

いなかったが……これでは信じざるを得ない。

卒業後の山根さんに一体何があつたんだろう。知りたいような、
知りたくないような。

数分後、ユリさんは年嵩のイベントスタッフとともに現れた。

「では、ヨーロさん、自分はここまでで」

「運営の方はあなたに任せたわ。適当にやつといて」

「はつ、はい！ 一命に代えても！ 失礼します！」

スタッフの態度からすると、この『適當』は『適切に上手く』の意味だろう。

しかし、ヨーロ？

「いくつあるんだ、あんたの偽名は。これで全部か？」

アキオさんが呆れた調子で尋ねたが、ユリさんは軽口ではぐらかす。

「まだだ、まだ終わらんよ」

このイベントのスタッフに顔の利くヨーロさんか。

タイムツ、ようこ。

脳内検索中。ヒット45件。

なら。

検索ワード『珠坂財界』追加。ヒット2。

珠坂商工会議所会頭、四三揺子。

そんな顔もあつたんだ……なるほど、それで揺なわけね。

ということは、彼女は伝統面からも經濟面からも珠坂を牛耳る立場にある事になる。こんなもつてまわった方法を使わなくても黒六連をつぶせるぐらいの力はありそうだけど。

「いい疑問ねモエちゃん。敵を殉教させては伝説の聖人として死後までも影響力を持たせてしまうだけ。それを防ぐには、絶頂期のうちに神通力をはぎ取って信徒を幻滅させる事につきるわ」

「ほんの推理よ。間違つてた？」

「いえ。ありがとうございます」

「ほんと、恐ろしい人です。

「で、みなさん準備はいかが?」「もちろんオーケーです」

わたし。

「いつでも」

ミノリさん。

「どこでも」

ナナさん。

「……樂器さえあれば」

サガノさん(ローギア)。

「オーケー。じゃあ行きますか」

このへんは後から鈴菜に聞いた話。

『ではお待ちかねのラスト前! 仮面のガールズバンド『コーカロリィ』! 話題の新星が特別招待枠でタイマツに来てくれたぜ!!』

ずばっ、とスポットライト。

見参、仮面にマントひらめき、ってなもんで。

「おおう! かっけー!」

「ユリさん似合う」

ベン・ベンが言うとおりだ。あの金髪は衣装映えするね。

あの人セクシーダイナマイツだし。くそー。

あれれ? なんでドラムとキーボードが二セットあるんだ? 「これで最後? 後は黒六連だけでしょ。寛彰の兄弟ってのはどうよ」

「いや見る、妙。あれ、四三じゃないか?」

「女性を観察する眼だけは大したものね……ほんと良く化けてる。

経済人としての彼女を知つてれば知つてるほど、あれはわかるないわ」

ヒッキーの両親がそんなことを言つてるが、あたしが驚くところは別にあつた。

「あれ?」

あの長ーいツイテのドラマ、どつかで見たようだ。

すぐには演奏が始まつた。

黒六連のヒット曲『ケラエノ』。

市立図書館に勤める黄色い服の司書との、ちょっと不思議で危険な恋物語を歌つた曲。

うーん、可でもなく不可でもない出来。

絶対おかしい。ノリ姉ちゃんやユリさんが関わつててあんなもののはずないし。

「あれれ?」

リズムの乱れを別にすれば、さんざん聞き覚えのあるドラムの音。

あーっ!!

「おいおい似合いすぎだよふざけんな!」

「なんで? とかおいといで、この私に音聴くまで気づかせぬとわつ。

「……嘘だろ、おい」

「何やつてんのあの子」

さすがにゴッドとその奥さん。私と時を同じくして気づいていたよう。

「ん。違う。ヒッキーじゃない」

ベンベンがいつのまにか仮面を外していた。

つまり、『右目で』見てる。

「身体はヒッキーだけど。中身は違うよ」

「そうなん?」

「そう」私とは別のが見えるベンベンが言うのだから本当なんだろ

うな。

「七瀬さん、それは聞き捨てなりませんな?」

「聞かせていただけるかしら」

ああ、ヒッキーの両親はそりや気になるだろうね。

「いくらなんでも下手すぎる! あれじやまるで別人じやない

か」

「さっきの演奏はどこいつちやつたの?」

……すげえ。さすが音楽家。女装とかどうでもいいんだ。こう

いうところ素直に尊敬する。

わああつ!

大音響とさらなる歓声に会話を中断させられた。

間奏の間にステージに駆け込んできたのは黒ずくめの六人組。

おいおい、ここでラスボス乱入か!

そのまま二題目は合奏モードに。

なるほど、手持ちできない楽器はあらかじめ配置してあつたわけだ。

やるな演出!

本家と合奏というのはファンバンドとしては最高に燃える展開の筈だが、観客に格の違いを思ひ知らせる意味もあるのだろう。

見た目はともかく、今の『コーカロリイ』の演奏は本家黒六連に一段も二段も劣る。多少でも音楽の素養のある人間には一発だ。
ここまで差をつけられては、普通のバンドなら本家に聞き入ってしまうか、恥ずかしさのあまり演奏を止めてしまうかもしねい。

まあ、いろいろ普通じゃないんだけど。

「ん?」

ゴッドが唸った。

ユリさんがマントを打ち振った途端、音の濁りが嘘のように消えた。

同時に演奏する二つのバンドのリズムも和音も完全に一体になっている。

違うのは歌詞だけ。

「さ

忘れないで欲しい 僕じやだめでも 貴女に似合いのヒトに会つても 君の思い出にさえなれば それで満足さ♪

忘れて欲しいよ 僕じやだめだよ 貴女に似合いのヒトがいるから 君の思い出にさえなれない そんな僕だから♪

女性ボーカルが男性ボーカルを上書きしていく。

しまいには男性ボーカルの歌詞まで変性していく。退廃をより強い退廃に。肯定を否定に。

僕は忘れて　君も忘れて　何もかも忘れ　心穏やかに生きていいこう♪

違う世界に　住まう二人の　出会いは破れて　かすんで消え去るだろう♪

そして屈指の高難度で知られる第一間奏のギターソロ。コーカロリィのギターが加速した。

倍近い音数ながら、滑らかさも芸術性も段違い。完全に置いてきぼりにされる黒六連のギター。

既に手拍子は止んでいた。

「あの音、佐倉歌音か!?」

驚いた。アコギとエレキの違いはあるけど、間違いないわね

「録音オソリーギタリストのライブが聞けるとはな。これだけで

も四三に感謝だ」

「ミュージシャンの血が騒がない？　ぜひ共演を申し込みましょ

う」

「決まりだな」

おお、豪華ゲストが解説役と化してきた（笑）

三題目に至った頃には、コーカロリィの圧倒が誰の目にも明らかだった。いつもの調子を取り戻そうとサブギターの髭オヤジが懸命に檄を飛ばしているが、心の折れたバンドには届かなかつたようだ。音が一つ減り、二つ減り、ついにサブギターまで消える。

曲中の物語になぞらえてバンドの印象を残すようになってる歌

詞を、バンドの印象まで洗い落とすような歌詞を作り替えて、それをノリ姉が本気で歌つたのだから。黒六連もファンも含めて

一気に逆洗脳をかけたようなものだ。

コーカロリィが演奏を終えたころには、盛り上がりっていたはずの会場にはしらけムードが漂っていた。

まだ黒六連の演奏が残っているはずなのに、席を立ち始める者も少なくない。

まあ、全員orz状態だし、どうせ演奏は無理。精神的にも社会的にも再起不能だろうね。

しかも、自分たちの印象まで一緒に消し去ったってのは、上手いなあ。

いやー終わった終わった。

残念だけど今回はウケただけで満足しておこうかな。黒六連退治はあっちに花を持たせてあげたということだ。

＊＊＊

やばい。両親がなんか妙な雰囲気になつててる。ちょっと予想外の反応。

親父が今日は休めつて言つてくれて、話し合いが明日に先送りになつたのは幸い。

でも心配不要だ。うまいことやつてみせるから。

寛彰

W8〇月〇日 月

＊＊＊

今日は学校を休んだ。

正確には、無理に休みを取らされた。

またも食堂のテーブルで両親と差し向かい。

「作者急病のため休載します」

そんな台詞がなんとなく口をついた。

「いや、むしろお前を救済したいんだがな」

「だれが上手いこと言えと」

オヤジ殿の脇腹にお袋様の肘鉄が入る。

「こほん。お前、女装してた時の記憶がないだろ」

「女装とか言うなよ。身体を貸してたんだから、記憶がないのは

当たり前だろ」

だからこそ、俺と萌衣は交互にしか表に出られず、山根さんを

介してしか連絡が取れなかつた。

最近はメールという手段を取り入れたが、それでも直接会つて

話すことができないのは変わりない。

「おかしな事になつてゐるという自覚はある?」

「普通でないって自覚はある。でも仕方ないだろ、萌衣はこの世に生まれてこれなかつたんだから。出来るだけのことはしてやりだいじやないか」

「そこだよ」

と親父。

「仮に、兄弟の靈が取り憑いてるという寛彰の主張を認めるとしてだ……楽しい話ではないから詳しく述べなかつたがな」

一度言葉を切り、お袋の方を見る。お袋が頷く。

「……妙がお前の前に流産したのは、男の子だつたんだよ」

「！」

嘘だ。嘘だらう。

そんなバカな！

「山根くんをまじえて『男なら寛彰。女なら萌衣』って話はしたことがあるがな。お前はそれを聞いたんだろう？　だから無意識にその名を名乗つた」

「そんな……」

「こういう業界に身を置いてるとね、こういうのは決して珍しい話じゃないわ」

と、お袋が珍しく柔らかい口調で、慰めるように言う。

「狐憑きとかと同じだ。思いこみによる自己暗示だよ」

「そんな……」

＊＊＊

父さんと母さんが俺を医者に診せると言つてる。

母さんはひとしきり山根さんを責めて、それから謝つた。演奏会やレコードイングばかりでほつたらかしにしたせいで、とか。二人とも、萌衣を妄想か何かだと決めつけて、最初から居なかつたことにしようとしてる。

萌衣が俺自身なんて。そんな事があつてたまるか。

違うつて言つてくれ。

萌衣は萌衣だよな？

直接合いたい。そうすれば、こんなに不安にならなくて済むのに。

寛彰

W8 ○月○日 火

自分が誰であるかは、私には分かりません。

分かるのは、私がここにいるって事だけですから。

私がヒロ君の一部であつたとしても、それでもいいんです。

そうであつても、そうでなくとも、私にとつては何も変わらないから。

大事なのはヒロ君と一緒にだってこと。

でも、ヒロ君がその方が良いのなら、ヒロ君とは別の私であります。

でも、ヒロ君がその方が良いのなら、ヒロ君とは別の私であります。

萌衣

W8 ○月○日 水

＊＊＊

珠大附属病院に連れて行かれた。

いかにも生真面目そうな精神科の先生（名札に教授と書いてあった）と面談。

そのお医者曰く、なんでも多重人格症（ナントカ性同一性障害）を専門に研究してるそうな。

でも、萌衣はそういうのとは違うんだ。絶対に。

「いや、そう警戒しなくていい。君の友達を取り上げようとしてるわけではないからね」

「はあ」

顔に出てたか。

「その萌衣さんは今、表に出でこられるかね？」
 「前もって約束をしておかない限り、勝手に入れ替わることはあります」

「一度話をしてみたいですね。なら、明日は大丈夫？」

「それで納得してもらえるのなら。明日は彼女に出てもらえるよ

うにメールしておきます」

「ほお。人格間でメール連絡ねえ。そりや珍しい」

だからそういうのとは違うんだけどな。

その後しばらく質問に答えた後、一通りの視触診と聴診。

それから頭の体操のようなテストをいくつか。

採血。胸のレントゲンに心電図。

それから頭のCTとMRI検査の予定がたてられた。

「吉沢先生、脳外科の新川先生から外線です」

ナースから電話の子機を受け取った教授は首をひねっていたが、「新川？」もしもし……ああ、ご無沙汰しています！ いえいえ。

順調ですよ。は、胸部側面？ CTとMRI？ 一体何を疑つてるんです？ はあ、ええ、分かりました。調べてみます」「どうかしましたか？」

「いえ、ご子息の状態に関しても、別の専門家からアドバイスがあ

りましてね。検査の範囲を少し広げます」

＊＊＊

今日精神科に連れてかれたよ。全身さんざん調べられた。
 いわゆる多重人格症の一種と思われてるらしい。

それで、萌衣に会つてみないと詳しいことはわからない、って

医者が言うんだ。

俺の妄想なんかじやなくて、萌衣は萌衣だってことを証明してやりたいんだが、明日は出てくれるか？

親父やお袋には会いづらいかもしけないけど、これも萌衣のためだから。

どうかな？

「私もよ」

「いつそのままでいいかもしえんな」

ああ、話がずいぶんと不穏な方向に！？

「だ、ダメですよダメですったら！ そんな事言つたらヒロ君が可哀想です！」

「いや、冗談冗談」

私の剣幕にあわてたから、慌てて手を振る。

「親でも言つてい冗談とだめな冗談があります。間借りさせてもらつてる身でこんな事言つても説得力がありませんけど、なるべくヒロ君の邪魔にならないようになつたいとは思つてますから」「怒つた顔も可愛いわねえ」

「もう何年かすれば妙さん似の美人になりそうだな」

ああ、会話にならない。ヒロ君が両親の相手はきついて言つてた意味がよく分かる。

「だから、私の容姿はどうでもいいんです！」

しばしあつて。

はあ、とため息とともに肩を落とす。

「いや、可愛いわこりや。近くで見ると」

「女顔だ女顔だとは思つてたけど、ウイッグ一つで女の子にしか見えないわね」

「だから中身は女の子なんですって」

と山田さんが助け船を出してくれる。心強い。

「悪いけど、これ以上話をややこしくしないでくれる？」

「はーい」

あ、援軍があつさり撤退した。頼りない。

「俺、本当は女の子が欲しかったんだよな」

一通りの心理検査の後、教授の待つ診察室に。

「ほお、驚いた。本当に昨日の少年かい」

「身体は、ですけど。ヒロ君の言つてた解離性同一性障害がご専門の教授先生ですか？」

「ああ、吉沢だよ。よろしくな、ええと、萌衣さん」

「はい、よろしくお願ひします」

「さて早速だが、君は寛彰くんの事をどう思つてゐるかね？ 忌憚なく聞かせてくれないか。恨んでいるとか取つて代わりたいとか、そういった負の感情でも構わないよ」

「まさか！ そんなこと絶対にありません。ヒロ君はとても大切
な人です」

「なんで一同黙り込むんだろう？」

「三人が三人とも、なんとも言い難い表情を見合わせている。

「こほん。専門家としての現時点での意見を述べさせてもらいま
しょうかね」

教授は威儀を正した。

「最終的な診断名をあげるにはまだ情報が足りませんが……さき
ほどから二言三言話しただけでも、この萌衣さんという交代人格
がきわめて温厚でインテリジェンスも高い事がわかる。主人格で
ある寛彰くんのことも十分配慮しているし、お互の信頼関係
も十分に醸成されていると私は見ますが」

「ええと？」

父さんが首をひねる。

「しかも、身体的な技能や意味記憶の大部分は共有されているよ
うです。どちらかがしつかり学んだことは他人格もある程度利用
できる。つまり交代している時間が無駄になるわけではない」

「つまり何が仰りたいんです？」

「ここで高山ご夫妻に質問したい。現状で何か問題がありますか
ね？」

ぶつちやけたな、この教授。
両親は当然のように絶句。

「もちろん、器質的な原因があつて、それが危険をはらんでいる
ような場合はその限りではありませんがね。いずれにせよ精神的
な治療に意味があるとはあまり思えない。彼女を消し去ったとこ
ろでただ寛彰くんが傷つくだけだ」

「ヒロ君に危険が及ぶようなら……私が消えます。でもヒロ君を
傷つけたくないし、私もヒロ君と一緒にいたい。先生、なんとか
なりませんか？」

「……萌衣ちゃん、あなた」

「まあ慌てなさんな。そっちの結果もそろそろ出来ててるよう
だよ」

教授が電子カルテの画面を一・三回クリックすると、昨日の検
査結果がすらりと並ぶ。

「採血には明らかな異常はないね。脳腫瘍なんかもなさそうだよ。
安心した……ん？」

「何か？」

母さんが身を乗り出す。

「放科が何か引っかけてるな。」

『前綻隔に数センチ大の腫瘤あり。大部分がT1WI/T2WI
とも低信号を示し造影効果にも乏しく、血流に乏しい纖維性の腫
瘤が疑われる。部位と脂質の混在よりteratoma / dermoidも鑑別
に上がるが、胸写側面像・CTで描出されている歯牙様というよ
りむしろ骨格様に連なった石灰化像と辺縁の卵殻状石灰化からも、
いわゆる fetus in fetu の退化萎縮したものを見ている可能性あり。
外科 consult を。なお、病理が出るようならご連絡いただければ
幸いです』

「……こりやまた、珍しいというか何というか。いや驚いた」

教授はまず天を仰ぎ、それから肩をすくめてお手上げのしぐさ。
「ええと、つまりどういう事ですかな？」

不安そうな表情で父さんが問う。

専門用語が多くてほとんどわからないけど、最後の外科うん

ぬんってのがとても不穏。

「大いに関係ありそうなものは見つけたが、科学者の端くれとしては関係ありとは言いたくないのですよ」

「はい？」

「こりや半ばオカルトの領域です。本当の専門家のお出ましを願うしかないようだ」

精神科の教授はいい人でした。問題ないのなら治療はいらないんじやないかって。

ただ……驚かないでくださいね？

検査で私の本体が見つかったんです。

胸の奥に半ばミイラ化した胎児のようなものが見えるそうですよ。

とても珍しいけど、双子がもう一人の身体に取り込まれてしま

う事があるって。

でも医学的には生きてるはずも意思があるはずもないっていうんです。

また別の専門家を紹介されました。明日尋ねてくるそうなので、ヒロ君お願いしますね。

萌衣

W8〇月〇日 金

「吉沢教授の紹介で来たわ」

ファッショングラスにボブカットのものすごく偉そうなお姉さんは、玄関先で仁王立ちして宣言した。

「ああ、いらっしゃいさおりさん。この間のライブ、凄かつたですよ」

山根さんが嬉しそうに迎えに出る。

「山根さん、知り合い？」

「知り合い？ とはご挨拶ね、ヒロ君はともかくモエちゃんの記憶には私の情報がある筈よ」

馴れ馴れしく呼ばれ、戸惑いや怒りより悪寒を感じる。

「モエちゃんに会ったのは、『搖』が出てる状態だけね」

ユリ？

萌衣の認識している彼女の容姿とは全然違う。目の色も髪の色も違うし、黒一色のパンツルックという服装もユリさんとは異なる趣味だ。

「じゃあ、あなたがユリさんの正体、ハートの女王って人か」

「正解。珠坂商工会議所会頭、四三搖子って顔もあるけど。今日は本職で来たから、斗流十家宗家代理、新川さおりと名乗つておくわ」

斗流の宗家え！？

そんなお人を自宅にまで呼びつけたなんて、叔父さんが聞いたら卒倒するな。

彼女はすかずかと居間にまで入り込むと、勧められる前に上座に回り、椅子の背に浅く腰掛けた。

「お久しぶり、高天夫妻。^{デウス・エキス・マキナ}機械神の役を果たしに来たわよ」

「四三さん……息子のこと、何かご存じなんですか」

さすがの親父もこの人相手じや引くよな。

「半ばは推理でしかないけどね。お二人の息子さん達にはかなり世話になつたし、ここで借りを返しておくから」

達」と言つた。俺と萌衣を別の人物として認めているという意味だ。

「知人に魂いじくりまわす専門家がいるんだけど。彼女の理論に従えば、ヒロ君とモエちゃんにそれぞれ別の魂が関わっているのに疑惑の予知はないわ。教授が相手にしているような通常の多重人格は脳レベルでの別回路だけど、さらに一つ上の段階、脳に量子干渉して判断を偏らせる上級回路が二系統ある状態ね」

「たとえば私は搖光^{アーヴィング}の鬼である搖^{カイ}を呼び込んで仮想的な二連精魂^{デュアルコア}を形成しているけど、いわば優先権のある合議制のような状態といえるわ。『コーラリィ』をやつてるときのように判断の99%までを彼女に任せてしまう事はあっても、二つの衝動の存在を自覚しているし、互いに影響も与え合うわけ」

今、さらっととんでもない事言わなかつたか？ この人。

「従姉妹の詩紀^{シのり}と美紀^{みのり}は天然物の二重精魂だけど、状況からのフレードバックでロードバランスが極端に偏りはしても、やはり常に両方が活動しているようね」

「でもヒロ君とモエちゃんの場合はちょっと違う。常に魂の一方のみが脳に干渉していて、活動する精魂が完全に切り替わつていると推測されるわ。いわば交代二連精魂とでも言うべきかしら」

「とはいっても、干渉を受け続けた脳内にも、互いが別々に使つ回路と共に使つて使う回路ができてしまつてゐるでしょうし、一方

の理想が他方を変化させるような形で間接的に影響を与えて可能な性もあるわ。自己想像のシステムを利用した理想の異性像の鍛成とでも言えればいいのかしらね。自分で演じたり否定したりせずとも、それをやつてくれる相手を内に抱えてるわけ」

何この長台詞。

さっぱりわからん。

「何が言いたいんだ？ って顔してるわね。簡単に言うと、二人は基本的には独立した存在だけど、身体は同じだから脳内でお互いの趣味が筒抜けなのよ。なら、無意識に相手の理想のタイプが分かつちやうし、自然にそなろうと努力しちゃうんじゃないかなこと。ぶっちゃけ、ヒロ君、モエちゃんに惚れてるでしょ？」

「うぐっ！」

「安心なさい。誰が見ても両思いだから」

両親も山根さんも何度も頷く。

「恥ずかしくなるぐらいアツアツだよな」

「新婚時代を思い出すわ」

あんたら今でもアツアツだらうが。回りが引きまくるぐらい。「でもちょっと禁断の関係っぽいですよね。姉弟なのに」

山根さん、またいらん事を。

「法的にも学問的にも無問題よ。モエちゃんは法的にはないし、身体は一つなんだから遺伝的問題も起こりようがないでしょ」

このお姉さん、デリカシー無いなあ。珠坂旧家の連中つてこんなばつか。

「一つ疑問があるわ」

お袋が挙手した。

「寛彰の中には亡くなつた胎児の身体が残つてゐるって話だけど、どうして気づいたのかしら？」

「七瀬のベンパンが、右目で見るとヒロ君の胸の真ん中に何かあるって言うからね。試しに撮つてもらつたらビンゴだったのよ」

「前々から普通じゃないとは思つてたが。レントゲンかよ、あいつは。

「でもそれが萌衣ちゃんとは考えにくくない？ 二卵性の胎児が

お互ひを取り込むなんて事があるの？ 男の寛彰に取り込まれた

なら、もう一人も男だつて考える方が自然でしよう？」

「妙さんの疑問ももつともね。まあ、母親は自分と違う遺伝子の子供を宿せるわけだから、二卵性の取り込みが絶対に起らしないとは言えないでしようけど、それが萌衣ちゃんであるかないかと胎児の性別は関係ないと思うわ」

「ふむ。そのココロは？」

「萌衣ちゃんはその筋では有名な魂でね。もともと女性属性なの

よ」

「なるほど。オカルトってやつはほんと身も蓋もないな

親父の意見に激しく賛成。

「くっ。こうなると分かつてたら……星司と夕子か、愛と善にしねおけばよかつた」

「……ここまでくると賛成できないな。

「愛と言えば誠じやないの？」

「お袋、あんたもか！」

「どちらも素敵なご意見だけど、寛彰と萌衣はもつともつと古い、大陸のカップルに由来する名前だと思ってたわ」

「それが誰と誰なのかはついに教えてもらえなかつたが、

「ああそれから、最後にヒロ君に言つておかないとね」

さおりさんは、いかにも微笑ましそうな笑顔で言ったものだ。

「一番大切な人と中途半端に近付きすぎて結ばれる可能性を失いかけた彼女は、みずから君に取り込まれることを望み、そして絶対引き離されない立場を手に入れた、ってのはどうかしら。わりと燃える設定じやない？ それこそ出来過ぎなぐらい」

「……」

「どこかの探偵が言うように眞実は常に一つなのか。それに足るだけの観察者による認識が幻想に過去を与え眞実となしたのか。時の流れの中にある限り私たちにはそれを知るべくもないけど、同時にそれを区別する意味もないのよ。ま、自信を持つことね」

さおりさんの残した言葉は、彼女なりの激励ではあつたんだろうけど……どうにも据わりが悪い余韻を帶びていた。

ここらへん、萌衣には話さないでおこう。

＊＊＊

喜べ萌衣。

ユリさんのおかげで一件落着だ。

もうあんまり会いたくないけどな。あの人怖すぎる。

ああ、まだ週末に打ち上げがあるんだっけ？ そつちは任せせるわ。

寛彰

＊＊＊

アニメショップ地下のスタジオに両バンドのメンツ+αが集合。立食形式の打ち上げパーティーと相成った。

「本日現在この場をもって、『ヨーカロリィ』を解散します」

惜しいと言えば惜しいなあ。

でも、あくまでも黒六連を撃破するためのドリームチームだから。いつまでも引っ張るのは良くないだろうし。

「そういえば、黒六連、どうなつちやつたんですか?」

自分たちのことでバタバタしていて失念していたが、あとの收拾が大変だったでしよう。

「即日解散を決めたよ。まあ、彼らの腕なら幾らでも食っていく

クチはあるだろうけど。もう、あんな強烈な影響を振りまくことはないだろうな。ミッション成功だよ。ありがとう、モエちゃん

とアキオさん（もう篤史さんでいいか）。

「……ちなみに調兄いは無事実家に連れ戻された。しつかりお仕置きもした。だからいつでも合奏できるのです」

サガノさん、もとい福音さんが気が抜けたまま淡々と語る。

天才って怖いです。

「け、結局、黒六連って何だつたんでしょうね？　あんな急に現れた凄腕集団って、人為的を通り越して異常なものを感じません？」

解説屋ユリさんがすぐに反応する。

この人がいれば辞書いらずでニュースいらず。

説明がちと中途半端なのと物騒なのが玉に瑕だけど。

「あれはとある術でもって未来の可能性を限界まで引き出された者達。まあ秀才の前借りのようなものね」

ミノリさん（詩紀さんだっけ）の歌の例もあるし、そういう魔法のような力がこの世界には沢山あるんだろう。疑問に思つても仕方ない。あるものはあるのだから。

「それでもまだまだ伸び代のある天才に敵わなかつたわけだし。一生精進を続けて立つた境地があの程度だったとも言えるけど」

うわ辛辣。

「詳しくは言わないけど、彼らはいずれもそれなりの音楽一家の御曹司だつたのよ。過剰な期待とそそそこの才能。本物の天才との出会いと挫折。そしてそれに付け込んだ偽りの協力者がいたつてこと」

うーん、他人事に聞こえない。精進しよう。

「結論。無能は罪じゃないけど、根拠のないプライドは重罪よね」

それが罪なら貴女以外はみんな刑務所いきます。

はあ。

肩越しにツーテールの双子の姿が見える。

「あ、すみません。ちょっと失礼します」

「ん、ヒロ君の分までしつかり楽しんでいきなさい」

「初めまして。鈴菜さんと鈴菜さんですね？」

「そういうオヌシはモエタニア～ン！」

「ふふ、何ですかそれ？」

ヒロ君の言うとおりだ。鈴菜さんってよく分からない。

「高天寛彰には世話になつたわ。今やマヅダチと言つてもいい」

「ココロノトモやね」

「はい。ヒロ君と仲良くしてくれてありがとうございます」

「撫菜さんも面白いな。ほんとよく分からないけど。

『そういえば、『りんべんバンド』の方は解散しないんですか?』

『コーカロリィ』と結成目的は同じだったはずだし。

「たった今、貴女がメンバー登録されたところで」

あれ?

「でも私一人の身体じゃないので、勝手なことは……」

「ヒッキーを逃がしたつもりはないよん。ヒッキーと一心同体な

ら、モエっちは自動的にうちのチーム員だ!」

「そしてもちろんマブダチ認定。よろしく高天萌衣」

「よろしく……おねがいします……うつ、くつ、くつ」

「あ! ああ!? 泣かせた! 泣かせたっ! ペンペン極悪!

人非人!」

「ちがう。リンリンが強引だからだと思う。私何もしてない。私

知らないから」

「こら、逃げるなベンベン! アタシ置いてくな!」

「くつ、くつ、くくく、ふふ、ふふふ、あは、あはははははは!」

「あれ?」

両親が出来ました。

同じ歳の友達が出来ました。

何もかもあなたのおかげです。

今こうしてこの世に存在していられるのも、きっと、あなたが

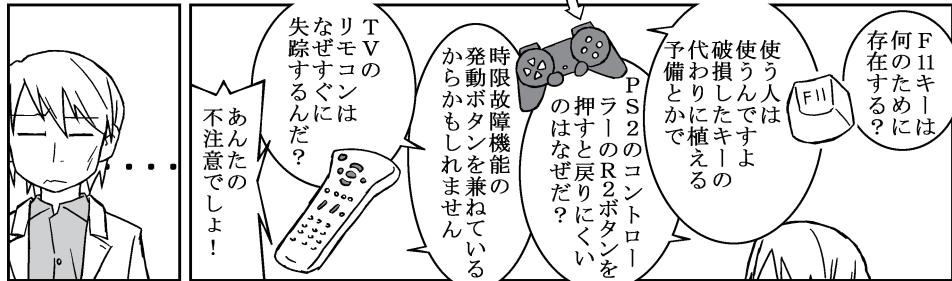
私を見つけてくれたから。

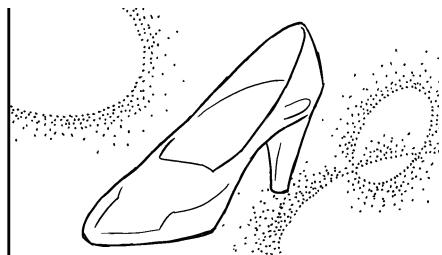
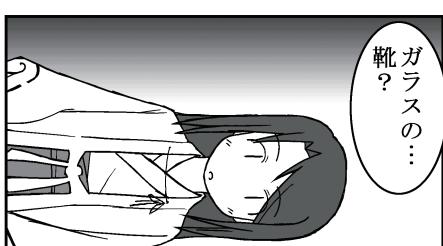
ありがとうございます、大好きです、ヒロ君。

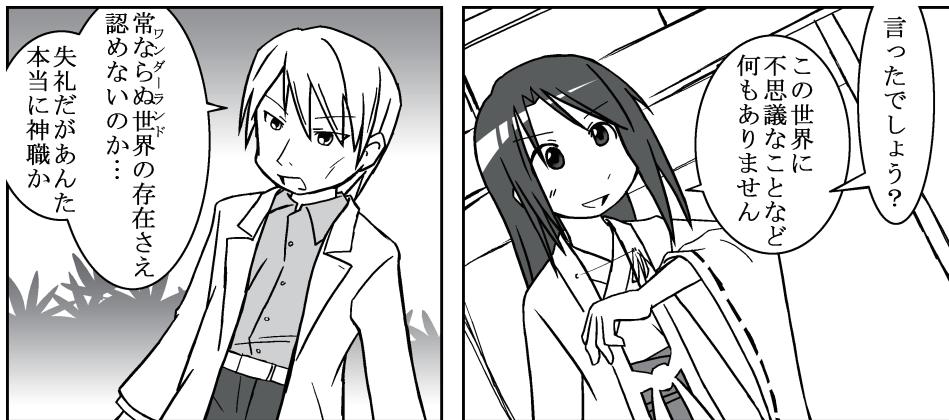
萌衣











決意の魔法　こんメイ！ 2

Fukapon

——ひどい……

その場で冷静なのはたった二人、写真を出した養護教諭と、次の瞬間を推し量つた彼女だけ。彼女に至つては、全く異なつた感想さえ抱いていた。

学年主任に呼ばれて保健室に入ると、異様な光景が広がつた。

(妙な緊張感だよお。それに、女の先生ばつか……?)

授業を終えた十二名の女性教員が、ずらりと会していた。

機微に聴い彼女でなくとも、その場の誰もが普通でない雰囲気

に気付いていただろう。よつて余計に、不穏がその場を支配する。

「これから、ある写真をご覧に入れます」

白衣を纏つた養護教諭の言葉で、僅かにあつた話しが潜めた。

しかし次の科白とともに逆戻り。

「ただし、写真を見ても声を上げないでください。おそらく驚く

でしょうが、絶対に、声を上げないでください。また、他言無用

です」

その注意が意図するところは誰にも理解できず、いくつかの小さな会話が再び起きていた。

彼女も不思議がりはしたが、仕事中らしくと言える冷たさで思

考を巡らせた。

(普段とはまるで正反対の、もつたいぶつた話し方。集められたのは女性、さらに割と年配の先生ばかり。性犯罪の臭いがぶんぶんする……)

然もありなんと突飛な結論を出した直後、目の前に一枚の写真が置かれた。

——えつ……
——嘘でしょ

故にこの部屋において、彼女は異質な存在に見えたのだろう。
(かさま) 風間先生は、驚かないんですか……?」

「はい。予想していましたから」

養護教諭は彼女の答えに満足して、少し面持ちを崩しながら問うた。

「やはり素晴らしい洞察力ですね。だからこそ、この写真から何かわからぬいかと見えてもらつたのですが……」

目の前には、如何にも「事後」と言つた状態の女子生徒が写っていた。

「あまり多くのことは言えません。ただ、この写真はとてもうまく撮られていますね。背景は旧校舎の壁面に見えますが、具体的にどこかはわかりません」

彼女の言葉に全員が写真を再び見つめて、なるほどと唸つている。

「肝心なのは、これが何の行為を撮つたものかと言うことですが
(レイプ、よね……)」

続いた推測説明を突如小声が乗つ取る。あつという間に波紋は広がつた。

「まさか……」「この学校でそんなことが……」

あまりに浅はかな反応に彼女は溜息をつきそうにもなつたが、何とかこらえて声を通した。

「いえ、そう判断するのは早計でしょう。一番気になるのは彼女の服の状態。あまりに綺麗にはだけています。ブレザー、ブラウスとリボン、ブラジャーを身体に残したまま、身体の前側は全て肌を出しています」

ここまで話せば少しはわかるだろうと彼女は周りを見回したが、全員の頭の上に疑問符が浮かんでいるようだ。

これでよく先生が務まるものだと落胆しながら、彼女は仕方なしに続ける。

「校内、ましてや人目にさらされる屋外で強姦を犯すリスクが極めて高いのは、おわかりですよね？」

たまたま目のあつた教員に同意を求めるとき、こくんと頷きが戻ってきた。

彼女は続いて隣の教員に視線を移し、もう一つ質問をした。

「では、なぜそうお考えですか？」

すると、多少の間を持つて答えが返つてくる。

「…………：誰かに見つかる可能性があるからでは」

「おっしゃる通りです。そして、行為に時間をかけなければかけるほど、見つかる確率は高まる。そんな中、ブレザーのボタンを外し、リボンを解き、ブラウスのボタンをいくつも外して、さらにはブラジャーのホックまで外して、胸をはだけるのでしょうか。やはり写真はよく撮れていて、少なくともボタンに破損のないことがわかります」

説明を一時停止すると、再び周りがざわめいた。

——じゃあ何だつて言うの？

——いたずらでしようか

——確かに、その可能性も……

「強姦の可能性も否定はしません。しかし、いたずらの可能性や、カップルが合意の上で撮った可能性も否定はできません」

しかし彼女の他に納得しているのは、養護教諭ただ一人のようだ。

そのことは誰の目にも明らか。故に、養護教諭はこう加えた。「風間先生に説明していただいた通り、あらゆる可能性が考えられると思います。文化祭が控えており、校内での事故も増えます。この写真の件も兼ねて、しっかり見守っていきましょう。なお、本件はくれぐれも他言せぬよう」

そして解散となると、集まつた教員たちはざわつきながらも、保健室を出て行くときにはさすがに口を開じていた。

程なくして、部屋には二名だけが残つた。

保健室の主たる養護教諭と、淡々と説明をこなした彼女、風間紬だ。

「風間先生、ありがとうございました。仕事のときは本当に別人ですよね」

「そんなことは……。あの、もう一度、写真を見たいのですぐ……」

「どうぞ。何かわかつたことがあつたら、教えてください」

紬は写真を受け取り、今一度凝視した。

(何か、おかしいような……)

「遅れてごめーん」

紬が被服室の扉を開くと、案の定、一人の少女が出迎えてくれた。

「お忙しいところ済みません。私も今さつき来たところですから」

矢崎香苗、彼女は丁寧に受け答えをしながら、大きな机の上にメジャーやら物差しやらを用意している。

「あ、今日は採寸しますので、部屋の鍵をかけていただけませんか」

「はーい。ま、紬は見られてもへっちゃらだけど」

紬はキラキラの笑顔を香苗に返しながら、入ってきた扉にロツクをかける。

「ダメですよ。先生は可愛いんですから、自覚してください」「んー?」

「……どうしたんですか?」

首を傾げながら向かってくる紬に香苗が問うと、やはり素直に紬は答える。

「ご主人様にも『可愛い』って言われたんだけど、紬、ホントに可愛いのかなあ?」

それがどんな意味を持つかも考えないあたりは、さすが彼女と言つたところだ。

一方の香苗はそう鈍感なわけもない。手に持つていたメジャーを握りしめて、目を見開いている。

「あ、あの、ご主人様、つて……」

「あつ。あー、えーと、そのー、ま、気にしないで。ほら、サイズ測ろーよー」

明らかにごまかしにかかっている紬に、彼女も気付かぬわけが

ない。

しかし彼女は机上のノートを開きながら神妙に言う。

「誰にでも、秘密はありますよね……」「えっ?」

今度は紬の方が意表を突かれたが、香苗は状況を水に流すかのように行動を続けた。ノートの上に記された昨年の測定結果の横に、付け足すように綺麗な罫線を引く。

紬は子どもっぽさの抜けた眼で一瞥するも、彼女の一言で引き戻された。

「じゃあ、服を脱いでいただけますか」

「はーい。脱ぐよー」

ウエスト左に手をかけると、いとも簡単にホックを外し、ファスナーを下ろすと。

——ストン

まさにそんな音が聞こえそうなほど、スカイブルーのタイトスカートはあつさりと脱げた。お子様体型ならではである。

淀みなくブラウスのボタンに手をかけたのを見て、香苗が立ち上がるのもお馴染みの光景だった。

「それ、たたみますから」

相変わらず脱ぎっぱなしの紬に代わって、彼女はスカートをたたむと、丁寧に机上に置いた。

「ありがとーと、はい、ブラウスも脱いだよー」

続いて手渡されたブラウスをまたもや彼女がたたみ、折り目正しくスカートの上に重ねる。

(先生が選んでいるのでしょうか? 水色に白、明るい先生にぴったりの素敵な配色です)

お子様だと評され、ファッショニなど当然頓着していない紬。

しかし夏休み前から、ちょっとした変化が出ていることに香苗は気付いていた。服飾部部長の名は伊達ではない。

(前は白いブラウスと黒のスースだけでしたよね。……「ご主人様」と関係あるのでしょうか)

紬のことだから繰り返し聞けばあつさり答えるだろう、しかし彼女は聞くことなく、こともなげに再びメジヤーを手にした。

「身長は変わつていませんか？去年は145でしたけど――」

「うん、変わつてないよー。もうこの歳じや伸びないもん……」

「いいじゃないですか、可愛くって。私、今年もまた伸びつい

に170に……」

お互ひ、苦労するよね……と目を合わせて笑うと、示し合わせたように紬が両腕を上げた。

「じゃあ、胸囲から測りますね。……先生、相変わらずキヤミソ

ール着ないんですね」

「主任にも言われたけど、暑いんだもん。だから冬は着てるよ？」

(来年あたり、「ご主人様」に言われて着てるのかも知れませんね……)

こうやつてよしなしごとを話したり思つたりしながら、紬の採寸は順調に終わつた。

「凄いですね、先生。去年と全然変わつていません」

「ぶー。紬の成長期はどこに行つちやつたんだよお」

紬は微妙な心境とともに服を着直していると、ふと、目についた。

「香苗ちゃんつて、スタイルいいよね？」

「え……？」

「紬はつか測られるのつて、おかしいよね？」

「いえ、そんなことは……」

「はい。脱いで」

「えつ？」

「脱・い・で！」

ずいっと迫つてくる要求に仰け反り、逃げようにも逃げられない。なぜならば。

「脱いでくれないなら脱がせちゃうもんねー」

紬はすでに、香苗の襟元を飾るリボンを外し、ブラウスの第一ボタンに手をかけていたからだ。

「わかりました……。自分で脱ぎますから」

結局紬に降伏して、彼女はテキパキと服を脱いだ。

スカート、ブラウス、キヤミソールと、脱いではたたむ様がとても美しい。

「はわあ、香苗ちゃんカッコいいー」

「変な褒め方しないでください……」

「だってだって、大人の女！つて感じだよお」

目を輝かせて感心する紬に、香苗は小さく、頬を染めた。

しかし、そんな喜びにつけいるのは、お子様先生の得意とするところだつた。

「ねえねえ、胸も見せてよ。すつこい綺麗な身体なんだもんつ」

「そ、それはちょっと……」

「いいよね？ね？うん、いいよねー」

狼狽する香苗とは対照的に、紬はきやつきやと大はしゃぎ。勢いよく背中に回つて、ブラジャーを外そうとする。と。

「あれれ？どうやつて外すの？」

そこには見慣れたホックが存在せず、彼女が小首を傾げている。

「これ、前で着け外しするんです」

「ふえ？」

「これ、前で着け外しするんです」

「ひよいっと再び胸元に現れた紬に、香苗はパチンと外して見せた。

「うあー、これ便利だねー。ホックしたあとくるつて回さなくていいもんねつ！」

「そ、そろですけど、その着け方はあんまり……」

紬は身振り手振りを付けて己のブラジャー装着法を説明している。

香苗は苦笑いしながら、約束通り、肩紐を外さんとしていた。

——ガラガラツ……

そのとき、予期せぬ事態が発生。

「——つ！」

香苗は硬直した。

「失礼しまーす。紬、帰る——つ！」

突如入ってきた男子生徒も驚きで立ち尽くしている。

「あー、ご主人様つ。待つてたよー」

紬だけは相変わらず、満面の笑みを振りまいていた。

「本当にごめんなさいっ！」

「いえ、もう結構ですから……。後ろの扉を忘れていた私も悪いので」

深々と頭を下げる松田光太に、香苗はいよいよ恐縮した風である。一方便乗して強気なのは紬だ。

「ご主人様つてば本当に節操なしだよね。女の子なら誰でもいい

んでしょ？」

「申し訳ない……」

紬には反論したいところだったが、香苗がいる手前、彼はひたすらに頭を下げていた。

どうしたら頭を上げてもらえるのだろうと香苗が思いを巡らすと、すっかり忘れていた不自然な言葉が心を過ぎつた。

「では、一つ教えてくださいませんか」

「はい、もう、何でも」

「風間先生が松田くんのことを『ご主人様』って呼んでいるのはなぜですか？」

「えっ？」

突然の質問に鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている彼は、今更気付いたらしい。

「……あー、なんてこつた。学校ではご主人様やめろつて言つただろ！」

一気に顔を上げてキッと睨むと、紬の方も負けじと応戦だ。

「なによう。自分だつて紬のこと『紬』つて呼んでるくせにつ。学校では『風間先生』つて約束したでしょ！」

「うつ、確かに……」

勝負は引き分けに終わつたようで、両者あつという間に意氣消沈。首をうなだれ正在するところに、香苗は意外と容赦なく、質問を再び投げかけた。

『『ご主人様』と『紬』の関係、教えてくれますよね……？』
『はやごまかすことでもきまい。』

（話しますよ？）

光太は念のために紬にアイコンタクトを取つた上で、簡潔に説

明した。

数ヶ月前から松田家にて紬と同居していること。間違つても同

棲ではないと加えて。

同居中、紬は光太のメイドとなつたこと。しかし家事やら世話

やらは光太がやつていると加えて。

紬だけでなくもう一人、同級生の恋人も同居していること。に

ついてはさすがに省略。

要点に限つた説明故突拍子もないものだつたが、香苗は存外あ

つさりと理解を示した。

「なんか、おもしろそうですね……。風間先生の家事がさっぱり

というの、わかる気がします」

その上、実情に相槌を打つほどだつた。

「えーっ、紬そんなにひどくないもんっ」

「ま、まあ、お手伝いはしてくれそうですね？」

「そりなんですよ、手伝わなくていいのに」

「ひどいっ、ひどいよっ！ ご主人様が冷たいよう」

ひとしきり松田家事情で盛り上がり、外はすっかり暗くなつ

ている。

だいぶ遅くなつてしまつたことに気付いた香苗が立ち上がり、

今日はお開きとなつた。

「じやあ紬は鞠取つてくる。ここで待つてー」

「はいはい。早く取つてこい」

紬は職員室へと戻り、残された二人は何とはなしに会話を続け

ていた。

「またメイドさんを迎えていらしてくださいね」

「次は気を付けます……。それと今年も、まあ俺は去年を知らな

いんですけど、紬をよろしくお願ひいたします」

「ふふっ、なんか松田くんが保護者みたいですね」

そう言つて笑う香苗を見て、光太は思つたことをつい口にした。

「ミスコンに出るなら先輩の方がいいのでは。綺麗ですし、その、

スタイルも……」

「——っ。あ、ありがとう。でも、私なんか無理です。顔はひど

いし、大きくて可愛くないし。さ、そろそろ先生も来るでしょう

から、行きましょう？」

褒められたことが意外な風に、けれども照れている風ではなく。彼女はトントンと歩き出す。光太は少し不自然に感じたが、そのことを話す時間はなかつた。

やがて現れた紬と合流して帰途につくも、香苗は学校を出てすぐ二人と逆方向に別れた。

「ご主人様つたら、やあらしー」

「な、なにがだよ」

「香苗ちゃんと帰れなくて残念とか思つてるんでしょ？」

「まあ、紬と帰るよりは断然先輩と帰りたいよな」

「あーっ、それひどいっ。確かにさ、紬の身体はペったんこだけ

どさ」

ぶいつとそっぽを向いた紬に、光太が少々困つたふりをするのもお馴染みだ。

「いや、別にそんなことは……」

「香苗ちゃんの身体は綺麗だもんね」

「いや、だから……」

ありふれた、とりとめもない会話だったが、紬がふと、パンと

両手を合わせながら言つた。

「あ、そうだ。ご主人様は『前で着け外しするブラジャ』って知ってる?」

「何だよ突然」

彼の言う通りまさに突然の問い合わせたが、語気の変化に気付くと彼は淀みなく続けた。

「知ってるよ。フロントホックだろ? 姉さんも持ってるよ」「そうなんだ……。香苗ちゃんもそうだったんだけど、みんな使つてるのかな?」

「さあ? 俺は女じやないしな。紬は……ないな」

「うん、紬は持つてないよ。フロントホックつて言うの? 今日初めて知ったもん」

(なんでそんなこと聞くんだよ?)

続いて光太は聞きたくもなったが、今はやめておいた。

紬には時折、今みたいな「突然」がある。そして突然の理由を聞くと答えに困ることを、彼は経験していた。

だから彼は、代わりに言つた。

「母さんも響子も持つてないみたいだから、珍しいのかも知れないな」

「……そつか」

返ってきたのは最近やつと見慣れた、不思議な紬の反応だった。

§

「ご主人様のバカーつ、なんで起こしてくれないのーつ」

翌日の朝、と言うより正午をとうに回った頃、紬は文句を撒き散らしながら家を出た。

「なによなによ、日直の仕事と紬と、どっちが大事なの?」

大急ぎで出てきたので、いつも薄めの化粧は当然省略。光太も、

光太の姉である幸子もいなかつたため、髪のセットも省略だ。

「メイドを大切にしないなんて許せないんだからつ。愛が足りないーつ」

彼女の子供っぽさは容姿だけでなく、身体能力にも備わっていないらしい。学校までの通勤路、歩いて約三十分を、息を切らしながらも走りきつた。

「はあはあはあ、午後の授業には間に合う……」

そして学校の目の前で運動をランからウォーキングに切り替えると、ものの数十秒で息を整えてしまう。そして思考もバツチリいつも通り。

「午後イチはご主人様のところだもん。紬が如何に愛すべき存在か、手取り足取り教えちゃうんだからつ」

忘れてきた腕時計の代わりに携帯電話を見ると、時刻は十三時二十分、あと十分で授業が始まる。普通なら、普通ならばまず遅刻しないことはさておき、慌てて再度走り出すシーンだろう。しかし紬はひと味違う。

「ふつふつふつ、こんなこともあろうかと抜け道を見つけてあるのです」

校門とは逆方向に道を折れると、草木に隠れかけているフェンスの隙間を抜けた。

「よいしょと。ふう、ちつちやいことも悪いことばかりじやないねつ」

するりと校内に入り込んだ彼女は、人が通らないような場所を突き進み、次の受け持ちクラスまでの最適ルートを早足で歩いた。

「ここはプールの女子更衣室が覗けるんだよねー」

「ちょっと遠回りだけど、人目につかないように右」

「あとは旧校舎沿いに。迷い尽くした紺に死角はないのです！」

小走りに進みながら紺は計算した。

（チャイムが鳴るまでにはあと五分くらいかな。ジュース買いに行つても楽勝つ！）

結果、ルートを若干変更して、次の角を左に曲がった。

「——つ！」

刹那、予期せぬ、しかし見覚えのある絵が視界に現れた。

「……風間、先生」

「香苗ちゃん……」

彼女は制服をはだけたまま、崩れたように校舎の壁に寄りかかっていた。その姿を見た瞬間、彼女の仮説が繋がった。

「ごめん、気付くの、遅かった……」

「……どうして先生は、気付いたんですか？」

紺にしてみれば悲劇を回避できなかつたことが悔やまれた。しかし香苗の方はどうも、紺が気付いたことを単純に不思議がつているようだつた。

紺はふつと、香苗の隣に座つた。

「フロントホックつて言うんだつてね」

突然の言葉にも、香苗は難なく受け答えた。

「はい。昨日のブラですよね？……今日は見ての通り、普通のですけど」

今日の彼女のブラジャーは色こそありがちな淡いピンク色だつたが、レースで作り込まれた装飾を見るに、おそらくは高価なもの。

のだろう。光太の姉のおかげで、紺には何となく、推測ができた。

「実は、昨日ね……」

チャイムが鳴り響く中、紺は、保健室での出来事を話した。帰り道、フロントホックについて光太に聞いたことも。

その間に服を整えた香苗は、ぱつりと言つた。

「先生ともつと早く、仲良くなれたらよかつたのかな」

「えつ？」

今回のことといつたい何の関係があるのか、紺は解せぬと表情を返す。

香苗は視線を合わさず、虚空を見つめて続けた。

「私、自分の顔が結構コンプレックスで。誰も可愛いなんて言ってくれませんでしたし、デートさえ断られると『あーやっぱりね』つて」

紺の携帯電話が小さく振動する音を立てたのに気付いて、彼女は話をやめる。

「出なくて、いいんですか？」

「うん。私の電話なんて、大した用件じゃないから」

お子様。そう形容される紺は、こんなときも天真爛漫だ。

しばらくして鞄の中からの音が止むと、香苗は続けた。

「そんなときに綺麗だよって言われたら、案外揺れちゃうんですね。男の人と言われたのは初めてで、びっくりしました。……本当はセックスしたいだけなんだろうなつて気付いたんですけどね、綺麗だよ、好きだよって言われたかったんでしうね」

すつと立つた彼女は、紺から見て、確かに綺麗な女性だつた。

だから、彼女は素直に言つた。

「いいこと思いついちゃつた！写真で見たときも思ったの。香

苗ちゃん、凄く綺麗。だからさ――」

§

曲げそうだつた。

「うー、ご主人様のいじわるう。紬も準ミスなんだぞー。褒めてよお」

文化祭の最後を飾つたのは、今年で四回目を数えるミスコン。

それなりに好評を博しており、今回も盛況に終わつた。

今は後夜祭と併行して、参加者による打ち上げが行われている。

そんな中、光太が祝いの言葉で迎えたのは、服飾部としてエント

リーラした香苗・紬ペアだ。

「準ミス、おめでとうございます」

「ありがとうございます。でも、うちのミスコンは別に『ミス』を選んでいるわけじゃありませんから」

香苗の言う通り、それなりに批判のあるミスコンテスト。高校

において成立しているには理由があつた。

【コスプレコンテストとファッショショーンの間の子みたいなものなんですね。俺は初めてだつたんで、見るまではなぜ紬が出るのかと……】

「あれあれ？ 紬が大人気で妬いてるのかなあ？ ふふーん、でも大丈夫、紬のご主人様は――」

「紬の衣装と、『ミス』としての香苗先輩と、ダブル受賞ですね」

「ありがとうございます、でも、もうそれ以上は……。恥ずかしくて……」

そこかしこで「おめでとう」と言われている香苗は、あからさまに照れている。日頃は落ち着いた立ち居振る舞いの彼女だけに、余計に目立つのだろう。

一方、さっぱり気にかけてもらえていない紬は、早くもへそを

それでもまだ無視し続けようとする光太に小さく笑いをこぼしながら、身を屈めた香苗が紬にお礼を言つてゐる。

「風間先生、ありがとうございます。今、私が笑顔でいられるのは――」

「お話の途中済みません。準ミス、おめでとうございます。取材、いいですか？」

二人の話の途中で割り込んできたのは、新聞部の二人組だ。

早速構えられたカメラは完全に香苗を向いていたことに気付いて、また紬が不服を言い出さないかと香苗は心配したが。それは杞憂というものである。

「先輩、大丈夫ですよ。ほら」

光太が視線で示した通り、紬は一人、取材に乗り気だ。

「んー、取材？ 仕方ないなあ。少しくらいなら答えてあげるよ？」

これには新聞部も苦笑いしながら、香苗と光太に目配せした。

「それじゃあまずは、ペアで写真をいただけますか」

カメラマンが何枚か写真を撮ると、無難な質問がいくつかなされた。

服飾部ペアにおいて取材対応はもちろん、紬の担当である。取材する側としては数少ない純然たる「ミス」であつた香苗のコメントと写真が欲しいことが見え見えだったが、そんなことを気にする紬ではない。

数分間、紬節を聞かされ、仕方ないかと彼らが取材を終えよう

としたとき。カメラマンは小さな声で言った。

「あんな姿じゃなくて、笑顔を撮りたかった。だから今日は、僕も嬉しいです。おめでとうございます」

「あなた――」

彼の言葉と同時に紺は眼光を宿し、腕を伸ばす。

「先生――」

しかしその腕は、香苗によつて抑えられた。

「先生、いいんです。彼のおかげ、ですから……」

文化祭から一週間後、校内にあるニュースが駆け巡つた。

――男性教諭、逮捕

容疑は言うまでもなく、香苗に対する行為によるものだ。

「校内新聞、見ていただけました？」

「ここ被服室でも、今日は逮捕のニュースで持ちきりだ。

「うん。早かつたね。警察に届けたのつて一昨日でしよう？」

「彼の写真のおかげです」

逮捕の情報を得るやいなや、彼を擁する新聞部は写真入りの号外を配つた。おかげで今や、誰が捕まつたかまで含めて校内は大賑わい。職員室は今朝から緊急事態で、こんなところでのほほんとしているのは紺ぐらいのものだつた。

「でも思い切つたよねえ。新聞の写真、香苗ちゃんが写つてるのもあるんだもん」

「顔は写つてませんから。あの印刷じや、身体なんて誰のでもわかりませんよ」

「ま、まあね、紺はちょっと特別な女の子だから、わかつちやうもんね……」

「あ、そういうつもりじゃ――」

意外なところで暗雲が立ちこめてきたとき、いつかと同様、後ろの扉が開いた。

「失礼します。あ、いた。これ、紺じゃないだろうな？」

光太が右手に持つてるのは、話題の号外だ。

「……男の子は大変ですね」

「ぶーっ、ご主人様つてば紺の身体を全然見てくれてない！ もう、今日こそ一緒にお風呂だよっ！」

二人はそれぞれの感想を述べながら、駆け寄つてくる彼を迎える。

そして突然。

「松田くん、今度、遊びに行きませんか」

香苗の声が、部屋中に響いた。



Alice in dating simulation game

なぎ

「ちこく、ちこくー。転校早々から遅刻しちゃうー！」

この世の中というのはとにかくご都合主義なのだ。だいたいのことは偶然を装った必然だし、この世界では尚更だ。

あと少ししたら転校生の少女が角から飛び出して来て衝突する。エイ氏ことアリスにはそれがわかつていた。

目が覚めたら、ギャルゲーの世界にいた。そんなことを言い出したら、きっとついに頭のネジが飛んだのだと思われるか、それとも元々ネジなんてなかつたのだと思われるのだろう。誰かは「二次元への移住おめでとう」などと言ってくれるだろうか。

でもアリスにとってはこれが現実だった。これまでだって様々な体験をしてきた。うさぎさんを追いかけるところから始まって、小さくなったり、薔薇に色を縫ったりと忘れかけてはしまったけれどいろいろな体験をしてきた。また移動しちゃった、そんなことを考える間もいくらいで世界に適合してきたのだ。

一瞬暗転する視界。わかりきっていた衝突。運動エネルギーを保ったもの同士が衝突する鈍い音。事前にそれが起ることを知っていたアリスはさっと手をついて衝撃を逃がした。

「いたたた」

覚悟は出来ていても痛みは減らないのだから勘弁して欲しい。

一時暗転していた視界が戻ってくると、目の前には青いポニーテールの女の子が転んでいた。

可愛い女の子はどんな表情をしていても可愛いと思うほどのかわいい少女だ。

「いったーい。どこ見てるのよ！」

彼女の前方不注意のせいでもあるわけだから自分が完全に悪いわけではないと思うが、そんなことを伝えたところで彼女が聞かないということは経験上知つていた。

「ごめん」

とりあえずの謝罪の言葉を書けると彼女は「ふん」とそれを受け入れたのか去っていった。その出会い何となくの違和感が残つていた。

この世界での学校生活は非常に簡単だった。学校生活の大半を占める授業は聞かなくとも時間が流れていくし、授業中に当てられたとしても答えはだいたいの場合頭に入っていた。もちろんそもそも概念的にしらない内容があるはずだったが、そういって授業は知らないうちに流れていった。そういうえば男の子になっているのは初めてだったかもしれない。この世界では男の子らしく振

る舞うのは簡単だったけど。

休み時間や放課後には部活や委員会活動に参加することができた。幼馴染みのいるテニス部に参加したり、報道委員会に参加して先輩と校内新聞を作成したり。そんなうちに段々と彼女たちと親密になっていくことができた。どうやらそれがこの世界の目的だということに気がつくのには若干の時間を要した。

最初のうちは気の赴くままにすごしてみた。すると夏休みが終わって翌日から二学期がはじまるという日に、なぜかこの世界で最初に目覚めた日に戻ってしまった。

目的に気付いてからは一人の女の子に集中してイベントを起

こすようにした。

幼馴染みとの日々、万能な才能を發揮する彼女と才能に劣等感を感じるアリス。身を引こうとするアリスといつものように接しようとする彼女。それ違いから亀裂が生じて、またふとしたことからお互いの存在の大きさに気付く。ようやく互いの気持ちを伝えようとするときにも、目覚めた日に戻った。

部活に明け暮れることもあった。後輩の女の子になつかれて、彼女の秘密を受け入れた。でもまた、同じように戻っていった。何度もなく返しても、幼馴染みに起こされるあの朝に戻ってしまう。

記憶を残したまま繰り返すこと数百回。アリスはこの世界から抜け出すことの出来ないというのだという認識に至った。

「ようやく気付いたみたいね」

青いポニー・テールのティは屋上に立っていた。

数百回の体験の中で、その日誰がどの場所にいるかというのは何となく記憶できていた。屋上には誰もいないはずの日だった。

「これまでに気付いていると思うけど、この世界から出る方法はないわ」

「まあ、これだけ繰り返せばわかるよ。あなたは誰なんだ」

「僕は君が知っているところのうさぎさんさ」

「うさぎさん、あのうさぎさんなんのか？」

ティは最初に出会ったときに口にくわえていた、食パンのよう

なモノを取り出した。

それは食パンではなく、どうやら白い大きなディスプレイのよう

うだった。

食パンのようなモノが衝突した時に感じた違和感だった。これまでの繰り返しには存在せず初めて登場したのだろうか。

「これを持ち込むのには苦労したよ」

いつの間にか中性的な口調になつてティが続ける。

「この世界に君以外のものを取り入れるには主要な人物と入れ替わるしかなかった。僕がキャラクターとして入り込んだとしても出口を用意するデバイスは持ち込めなかつた。彼女が持っていた食パンに似ているデバイスをようやく探しだせた」

「僕は君をこの世界から助けるために来た。最初に君を旅に誘つてしまつたのは僕だったからね。戻ろうとするのに戻れない君を見ていて少しだけ手伝いがしたくなつたんだ」

「昔の君を模したアイコン、これを選択すれば君は元の物語に戻

れるだろう」

「テイはドレスを来た少女を模したアイコンを指した。

「それ以外のアイコンを選ぶとどうなるんだい」

「ティは方をすぐめて答えた。

「その選択肢は示したくなかったんだが、違うアイコンを選べば、これまでと同じように違う世界に移動することになる。どちらを選ぶのも君の選択だし、僕に出来ることはそれを説明することだけだ」

そういうと、ティは白いデバイスを差し出した。

受け取る前にあたしの選択は決まっていた。そのアイコンをダブルタップした。

世界がネストする。

遠くで古めかしいサイレンの音が鳴っている。システムアラートの音だ。良くあることとはいっても、迅速な対応を義務付けられているのでエヌ氏は休止状態から目を覚ました。

システムオペレータのエヌ氏は上司に報告のメッセージを送る。

「ジョブ "alice_29832" が異常終了しました」

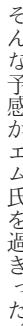
「了解。終了ステータスはどうなってる?」

「あーいつも通り、多重ネストですね。なんででしょうね」

「まあ、基本的に世界のエントロピーは増加する方向にある。それを観測するのもこの実験のなのよ。きっと」

「もちろん私達だって観測されている可能性もあるわけだけど」

「そんな予感がエム氏を過ぎった。



難解辛苦 テーマが悪いと思いました

春屋アロヅ

いつもと同じようで、いつもと違う二人。今回はちょっと突っ込んでみました。

<http://third.system.cx/>

川鶴鶏肋

珍しくもタイトルが一瞬で決まりました。舞台設定がもともとワンダーランドでした。目標は『戦闘はNG、でもバトル』でした。

相変わらず分かりにくいうお話しで申し訳ありませんです。拙作の珠坂作品群を前もって御一読されていると、少しあはわかりやすくなるかもしれません。

ではまたお会いできれば……

Lagado

巫女服は正式には巫女装束といい、大和言葉では巫の衣（かんのきぬ）とも呼ぶそうな。

<http://www.k3.dion.ne.jp/~lagado/>

Fukapon

予期せぬ不運が発生しました。2週連続で寝不足解消込み2日間仕上げです。みゅう。

もう二度と書かないと言っていたシリーズものに手を染めてみました。でもでも前作知らない全然OKなので、初めましての方も是非読んでくださいませ。継ぎ物としては紬の裏稼業を感じさせる鋭い物語に……なってない？ 紬をもう少し可愛く描きたかったなあとか言ってる当日未明です。

<http://www.fukapon.com/>

なぎ

テーマをずっと「alice in wonderland」だと勘違いしていました。そんなわけでそのままぱりで「不思議の国のアリス」の二次創作が出来ました（未完成ですが）。iPhoneを加えて自転車に乗っていた人を見たというTweetからiPadをトーストのかわりにしてみました。実際は大きくて無理だとは思います。

レイアウト

またもや巡ってきた半年に一度。本当は日頃からやり慣れておきたいんですけどねえ。あれこれ兼務だとなかなか。でも、自動化不足を感じたところは直しておくのです。

印刷・製本

今回は私が担当しないで済むって聞いていたのですが、どーなるんでしょ。

<http://www.projectkaigo.org/>

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 5
in wonderland

2010年5月30日 初版発行
2010年10月31日 第2版発行

発行所 まにふいくみやはか
<http://www.projectkaigo.org/>
印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2010 春屋アロヅ, 川鵜鶴肋, Lagado, Fukapon, なぎ,
まにふいくみやはか
この本は Creative Commons「表示 2.1 日本」ライセンスに従い頒布されます。
詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/> をご覧ください。

そろそろ表紙絵欲しいなーとか。
新しい参加者も募りたいなーとか。

いろいろ思うんですけど、あっという間ですよね。半年って。
まずはテーマを考えたいので、ご意見をお待ちしております。

**next issue
november 2010**
www.projectkaigo.org